

吾は久遠の凡夫なり
自分は若い學生たちが、しかつめ顔して教壇に立つて居るのを見ては、こそばゆいやうな感じがしてならない。で僧正の御誨を承はつて憚りあれど、私かに會心の笑を漏すを禁じ得なかつた。

吾は久遠の凡夫なり

外凡薄地のわれ等にありては、わが靈と肉とは、肩にかけたる振り分けの重擔なり。前に牽き後へに揺らぎて、わが行路の惱みとなる幾何ぞ。打成一片の工夫如々觀念の一團とくゝりて身に體せんは、さて腰弱の堪ふべきにあらず、喘ぎつ迫る我が生の旅は長き哉。

割居對峙して相下らず、水火相尅鬪争暫くも熄む時なし。わが内部生活の全野を擧げて、悉く靈肉鎬を削り、血を漂はすの戦圖に入る。兩軍勝敗の決、纏てわが心靈界消長の係はる所。あゝ怠りの利鎌の鈍り、律は八重とひろどりて、生ふし立てし撫子のなよ姿、露重たげの哀を風情といはむや。

しかすがに、靈は征者よ肉は賊よのわが目安の、支へし努力の弛みを潜り、下りては桁を亂し位を異にするぞ憾みなる。敢なくもわが靈は肉に囚はれ虐げられ、物なる周圍の窓高くして榮光身に逮ばず、迷執の枷鎖肌に食ひ入りて、慧命の息も絶え絶えなる、かくてもわれは靈王忠臣の名に死なむか。

われらが内部生活の記録なる、靈肉興亡の哀史に見ずや。他生曠劫遺し印せられたる、龍拏虎擲の迹、榮枯歴々心靈の山河は老いぬ。音に聞く鹿野の物語は、殊にも靈肉瞰噬の慘を極めたる。多年の苦闘、菩提樹下の王國を奠め得て、一たび降魔の血刀を拭ひたる大雄主は、更に三乗のつは者を勵まして、肉賊平定の王師を進めぬ。五蘊三科の方略や、四諦因果の策戦や、靈の天兵勢漸く盛んに、連りに感使の壘を斫つて、長驅無明の牙營を衝く。中にも目覺しきは灰身滅智の短兵、驍進挺前、敵と共に斃れたる。若夫曠日彌久の計には、戒定の制あり。腥辛滋味の糧道を絶ち、性欲の兇勢漸く衰ふるを待つて、一舉直ちに之を抜く。幾多聲縁の勇士、一期の生を戦に委ねては、辛くも羅漢の聖果を贏ち得て、無餘涅槃の領土に就きぬ。

あゝこれ遠き昔の夢譚といはんや。心界の歷程、首を回せば、一路坦として千歳の

雲に入る。抑も無始の元初に起ちそめし靈海の一波、真妄重疊迷と寄せ悟と返し、悠
久なる時劫の潮となりては、今に人生の汀を打つて、昔ながらの音も高し。されば一
代聖教は吾等一人の日記文證なりと古き聖ものたまへり。三祇百劫の因行といひ、
六度滿行の苦修といひ、三藏の記者が領解と追懐のかたみたる、八萬法藏の廣博な
るも、詮するに是れ今の我等が心象界の縮圖ならずや。實に物心靈肉の色とりどりに、
織りなす人生の彩を麗はしける。

我等が憧れの彼岸の風光、そは肉の虐げより放たれたる、光榮の民が自由の郷土
なり。離縛、解脫、出纏の欲求抑え難く、垂天の翼を張つて法界の碧落を窮め、下界遙か
に調伏せられたる肉の骸、吾が脱ぎすてし塵勞の垢衣を徹みて、勝利と輕安との誇
りに酔はん願ぞ切なる。吾世之を他にして將た何の務かあらん。道とは之を辿るな
り。徳とは之に達するなり。

性具の十界は造次にあり。一念の閃にも、まのあたりその相姿を現はす。十界は心
象の全地圖なり。展られたる断面に明暗の歴然たる、纏て我が修養の進路を示さず
や。凡聖色彩を異にして境を交へ、佛魔の岐路相錯綜して、靈界の分野に踏み迷ふ。佛

界の頂きは聖の醇にして、地獄の底は凡の精なり。四聖次第に降つて凡を離へ、四惡
趣は昇るに従つて聖を増す。天地相接し凡聖相交はる所、濃淡一抹、髣髴として人天
の二界あり。河水海潮會歸一味、混然無色の線を界として、神獸二性の領土連なり。腥
風吹き止まぬ古戰場を望む。佛祖が終りの記載に見ゆる人界の相こそは、降魔の凱
歌に據ひたりし關が原の舊山河か。悲願果てたる泰平の春の夜話にも入れ、我等が
稟生の依報としては、版圖未定の曠野なり。只夫曠野なり。是れ適々われらが努力に
希望を貽ひ、福無盡藏の沃土ならずや。

渾沌たる心界の峯頂、佛魔分水界に立てる我、願れば暗は後を鎖ざし、光は前に開
けたり。わが行くべきの路は一あるのみ。境は竹膜の決し易きに、何故ぞ精進の駒の
たちろぎ、向背の鞭のたゆたひ。ともすれば茨菰の路なきに踏み迷ふて、逃れ來し鬼
の栖かに後髪引かるゝ思ひ。頼み難きは愚なる意るか弱き力か。そも宿業の追手、執
拗くも影と添ひ、運命の長き黒繩、何くまでも我に纏ふにか。

一如本覺の寶渚を天の一方に望みつゝ、化城の旅を今もさすらふ、我等が果報ぞ
儚なけれ。靈肉相食むの慘禍に疲れては、安住の枕を高く、享樂の夢ぞ圓かなる究竟

の日の我に来る、轉た運きに倦じたりしが、時なるかな、留難繁き峻岳の麓、吾が爲の捷徑は期せずして開かれ、春風一路道砥の如く、身は飄々として蝶よりも輕ろく、花に憩ひ芳を逐ふて、無憂地の園生に暫し營みの翼を休め、若草もゆる陽炎の光は溶けて、我が魂は東の間を自由に生きたり。

我が身すこやかに、號虎搏つべきの意氣を負ひける昔にありては、燃ゆる肉の勢焰と凄まじく、漲る血汐の逸やりたけび、妖魔が勝鬨の喧しければ、いとゞ微けき心性の響は果敢なくも掻き消され、天上の秘曲と調べ通はす心の琴の音を絶えて、心耳を澄ます靈のさゝやきは、聞くよしもなかりしが、如來は長くも我に病患の鍵をば擬して、重き運命の扉を開かせつ、我を肉の重圍より脱せしめにしき導かれたる捷徑とは實に病患の一境にぞありける。

かくて壯健のこしかた、殺ぐに難たんせし肉の猛威は、病の力によりて、自ら其勢を滅じ、勞せず期せずして發得閑顯の機は調熟せられぬ、外幕の密雲漸くに薄れゆけば、自覺の碧空依稀として眉宇に迫り来る、靈性の山のたゞすまひ、官能の窓自から閉され、塵勞の風遮られてぞ、眞性の燈は花やかに輝ける。吾茲に六尺病牀の囚と

なりて、始めて放たれたる心靈の乾坤、水雲寛き我生を見たり。

病の日かす重なりゆけば、濁肉の垢衣時を逐ふて剝がれ、殻を抜け出たる洒脱輕利の淡き快感は、羽化登仙の思もかくや、枕頭方丈、我が四肢の自由は此裡に幽せられ畢んぬと雖も、我が思想の翼は彌々健かに、奔放縱横真空三昧の妙境に近づけるにも似たりけり。されば一搏に盡十方を周遍し、神通無礙なる風の大虚に遊ぶが如く、寶渚遙に鷲峰の霞に入り、本地の風光に接せんこと、亦必しも期し難しとせず。

一定不治の沈痾は吾を促して死の淵に驅る、纏て來らん最終の日、吾が生は残りなく拂ひ拭はれてこそ、我は眞の解脱を得べきなれ。久しくも惱まされつる繫縛の一切を舉げて、此砌にかなぐり捨て、赤條々の我を露はし、清凉池の甘露に浴みして、うらゝかなる恩寵の光を吸ひ、塔焉として一身大我の果界に融け入らむ、放浪淪落の窮兒、茲に客作の夢より醒め、久遠塵點の契りを温ねて、本因妙位に我と復活の新生涯を拓き、朗々たる本覺寶鏡の裡、我さながらの我が姿を浮べて、受用圓かに我れ面白の春を謳はむは、いかに榮ある生ならずや。我は我が病の齎らせる意義を味ひ、こよなき恵に感謝せざる能はず。

吾は久遠の凡夫なり

苦樂の顔料によりて人生の色彩あり。苦樂は儼かなる當面の事實なり。然も其存在たるや、性に探ねて虚度に求めて即ち逢着す。

相對の實のみ、比較の味のみ。苦の皆既を樂といふ、樂の盈は苦の缺なり。二者處を同するも時を共にせず。苦の暗消ゆる所、樂の明は自ら潮す。ぼかされたる首尾の連續なれば、劃るべき界線なし。是を以て苦の岸に遠ざかるとは、樂の沖に近づくのこゝろなり。樂を求むるは即苦を去るの法ならずや。

同一空間に於ける二者交互の消長は、纏て孰れか一方の獨自の隆夷と見るを得べし。薄暗がり、薄明りなり。無明は暗の別名なり。言ふ所、樂とは只無苦の状態に名く。素是一色濃淡の加減のみ。故に人生の全幅は唯一の苦の色もて描かれ彩られたりとは、いはんも亦可ならずや。

實に人生皆苦なり。苦は人生の全内容なり。總意義なり。人生問題の研究と解決とは、苦に始り苦に終る。苦の消長の道破なり。苦は苦を生み、苦は苦に接す。連續として延びゆく一線の、偶々薄く或は細く、僅に見ゆるかすれ間を覺めてぞ、人は樂と名けて群り湊るなれ。下り盡くせる谷の底は、上りそむる麓の路なり。後も山前も山、さ

やかなる峽に立ちて、安息の平地を得つといふも、只束の間の憩ひなり。

慘風凄雨五十年、吾世經しうき旅の空夕されて、茨の里に想出寒き旅日記、繰り返しては己れ獨りの秋をわび、吾れと囚はれの運命に哭す。然れども是は謂なき慨なり。人生は先天の具縛にして、苦果の依處と聞くからに、誰か囚はれざるの運命を有つものぞ。素と業報に逐ひ驅られて、擔ひ來れる生なるを、何すれど運命の相に吉凶是非を論つらふべき。強て色ありとせば、吾世を操つる運命に、黑白もわかぬ暗の色を見、其前に立てる人生の稍薄れたる、灰色こそ運命を反映したる影と見るべきか。

運命は禍津日の權化なり。遣使なり。是が寵兒たらんものは、生きながらの憂き惱みに富めるものならざるべからず。倅にして免れたる世にいふ幸の人こそは、却りて運命の繼兒といふべけれ。怪むべし、人は生々世々の堅き約束を忘れ、濱の眞砂に珠をあさるよりも、仇なる望みに奔り疲れ、何處在りかの幸も不知火に、思ひ焦がれて身を筑紫海の海底深く溺れゆく。笑止かや、最大多數の最大幸福の呪詛の叫びも、涸れ細り、荒涼たる人生の野末、夜寒の虫とすがれゆく音も憐れ。

吾は久遠の凡夫なり

樂を求むるは、苦を避くる所以なりと雖も、一向るに目を樂の一方に馳せて、現在の苦の立脚地を閉却したるは、適々苦を重ね樂を逸する所以なるべし。誠、苦より逃れんと欲せば、唯専らに苦を見よ、苦を念へ、貧を訴ふるに先だちて、富の獲難きをかこつものは、未だ眞の窮苦を嘗めざるものなり。人生を觀るは、好事の徒の消閑事なり。我等は人生を蹈むものなり、只今頭上に落下し來る巨巖を望みて、狼狽感へる我等ならずや。何の餘裕ありて樂を問はむ。

苦を人生如實の面目と知るからは、矯めて苟且の安心を求め、一時を塗沫して己を欺かんは陋ならずや。如かず流のまにまに身をば任かせて、徐ろに運命の當面に打開の工夫を用ひんには、誰か人生の目的、そは只快樂に在り、人は快樂を求めんが爲に生くといふや。標榜華に過ぎたるは甚だ厭はし。言へ人は只苦の壓迫より這ひ出でんと悶く痛切なる欲求の外、更に挟むべき他念あるなしと。

さばれ我が遂の栖は地の下八萬由旬、紅焰渦卷く無間地獄なるべし。我等此處に安住不動の座を占めて、白蓮風薫る清涼池を見出さむ。導師日蓮は是故にいへり、苦をば苦とひらけと。苦をば樂と觀せよとも、苦を去て樂に就けよとも、吾師は示した

まはざりき。我等が夢を護る安けき床は、うしと見し世の只中にありき。

遮にあらず開なり。拂拭を用ゐず、點睛なり。されば苦は排除すべきにあらざると共に、樂は拾納すべきものにあらず。福を外より招かんとするも不可得なり。幸は在所に開拓し、發掘して感得すべし。處世の要具は熊手にあらず、鶴嘴なり。

現象即實在の如々觀を以て之に擬せんとするか、等しく是れ鏡花水月の幸なく、主なきを、孰れを認めてか體とし、はた用とせむ。若し一體鏡の表裏と云は、孰れか是れ如性之修、背體之用ぞ。乃ち何を全うして其本に還らむ。もし又二者の各に個性を容すとせば、流の泉は何處にか歸する。更に並び立てる二つの現象に即して宛がら一理を見ると云はんか。吁、只是れ觀るのみ。依々たる現實の苦感を如何せむ。凡そ苦を樂に没して單なる樂に耽り、若くは苦樂兩ながら抹殺し、却りて無記を樂しまんとする如きは、畢竟して皆猿猴の水月たるべし。

我と身世の當相に意義を認め得るものにして、始めて善惡淨穢好惡喜憂の一切を趣味化するを能くせむ。趣味眼に映する世間相は、我爲の自受法樂境なり。天地朗々風光無盡なり。此處に厭ふべき穢土なければ、彼處に求むべき淨土なきなり。

意義と趣味と併しながら是れ、吾小見證底の眼界をしもいはむや。常精進不休息の瞻仰。大悲の流を掬ひて大靈の力を胎むに及び、そこに吾が充實の生を感じ、使命の權威を覺る。山川草木悉く普沾大愛の露に生きたる寂照の園生に、加被の恩寵に圍まれたる吾を見出でしとき、吾生茲に開かれたるの悦あらむ。吾所作即如來之感儀とならば、吾苦樂生死豈法界大我の苦樂生死にあらずや。吾は知る、一切の解決は只係はつて信樂決定の一楔子に在るを、執るべき向上の路は既に擇ばれたり、洋々たる吾前途なる哉。

健全なる精神は健全なる身體に宿るといふか。我が經驗は聊か是と撰を異にするに似たり。我に於て神と身との關係は適々逆比例をなせり。こは勿論靈肉二元の謬見より來れる、缺陷不具の狀態ならむも、如實知見未體達の外凡にありては、誣ゆべからざる現實の姿なるを奈何せむ。然れどもまたひとり私かに、かの大男惣身に智慧の廻りかぬる例しに併せて、才子多病の諺を思ひ較べては、我が經驗の必しも孤ならざるを想ふ。よしそは二つの者、等しく如體の用にして其性異なるなく、枝をつがへて共に茂り榮えんも、割かれたる精力は、擇んで一方に傾注せらるゝの勢と執

れぞや。我素と靈の黨徒なり。寧ろ肉を潤らすも、擧げて之を靈に灑がむ。以爲らく、謂ふ所肉に伴ふの神とは、或はかの感覺作用、官能の心を斥するにあらざるなきか。神經知覺は説の如く肉體の強弱に正比例をなすものなり。果して然らば我が靈覺は與からざるなり。

任地あれ、人生の開闢。苦樂生死の事また關心を須るされ。雨嵐荒ぶとも、吾が搖籃の夢は安かるべし。忍辱の鎧か、あらず。證悟の矛か、あらず。おろそかならぬ大悲の衛護は吾に在り。佛子吾こそは大靈慈父が憐みいつくしみ、偏に重かる病者なれ。受持信行の叫を擧げ、一たび如來大悲の御名を呼び奉らん、如來は立所に應じて吾に來りたまふ。籠の鳥啼て空飛ぶ鳥をいさなふが如し。機感と應導く。道交冥合ゆきかふ流の源に遡れば、佛性一如の淵ぞ靜かなる。幹枝同根の縁をふみ、父子骨肉の契を尋ねて、乃ち如來は果徳の財を譲り與へたまふ。一念の欣求に啓かれたる大慈悲は、春の日影と温く、執我の氷、渙然として宛からの我、いつしか本有の光に溶け入り、法性一味混然融會、栴檀林中亦餘香を聞かず。如せられたる小我は大我に參り法界に遍し、茲に全く色相を泯し、湛々たる一碧の大海、又百川の流を別かず。而も如せら

吾は久遠の凡夫なり
 一八四
 れたる我は淨められたる我にして、拭ひ拂はれたる我にはあらず。獨朗々たる大寶鏡裡、昔ながらの我の姿は臙ろげならず、小我に没して大我に浮び揚れる我は、有漏の肉團に無垢の淨衣を著くるなり。如來と共に在つて如來の事を作す。我之我にあらずして、如來之我たり、當體蓮華の姿、是を久遠の凡夫といふ。見性といはんや、往生といはむや。

内生活の盈虧

理想を現實の本地及び究竟處と仰ぎ、現實を理想に望みて所廢若くは所會の幻影となし、乃至理想を現實の設計圖雛形と見て、現實を理想の注文通りに仕上げんと焦せり、兩者の間に矛盾衝突を生ずる場合には、一も二もなく現實を叱りつけて、理想の脚下に屈從せしめずば措すとす。律義眞向の徒あれば、又それをば舊思想に囚はれた、前世紀の遺物と、後足で沙をかけ、理想なんぞは古の閑人が腹こなしのされ唄、我等近代人は現實徹底赤裸百貫と誇る行き過ぎ者あり。前者の唯理想にも

附かず、後者の唯現實にもなづまず、底までかきませずに措いて、上澄みの處で一致を立てん魂膽に、實理想現實を片荷すらぬ程に扱ひこなし、それに前後進退のけぢめをこそいへ、それより突つ込んだ勝劣取捨のわけへだては曾て論せず、そして兩者間の圓滑調和を計らんとする第三者あり。此人は兩方を立ておかんとする故、二者軋轢を生せし際には、前二人者の如く、片方を殺して一方を立つる簡明直截、手段は怖くて手が下せぬを以て正を得ず、且らく兩者の關係を絶ち個々に引き離しおきて、衝突を避けしめんと計る。是に於てか則ち曰く、學問と修行と智識と信仰とは水と油との如しと、更に曰く、信仰と生活とは水と火との如しと。前者は互に背反乖離して相容れず、二者各分を固守して和合を肯せずとなす。則ち調和の絶望なり。同處に於ける同時の存在を、難んずるなり。後者に至ては管に相容れず相離れんとするのみにあらずして、二者相冒し相尅し、互に搏噬鎗を削り、火花を散らして苟も雌雄を決せずんば止ざらんとす。故に是を一處に置に於て、大なる損ありとなすなり。抑も此の如く相背き相食むの慘害を見る所以、固と是れ兩者本然の性、自ら然るものありて、免るべらかざるに出るにあらず。素とより一なるべくして、二なるべから

ざるもの、況や相尅殺するをや、假令時あつて且らく分離對峙すとも、目足のかたらし各分に應じ、能を盡して相依り相輔けて、以て依止處に急ぐべきは其處なり。而も其然るを得ざるもの、蓋し理想と現實との深き契りは、時代てふ惡戯者によりて水差されしに始り間隙は遂に渉るべからざる溝渠となりて、兩者相隔つること倍々遠く、此岸彼岸路全く斷ゆるに至つては、あるは纜を解く幾くならずして、寶渚の方角を失ひ、霧の海波のまにまに行く方もしらす漂へる、さては時代思想の颶風、新舊二潮の逆流、狂瀾を物ともせず、ひたすら所期の彼岸を指して、現實の大海原を乗つ切らんとする唯理想者や、又は彼岸の所在を疑ひ、仇なる望みに努力の艣棹を抛ち、現實の此岸に錨を停めて、本能の舵枕に醉夢の生を貪らんとする唯現實者や、此等にありては彼岸の隔り甚だ大なるを見る。乃ち彼に惡闘苦戰あり、此に絶望の悲哀あり、張つて進むと、弛めて退くと、の異はあるも、理想と現實孰れか一に歸泊所を求むる所以に至つては二者同致なり。彼の第三者に至つては其孰れにも偏せざる態度に公正を示し、其併立に努むるは兩者を助くるに似て、實は二者の孰れにも忠ならざるなり。かの所謂過渡時代に際會して、理想と現實とに些の違却をも感せざる

者は、達人にあらずば時潮に觸接せざるなり。今此等を論外として、既に身を此淵中に投じたる以上、のるかそるの強覺悟を堅ためて、徹底決着とまで遣り切るを男とすべく、此點に於て前二人の旗色鮮なるを多とすべし。若夫首鼠兩端を持し不離不即のらくら乎として、眼前の糊塗に苟安を貪り、暗き烏鼠の生活に甘んずるものに至つては、其人の職に對する忠不忠よりは、先づ自ら欺いて辛うじて内省の痛苦より、一時も免れつゝある儚なき生を憐むべしとなす。彼の基督教にありては、舊教徒の頑然として古神學の殘壘を固守し、滔々たる時代智識の襲撃を事ともせず、日夜神と天國とを夢みつゝ、晏如たる。且は聞く大隈伯に面を求めて、其手甲に極樂通用の手形印を捺し與へ、欣然として自他の善根功德を祝福したりて、某宗僧の如き、超絶安住其内生活の充實飽滿して些の狐疑なく、何等の遠慮なく、理と事と一身に融けて怡々たる生を享受する。寧ろ健美に堪へたらすや。かの時代の寵兒を以て自ら居るの徒、泰西皮相の文化に心酔し、唯物主義の中毒深くして、夙く民族的性根を喪亡し、淵瀕常ならぬ時代の流に身を任かせて、浮き蘆草の寄るべ定めなきさへ憐れなるに、顛倒の思ひ溺没自ら樂つて出るを肯んぜず、外慕自卑迎合是れ事とし以

て得々新時代の人と號す。輕佻浮薄一世の風をなし、餘波教界の一角を侵して、茲にも亦新智識的宗教、合理的信仰の叫、黃嘴の群より擧げらるゝあり。他の因習制度打破の聲を傳へては、虚に吠ゆる教權革命の唱を合はせて、一時教界の山河を撼かすの觀ありき。彼徒他の風を追うて漠然故を嫌ひ新を衒ひ、内抑へ難き鬱陶と動搖とを感ずるにもあらず、外脱し難き教權の壓迫に苦しむにもあらず、號して傳承の草蘆を見捨て、新なる寶渚に憧るゝといふも、皆是時流の摸倣雷同に過ぎず、懷疑を口にし、懊惱を粧ふも遂に虚偽のみ、切實眞率不可止の要求に自ら追ひ迫まられてにはあらず。其自忘自侮、苟合に汲々たるや、經典神秘の談は故らに之を匿し、奇跡神話を以て詩的敘述と解し、五百由旬の寶塔は白髮三千丈の筆法を出でずと云て憚らず。神通不思議力の如きに至つては、勸信誘俗の慣手段、固より科學の關門に恐ありとなす。聖教を判釋するにも亦歐米の哲學を準繩とし、此を枉けて彼に會し、合へば則欣び、合はざれば之を捨つ。自我實現の倫理説の型に己心顯現論をはめ、物質不滅の粉本によりて五大法界の胡盧を描く。糊塗百端木に竹を接ぎ、之を號して時代適應の新研究、人智に伴ふ眞信仰と誇る。新か眞か、彼等所謂義學の囚を脱し得たりと

集 骨 叟

集 骨 叟

なす。而も忽ち又外道の奴となり了れるを知らず。順應は智なるべし、推移は賢なるべし。而もこれ適々内體の空洞虚脱を自白するものにあらずして何ぞや。節操識見意氣の中軸なく、輕きは羽毛に似て風に隨ひ流に任せ、浮沈自ら保し難き轉蓬の生、彼等自ら認めて開放の我を茲に見るといふ。縦し醉中の樂事は暫くは、彼等に無解決無主持の自由と光明とを誇らしむべし。而も天秋にして蕭殺の剽氣、一夜彼等が夢を驚かし、速々然として内省の寢覺め寒むからんとき、回顧の眸中に落ち來るものは、こし方の仇なりし。長き旅路漠々茫々として遠くも來つる吾さすらひの枯槁の姿、荒涼たる夕ざれのあら野の末に、一人さびしくも佇める、西風弊衣の袂を拂つて、慘たる落日吾生の影は消えゆくに、宿りを求むる木蔭も見えず、凍餒身に逼つて空しく悔恨の涙にくる。

自覺鏡裏の光景も亦慘ならずや。

啓蒙講師の配所生活

録内啓蒙述作始末

はしがき

伯夷が首陽に飢えし、百世の志士を起たしめ、屈原が汨羅に沈みし、千歳の懦夫を感せしむ。於戯、われ弱冠、曾て發す所の願望、法燈を四海に挑げては、奥習先師の遺徳を輝かし、天下諫曉の規模を完うしては、千歳の指擔に備へんとす。——如今一天法滅の秋に方つて、興行相續の孤忠を抱き、不惜身命日夜肝膽を摧くと雖も、時運逼塞して、政道上に明かならず。下人心の和を失ひ、横道邪義紛然として、競ひ起る。法暉日を逐うて漸く微に、祖道年を経てまさに地を拂はんとす。門家の危急旦夕に迫まり、怨嫉の災一身に集まる。悲い哉、護惜の寸心縲紲の下に屈し、卞和の玉は天外の配所に埋る。生還終に期すべからず、命は邊土曠原の露と消え、永劫不祀の鬼とならんとも、護法の一念魂魄此土にとゞまりて、遐代に再興の嘉會を待たんのみ。寂々たる清曉、是を思ふては宿因に涙を催らし、沈々たる靜夜、彼を思うて

は來果に笑み含む、然らば則ち、當詣道場掌を合はすべきか。何ぞ夕死の恨をのこさんや癡語問答抄録

水雲漠々、歲華悠々。懐ふ昔、滿城の落花の風、行くへも知らぬ春の名残りを、首途の袂に吹き返へす曉方、振りさけみれば行く手の空もかすかにて、入り残る月影おぼつかなくも落ちゆく末路をてらし顔なる。すみこしかたに見し影も今を限りには、あすは陽關の西の空、いづこの雲に宿りして、誰を知る人に眺めみん。易水風寒く雁山途長し。配所何れの處ぞ、再會期なき都門をあとに千里の旅。さなきだに露けきものを苔の袂に、更にも重ねる濡れ衣。幾夜片しくうき寐の夢も冷やかに。樊中に翼を折られては、懷を遣らむ長汀曲浦の眺めにも、あはれを知らぬ荒風に追ひせかれて、心もそらにさまよひ行く。塞烟關雨いふせき長路のいく明け暮れ、雲越しかたの山を鎖ち、沙路にわけし跡も消えて、寄せて返へらぬ沖波の、はてしも知らず放たれては、草庵の枕に通ふ礎あらし時雨をさそふに、一夜はしなく異境の秋を侘びそめてよ、寢覺めは永き幾歳月、ふけゆく吾世、さすらひの有明け暗き灯の下、形影相弔す半生の想出。

胡馬北風に嘶くとか、固より火宅の故郷を出で、一鉢の生涯樹下石上となせば、何處の空をさしてか家郷としも思ひ見ん、心から思ひ捨てたる此岸なるを、何にとて捨小舟寄る邊なき身をかこつべき。さては恩愛の絆に牽かれ、榮華を戀ふる妄執の卒塔婆を絶海に浮べし、鴻雁を胡地に放ちし、古のためしの哀れなるも、吾がなげきにはあらず。古りにし空に初霞、吹くからに東風とし聞けば、道がに袖を拂はせてもなつかしむ。年毎を春來れば、雁や燕のゆきかひ時をあやまたぬに、音にさく白頭鳥の影を絶えたる、はた何故の恨みぞや。已み難き護惜建立の一念、只管に法運來陽の曉を待てばこそ傾く齡を忘れ、甲斐なき命も惜しみはしたれ。

休ぬる哉、蕭條たる法城の落日。秋は已に一門の山河にたけた。寒烟永へに春を鎖し、江水咽んで還らぬ昔を語る。噫、虐悪の魔の咀、曾ては五濁の木下闇、しどろに亂れしむぐらをわけて、一味清法の句を濃く、から紅に染めなした草紅葉、燃ゆるん色は雲を焦がし、空に照り映え見えたりしを、一夜天寒蕭殺の聲に驚けば、箭風刀霜、颯々凜々として天を割き地を削つて起る。爾しより怨嫉の雨嵐日を追ふて烈しく、梢を拂つて散り零る門葉を追ひ駆りては、枝を裂き幹を碎き、はては根をも頭がへさん

す執念しつねんき祟り。

さしも虐威の風霜に傲りし常盤の林も、遂に跡なく枯れはて、残るは時雨も待たで色をかへ、なよ姿に風を迎へて、かりそめの榮に誇る蓬よもぎむぐら、醜草しうそうばかり時を得顔に生ひゝろどり、ふみわけし道は荒れ廢り、床りに匂ふ一本すらも今は絶えし昔みし花の園生は冬ざれて、曠野くれゆく世のたゝすまひ。蹉跎たり、伏櫪十年の壯志、憔悴として肝膽狼藉の跡を願れば、蒼茫たる暮色は早やわが背後に迫り來れる。

底事ぞ役々として思を風塵の巷に馳する。窮途潦倒、囊錐自ら苦しむも何の甲斐ぞ。往くも返へるも茨の里蓬が宿、とてもかくてもうき雲の、はれやらぬまを暮れゆく吾世なるを、遂の栖すまひを何處に尋ねん。期すべきは只靈山の曉の風、常寂の空のみぞと、朝には讀誦の窓、夕には觀法の牀、一念寂寥、世事水よりも淡く、蕭然たる環堵塵界遠く隔てもせしが、魔障の便りは岸うつ波の音、とわたる風にも、幾度か柴戸を漏れきて、尚冷めやらぬ心灰の餘爐を吹きぬ。はては海のあなた、魔群の勝鬘法滅盡のをどろしき叫びを傳へてより、三味の床は遂に再び閑なるを得ざりき。

徒らに永らへて、一門歿落の憂きめを見たるは、口惜しき限りにはあれど、省みれば歳寒後凋の峰の松、眺めさびしく世にふるとも、人こそ知らね壽に添ふはおぼろげならぬ使命の影、さはれためしの斧に碎かるとも、やはか埋もれ木と朽ちはつべき。そなれぬ枝に塵を拂つて、眞乗の風に調べを合はせし玉琴の音のみは、幾代をかけて絶えずもあれ、再興の春を心あてに、易はらぬ色を言の葉に止めおかん。江南折り残す一枝の春、萬葉の昔を温ねん人のなからめや。あはれ三寶も照鑑あれ。是を今生の思ひ出にと、頭にふりつむ老の白雪振り拂つて、猛然として聖者は使命に奮ひ起ちぬ。乃ち餘晷に青藜を剪つて一たび案頭に坐せば、一期の蘊蓄滾々として筆端に迸しり、正聲勁氣鏘然として楮表に鳴る。壯なる哉、磅礴たる教觀其玄底を傾け、羣釋たる義門其冲微を盡し、百家の粹を集めては珠を編み、古今の美を抜いては金を綴る。法海津を得、教山逕を闢いて、百代の龜鏡炳焉として法滅の秋に懸る。鬱陶たる心血傾け來つては、九回の寒暑も只半日の謂ひ、辛うじて禁制の法網をくぐり、衰老を粧うては客を謝し、乏しき衣鉢の資を舉げて楮墨に代へ、早や暮れなんとする日影を追ふて、只管に道を急ぎたる畢世の能事、苦心の大著は、茲に大半の功を竣り、一

夕薨爾として筆を擱けば、頽然として迫り來る老の波。

春晝秋夜、佗び居に長かりし配所のあけくれも、寢覺は儚なき短か夜の曉き方、松風ぞ吹く三十三年の夢の行方。

はてなき空に身のはてを見、かへさも知らぬ旅をかけて、更にも還へらぬ黄泉の長路を辿る。聖者が首途は淋しくもありき。屍をつゝむ二斛の鹽、棺槨を飾る一條の鐵鎖、それを魔群が鼻向け、殉教の骸に興へし最後の辱めなりしか。

時しも世は元祿の春の最中。うらやすの空も、長閑けき日の光、野山に満つる歡樂の花の風も、茲ばかりは限をのこしぬ。一坏の土冷かに、烟霞跡なく桃李言はず春の怨を二百年。

俯しては宿因に涙を催ふし、仰では來果に笑をもらす。寂々たる静曉、沈々たる清夜、窓前枕頭、折々の友と聖者が聽きし、風の音づれ雨のさゝやき、餘韻はかたみの詞にのこりて、偲べはさながら佗しき調べを、今に吾等が胸の緒に通はせ來る。

編者云、此篇著者が絶作に係る。自ら腹案熱せりと稱して病床筆を呼べるもの、未だ其成竹を示すに至らずして逝く。惜哉。

病床日記

さみだれの軒端にくらき頃なりき。かりそめの病と親みし枕の、たま祭るころとなりて、やうやうに重りゆき、手向草みそ萩の葉末におく露の命、あすをも待たで消ぬべう、なすびの馬に助けられ、靈山は良のわたどの方に急ぐ身と、一たびは永別の涙を老親の膝に滌ぎしを、宿業やつきざりけん、風の音、露の色、立つ秋のそれと知らるゝ、昨日今日、病少しく怠るを覺ゆるにつけ、つれづれのやるせなく、寝ざめの床に身の行く末を思ふては、かれゆく蟲の音をあはれみ、小雨をぼふる窓にすぎこし方を想出ては、そゝる友の戀しくて、云ひ知らぬ涙に枕つめたき夕なり。さらば病閑のすさび、重きは杵にも勝りたらむ筆とりて、思草そこはかとなくかきつらねみむ。かまへて人に示さんとにあらす、只己と己れを慰めんとなり。

〇〇日

梢に高く百舌鳥の聲、夜來の雨は軒滴に名残を留めて、うらうらと照る朝日影、露

を宿せる蜘蛛の絲、七寶の珠を貫き、碧瑠璃の空に、赤蜻蛉の一群、天高く氣澄める小春の朝、小搔卷重き身にも、自づと力の加はる思ひ、さりとは馬の肥ゆるといふに、瘦せたる腕の撫でらるゝ。

障子の棧の一二三、南天の影午に迫る。工場の汽笛鳴り止めば、町には遠き豆腐賣、飴屋がチャルメラの物憂げなる、蠅の羽音に山茶花の、ほろりと散りて一ひらの、薬瓶にかゝれる。森閑として、枕時計の音のみ高し。

日は納戸の隅より暮れ初めて、壁の雨じみ見分すなれば、野返りのひな歌、いづくへか消えて、夕風さつと芭蕉の破れ葉に音づるゝ。少しにても夜を短からせんとて、燈を呼ぶ故らに遅し。秋なり夜なり孤りなり、病のつものりくる時なり、言ふに堪ふべけんや。

澄めや觀念の悟の月、晴れよ妄執の迷の雲。とてもかくても永らへぬ命ならば、やがては絶えむ吾運命ならば、二十餘年の春秋に、光なき月、色なき花の吾が幸の薄きを恨みじ、一たび堅めし覺悟の臍の緒を、執著の刃に絶たれん口惜さよ。あはれ如來の引接の御手、今の間にとこそ祈りしか、凡夫なれや、喉元過ぎて忘るゝあつさは、秋

集 骨 叟

の扇のそれならで、珠數繰る指の、今はなほざりがちなるぞ淺ましき。
 瘧撃の甚しく迫り來りて、氣息絶えぬべう覺ゆる折には、魔酔藥の頓服、又は注射
 を行ふを常とす。藥に品あり、コロロホルム、コルラル、コカイン、モルヒネ等。モルヒネ
 は吾の最も好む所となれり。漸く身に慣るゝに從て効驗も次第に薄らぎゆき、果て
 は二筒三筒の極量を用ゆ。藥の全身に廻りゆくにつれ、初は陶然として快きを覺え、
 遂には茫乎として吾、吾を辨せざるに到り、昏々として夢幻の境に遊び、無何有の郷
 に入る。此時此砌の心地、拙なき筆の叙し盡すべきにあらず。知性感性全く其能を收
 め、嘔語囁々口を衝て出づ。日頃胸に秘めたる諸の思ひは、底を拂ふて口ばしる。醫の
 語るところによれば、歐米にては頑なる罪囚には、是を用て自白せしむる例しもあ
 りといへり。もとより五慾貪瞋の穢れに充ちたる吾の、よしや側にあるは兄妹骨肉
 の親なるのみにせよ、醒めてはそゝろに顔あからむ折もあるなり。

人は常に生きんことを欲す、生存は人間第一の慾望なり。此慾望の到底遂げ得ら
 れざるや、自個をあるものに托して生きんとす、子孫なり、財寶なり、名なり、金石に刻
 し矢帛に垂るといふも不朽の名、永久の生を希ふなり。別に一法あり、他の胸中に生

集 骨 叟

きんとするなり。曰く、お前死んでも寺へはやらぬ焼て粉にして酒でのむと。
 こは同情者の胸中に生くるなり。斯の如くにして快き臨終に就くものあり。あゝ
 吾が永遠の生處安住處は、唯本佛のみ懷にありと知らずや。
 モルヒネ注射二回、カンフル一回、こは心臓に異狀あるが爲なりとぞ。野風君より
 の繪ハガキに歌あり。

願くば千萬の神くだり來て

やむわが友をまもらせたまへ

茂林寺兄よりも亦

さし木すら手入れよければ雲突て

でかくなるちう癒れとく君

〇〇日

朝、廁の窓より隣家の柿の熟したるを見る。含嗽藥齒にしみて、秋も早や深うなり
 たるを覺ゆ。

病床日記

昨夜の病室は殊に賑かなりき。A兄B兄は更けて去りたれど、H君とM君とは看病の名の下に、予の側に寝たり。右左より起る鼾聲に惱まされて、夢はよもすがらやすからず。厚意は時あつて受くるにつらきものなるを思ふ。「お通夜のやうな晩とは、昨夜の光景を母と物語りて打ち興する妹の警句なり。

現在のわれを生かしむるものは、薬料にあらず、食餌にあらず、唯數多き友より贈らるゝ友情こそ、奄々たる吾氣息をからくもつなぎて、今日を送り、あすを迎へしむるの糧なれ。

深く因果律を信せば己が宿業に安んずるを得べし、今更どうなるものにあらず。理律の逆流に人力の轡棹なにかせむ。吾は拱手瞑目して既に定まれる吾運命の流のまにまに、身の行末を任かすの外に術あるを知らず。現世に現身の受くる諸の苦と樂とは、凡て宿業が招く所の報のみ果のみと觀せんに、將又何の憾かあらむ。東奔西走神に祝し鬼に祈り、あがき悶えて、降りかゝる災を脱がれんとするは、抑も此大理法を壊らんとするものにあらずして何ぞや。

否なり、君よ、定業亦能轉の金言は何事を示すや。吾等が行爲の轍は、因果律の濫れ

ず誤らざる軌道の上に置かれ、吾等が所作の手足は、條然たる宿業の絲に操つられ。思ふと思ひ、振舞と振舞ふ、四威儀の作爲は、悉く因の形に誘ふ報の影なりと雖も、吾等は天地の理法以外、別に超自然超因果の力を見る。此力、魔及び佛の所造にあらず。内にあるを信の力といひ、外に存するを法の力といふ。信とは感なり、能なり、主觀なり。法とは應なり、所なり、客觀なり。若し夫れ感應道交し、能所一如し、主客冥合せば、茲に混然たる最偉力を産む。劫火も焼く能はず、劫水も漂はず、能はざる此力こそ、自然を超越し因果を左右する大權威はあるなれ。帆を自然の順風に張りて、宿業の奔流を下る、怪巖忽ち前に横はつて、舟急ふかやうに迫るも、君はよく端座袖手して、艫棹を執らざらんとするか。

H君去る、M君歸り際に、蓄音器の聲色といふを聽かす。人の聲音を寫す器の、其聲音を復人の真似るといふは馬鹿らしきことなり。

一株のみ残して芭蕉を伐り倒さしむ。雨に風に秋の淋しさを告ぐる餘りに過ぎたり。汝が奏づる蕭殺の調べ、曾てはそを樂まむとて、窓近く植たるに、苦の最少限度を樂といひ、樂の最小限度を苦といふとは、吾の曾て言ひたるところなり。苦樂は相

對に存し、絶對には在るべからざるの謂なり。故に其量に於ても大なる苦を嘗めたるものにあらざれば、大樂を味ふ能はず、苦も從て然り。苦樂を刺戟より言へば、客觀に存するが如きも、苦樂にも個性あるにあらざり、別は主觀に在るなり。されば強き者大なるものが尙苦と感ずること、弱き者には樂なることあり。健康の人が苦と思ふこと——少くとも樂ならずと思ふこと——も病人には樂なるなり。健康の人は健康の樂を知らず、否、健康の樂に満足せずして、其上に五欲を貪らんとす。病人より見れば實に贅の極みなり。健康だにあらば、其餘の樂は願ふ所にあらざりと思ふ。病患漸く重り來れば、二十年三十年の健康はさておき、一年二年の無事を希ひ、病苦甚しく來る時は、唯僅に一日の苦痛だになくばと思ふ。此時ばかりは人が美味美色の樂を談るも、心動かすかゝる樂を得んよりは、先づ當面の苦を脱れんことにのみ焦心す。得樂など云ふは勿體なし、離苦とこそ願ふなり。

かくも思ひつゝくるうち、側にS君とY君とあり、S君は曰ふ、今茲の夏は凌ぎ難かりき。Y君曰く、否、大に凌ぎ易すかりしと。蓋しS君は昨年延山に夏を送り、Y君は滿洲の酷暑を経來りたるなり。兩君のいさかふを聴き居る吾は、獨りひそかに笑を

禁する能はざりき。

モルヒネ中毒の、いつとはなく全身に廻りて、今は筆取るに手の震へて、却々字をなし難し。吾も心皆顛倒の凡夫、知りつゝも五欲の毒に身をやぶらるゝ悲しさよ。

本門寺の太鼓、川崎大師の鐘、電車の笛、牛乳屋の車、最後が戸を繰る音で、病人には禁物の夜は明けるのである。鶯の高音がする、今日も晴れであらう。昨夜は露がをりたとみえて、新聞紙の濕りが手に冷やりと感ずる。各地の紅葉便りを見て、頻りに下駄をはきたい心もちがする。苦しむのは自分である、苦しませるのは病である。

病と自分とは、もと別のものではない、離すべからざるものだ。併し試みに自分と病とを別にして考へてみる、主觀の内に能所を立てゝみる。病は能苦、自分は所苦、そこで病苦は客觀となる、是を對境として觀を立てる。即ち當事者たりし自分を第三の地に轉じ、岡目的に病を觀する。すると自然苦は自分以外に在るやうに思はれて、苦を忘れることになる。自分は詩人でないから、病苦を詩化して樂むといふわけには行かぬが、唯觀じて居るだけでも餘程樂である。「止觀」の病患境とはこんなもの

ではないかしら。

懸花いけには朝顔が付けてある。夏の名残りの衰へたる儂、小さな花は昔日の榮華を偲び顔である。此花の季節は床の裡ですこしてしまつた。培養が届かなかつた故、珍種は消え失せたであらう。嘗に此花ばかりではないが、上等の種といふと必ず造り難く、多くは消えてしまふものである。上種といへば必ず複雑なものである。人類も野蠻人は頑健といふて、殺しても死なぬ體質を有て居るが、進化したものは多く虚弱である。それは體の組織が複雑であるだけ脆弱を免れぬからであらう。してみると自分は餘程上等の人間である。人壽が次第に短くなるも是理によるのであらう。

枕頭に樗の盆栽がある。五寸に足らぬ幹ながら、藎として雲を摩するの雄姿、天然の趣きを備へて居る。人は小盆裡に囚はれとなれる此樹の運命を憐れとみるが、僕は寧ろ斧厄の恐なく、天壽を以て終を全うするを、此樹の爲に祝ふ者である。

旅に病で夢は枯野を駆廻ると詠んだとき、芭蕉は暫しなり共旅情と病苦を忘れたであらう、それは詩化の働きである。併し自分は病を忘れるといふよりは、病を樂

むといふ域まで達したい。それも苦を轉じて樂とする譯でなく、所謂苦をば苦と知り、樂を樂とひらく底の地に到りたいと思ふ。併し今は苦を忘れるとすら覺束ない。治れば一に看病といはれ、死ねば藥石無効といはる、世に醫者はどつたらぬ職はあるまら。

如何に紋切形とはいへ、多分は飲み過ぎ食ひ過ぎから招いた死を、藥石無効の廣告は何事ぞ。在家はまだしも、人に宿業を説く筈の和尚までが、之に働ふとは沙汰の限りである。

未來の樂を説くのは、今世の樂の執着を離す爲ではないか。換言すれば著より起る死の苦を軽くする手段ではあるまいか。甘酒進上で、駄菓子捨てさせる方便ではないかしら。若しさうとしても、それは執著すべき富や名や眷屬やを有て居る者に限りて必要なもので、自分等には何等の効用を見出し得ない。自分等の如く生存そのものを苦と思て居るものは、より多くの樂を得やうとて、未來に憧憬るゝのではなく、苦を脱れん爲に生を捨てたいのであるから、未來の苦樂は風馬牛である。さりとては亦死んで花實が咲かうかやと、後ろから引留めるも、その手を拂つて、吾世

の春はもう去んだと云ひたいのである。

一枚の薄紙も重き空氣の壓力に堪え得るは、紙の兩面よりする氣壓の力相齊しきが爲である。貧は外より來る壓力なり、病は内より發する壓力なり。此二の壓力が相齊しきときは、弱き身も安らかである。若し孰れかに過不足ありて、平均を失はんとし、身は忽ちに破るゝものである。

反にしてあると賣れぬ品でも、幾つかに切ておくと、ぢきにはける。で呉服店では全き反物を故らに分截して、よせ切れと稱して客を呼ぶといふことを聞いた。随分と自分では骨を折つたつもりも、文章も、雑誌へ出したのでは、人が何ともいはず。なり書きの間に合せものでも、一部の書として出版すると、かれこれとはやしたてる。七十五日を限りとした世のうわさなぞいふものは、大概こんなものである。

一番嬉しいのは友人から來る手紙、配達人の聲がすると胸が躍る。たま／＼旭龍新聞一枚などくると、ガツカリして腹が立つ。

〇〇日

朝、淨手の時椽に出る。庭の隅にはすがれた朝顔や、葉の枯れたヒヤシンスや、其他夏草のいろ／＼の鉢が、ごちやに置かれて、末法の權教扱ひにされてある。廁の軒下に破れた蜘蛛の巣がかゝつて、蝶の片羽がひら／＼と下つて居る。冷たい風が頬髯をそよと吹く。垣の外を大きな嘯が通る。

春の夜は姫君の御惱にふさわしく、秋の朝は髯男の病むべきときである。

S君來訪、昨夜着京の由、旅装のまゝにて枕頭に坐し、面白い談しをしてくれる。行囊を解て一卷の古本を示し、どうだこれかといふ。手に取て見れば驚いたり、九字秘釋、何處から得たかと問へば、本屋からさと平氣なものなり。九字秘釋の名を僕が初めて耳にしたのは、故董上の御口からで、次で本間僧正からも承はつた。其は「戒體義」の例の「非眞言難知」と別記云々の件で、中山所藏の九字秘釋がそれであらうとのことであつた。次でそれを拜見してまた某師の談しを聞いたこともあつた。何んでも餘ほどの秘書らしいと思つて居たところ、先日主筆が刊行會の用務で中山の寶物を拜覽して歸ての御談しに、此書は大聖人の御筆ではなく、只の寫本である。尤も處々に御加筆はあるとのこと、まづ御所持品の一と見るべきものと思ふた。御著作でな

集 骨 史

いといふは、略ぼ解つたが、さてそれにはどんなことがかいてあるのかは、素より知ることではできなうだ併しもし、されど戒體義と關係があるものとすれば、多分は大聖人が御遊學時代に手に入れられた密部の口傳類でもあらうかと思ふて居た。勿論台密だか東密だか知るよしはない。で中山では此書を最も大切なる寶物として、貫首一人の外は誰れ人にも示さなんだ。それがどうであらう、今僕の手の上にあるとは、而も版本で、さまで古いものでもないが、併し僕の驚きは此書の第一紙を展ると、ともに消えた。書は別名を頓悟往生秘觀と云て、誰れあらう覺鑿の著である。覺鑿とは言ふまでもなく眞言新義派の祖興教大師のことである。此書は大師の著四十九種を輯めた「密嚴諸秘釋」の第六に置かれてある。あゝ、珍本秘書、それは唯僕の如き井蛙が付けた名であつた。

一往讀んで見る。他の奇はない、顯劣密勝は例の如く説かれてある。「我」といふ文字も一寸見えるが、「難知」といふほどの大事件も認められぬ。戒體といふことは少しも見當らぬ。

で戒體義と此書との關係に就て、僕はひそかに疑なきを得るのである。僕の見

集 骨 史

た此書は一般密部の主張である。強て關係をつければ一般密教としての、此書を戒體義と見るべく、特に擇んで是と戒體義との交渉を云々するは難きことではあるまいか。戒體義に説かれた密教は、強ち此書からのみ材を取られたものとも拜せられぬ。非眞言門の御言も限て此書を指したとも思へず。殊に眞言の戒體人見之不依師相承を可失故別に記して」と遊ばされたらには、御自作のものでなくてはならぬやうに拜される。それから戒體論が見えぬ此書を以て「別記」とするは、ナト變ではあるまいかとも思ふ。熱に亂されてる頭であるから妄想かもしれぬが、不圖こんな考が浮んだまゝ、今日の日記に誌しておく。

S君の示されたある文章を見ると、なんでも比丘谷全盛時代に宗門の根本靈場のいさくさが持ち上つたことがあつたらしい。つまり本家争ひで、小港では御誕生地である、池上では御入滅である、鎌倉では安國論御作地である、いふやうに引つ張りこをやつた。そこで延山側では、防禦として四處道場論をかつき出して、吾山は轉法輪地であるからとて、波木井書等を引て、頻りに本家本元はこちで御座いと呼はつた。すると他からは、いや身延はほんの御隠居所である、攝受行の地であるから

本家と立てる譯にはいかぬと突込む。延山ではまた、安國論を作られたから鎌倉だといふなら、御本懐をのべられた佐渡こそ本元ではないかと遣り返すなんて、ごたごたがあつた。随分と馬鹿らしい争ひではないか。是はつまり當時の坊さん達が、御書を拜讀しないため、こんなわかり切た愚論をやつたのであらう。

○大聖人の御三業に亘て申せば、何處とも一概には言へぬが、轉法輪地としては、僕は鎌倉を推したい。併し轉法輪地即根本靈場といふいはれない——宗家云々は一に御遺志に従ふべきものである——で紀念物等を存置すべき處は、此理にしたいと思つて居た。

○弟とも思つて居たM子が、清國へ行つてしまふとて別れに来る。華奢なからだ、をとなしい顔付につくづくと眺め入て、何だか可愛さうになつて涙が出る。M子も無言で子の顔をみて泣く。辱いからだが異境の風土に堪え得られるかと自分が思つて居るとき、彼は再び本土に歸る時、友は既に病の爲に亡き人となつて居るだらうと考へて居たのであらう。交ひに多くの言葉はなくて、寒さうな友の後姿は、室の外に去つてしまふ。雨はしよぼくと降つて居る。

〇〇日

A兄が延山よりの端書には、旗亭の仕切印が捺してある。嗅でみると果して地酒の香がする。昨夜某所にM子の送別會開かれ、モーショウ連の寄合書来る、中に

知己相逢期一酬

晃陽

杯の數かさなりて舌もつれ

茂林

簡情難說淚千秋

いつあふかしれぬといふも話哉

客天明日空回首

汽車の時間もけふはよく見る

煙簑雨笠出神州

浮流水雷今はない

新報来る。誰様か知らねど、拙著文學觀を評して、終りに「病める師が暇乞ひの形身か」は少く手ひどい。「嗚呼悲哉」の御送附は今暫く御猶豫を乞ふ。實は未だ當方にて「本人生前の遺言により」の準備もなき次第なれば。

熱が昂ってきた。臥て居る顔へ蠅がとまる。口もがくの地震をゆらした位では逃げさうにせぬ。遮莫汝の命も今暫しの間であらう、そこで暖まつて居れ。

〇〇日

古の宗門の學者は、他宗に對する防備若くは侵略上の必要から、學問をすべく餘儀なくされたといふ觀がある。從て其研究も消極的で引用の經釋なども破邪一方に傾て居る。吾等が今日衷心の要求から慰安とか救濟とかを、此等古徳の遺書に探るも、到底駄目に歸する。戦闘で安心は得られるものでないと自分は思ふ。翻て近頃宗門の學者の態度を見ると、大分積極的になつてきたやうである。青年側でも雜誌等に顯はれた思想を見ると、顯正の流が次第に勢ひを増してゆくのは嬉しい現象である。

何々相承、某々の口訣、餘人が見れば眼がつぶれる、などと嚇かしつけた法門も、實際は愚にもつかぬものが多く、眼がつぶれるどころか、開た口が塞さがらぬ始末、某流相傳に、大日如來嫡々相承日蓮大聖人云々とある古文書を見て、成程秘密口傳とはこんなものであらうと思つた。

よし形式の採用はあるとするも、密部思想の混入は決して認められぬ本宗教理に、密教研究の必要は、僅に曼陀羅圖式の一部位に止まるであらうと思ふ。

人格中心の宗義を有たなかつた天台は、密教に壓制された。叡山の雜亂史は、此一語で貫かれると思ふ。人本尊家の耶蘇教と淨土教とは昌えて、其餘の法本尊家は漸次に寂れてゆくのであらう。

今の自分は何ものにか飢えて居る、精神の充實を缺て居る、意義ある生活に乏しいで、心常に謂ひ知らぬ寂しさを感じる。孤獨の悲みに堪えられぬ。この飢は何物によりて醫やさるゝのであらうか。曰く涙、唯一滴の熱い涙で飽くことができると思ふ。自分の最も好める人によりて瀧が流るれば、それで満足するのである。あゝ自分が死んでゆく時、自分の頬へ此一滴を落してくれるものが自分にはあるか。瀧でくれる人は多少はあらう、而も自分の最も好める人が瀧でくれるであらうか。いや自分には最も好める人といふものを持て居るのであらうかと考へると、益々心細くなる。自分の臨終の前若くは後に、自分の爲めに泣いてくれるものがなかつたならば、自分はいつまでも眠ることができぬ。意義及充實を缺ける生は生でない、從て死も

落莫無意義のものである。併し自分は人に惜しまれて死にたいといふのではない。惜まれてとは名譽といふさもししい心である。喝采聲裡に幕を降す場當りをとりたいたは一の煩惱である。今いふ涙とは唯之を感受して、靈の飢を醫せば足るのである。ハートに痛を感せしめるほどの強さを有する涙である。生前に之無しとならば此後冷かなる墓石を暖かき滑かなるかいな抱き、一點の紅涙をその上に落してくれるものがあらば、わが墓は必ず揺らぐであらう。充實せる臨終、意義ある死は、かくして得らるゝのである。身分は佛陀大聖を最も好める人となさるべからず。甘露の御涙を以て飽かざるべからず。浮き世のさびしき人間の涙、われに於て何にかせむと思ひ切る。

此歳ももう逝くのである。自分を醒した秋と、自分を起たしめた冬とは茲にくれて、更に自分を新らしき生活に入らしめんとて新年は來るのである。法悦の春に大悲の光明をあび、充實生活の花不斷に咲き亂るゝ我とならんこと、近きにあるべしと思ふ。

形影錄

重さは杵にも似たらん筆とりて、そこはかとなく書きちらしみむも、暫し病苦を忘れんの果敢なきさびぞかし。芭蕉の雨に小夜ふけて、此行く秋を獨りわびしく病む吾ありと、人に告げむの嗚呼ならず。さりとはまだ露のひぬまを愛でませの馨と色は花なき吾身の上ならじ。頼める筆の命毛を、吾が息の根の短かさと較べみんも興なれや。其日其折、長きも數行、あるは全く筆とらぬ日もありぬべし。亡からん後はかたみ草、摘みん人のありとしきかば、宵は猶はその眠りいくばくか安かりなむ。

まだ寐ぬ人もありけり遠粘

電車觀

電車こそ面白けれ。

方丈の車室はさながら一小天地なり。人間社會の縮圖、仔細此裡に觀るべし。

電氣の力によりて車は廻り、車は軌道の上を行く、其止動は運轉手の司る所、車掌ありて乗客を按排す。

電氣の力は人間の世を、生々進化せしむる宇宙本體の力に似たらずや。一度身を此車室に托するものは、皆共に一軌道の上を奔らざるべからず、人間の運命なるもの亦斯の如くならずや。車は只定まれる軌道を行く、乗客のおのがじ、目指し向ふ處に到るものにあらず、客は僅に己が目的地により、近き場所を撰ぶの權利を有するのみ。人間意志の力、遂に運命に逆ふ能はざるを示さずや。運轉手止動を司るといふも、實に止を能くするのみ、動は彼の與かる所にあらず。宇宙生々の氣は人間の能く加ふべき處にあらず。唯その止息に至つては人力時に或は之れを能くすべし。破壊即ち是なり。見よ人は自らの手によりて死を早うするを得るも、生を長うする能はざるにあらずや。車掌は牧民の聖主なり、座するものには膝送り、促がして其の氣を得しめ、立つものには吊革に絶るを教えて、以て仆れざらしむ。醉漢病者は拒んで容れず、臭穢厭ふべきは諭して去らしむ。客には則ち喫煙を禁じ、裸身を戒しむ。實に彼は世に政教を兼ね布くの君主にあらずや。而て彼車掌なるもの才徳素と客に

勝るものにあらず、而も其位により其規則に法とりてよく客を左右す、客たるものは等しく彼の命に聽くの屈從なかるべからず。王侯の貴、勇者の力、以て彼を奪ふ能はず、偉なるかな車掌の權威や。

更にその客たるものを見よ、乗るものは生れ來りたるものなり、降るものは死にゆくものなり。長程の永壽あり、短程の夭折あり。早く乗りたるが爲に好き席を得る果報者あり、後れたるが爲に立往生の苦を見る薄命兒あり。紛々たる人間の禍福、畢竟亦是の如し。

かくて車は進み進みて遂に終點に達す、車の運轉は既に休止せり。茲に至つてか客の總ては皆降らざるを得ず。

噫、死は人生の終點なり、何人か終によく此終點に至るを拒み得ん。營々役々として人は皆、日夜墳墓に向つて急ぎつゝあるにあらずや。うつし世一幅の影畫、電車これ面白けれ。

ただ任せ奉らむのみ

集 骨 叟

昔者子來といふものあり、病で喘々然たり。人之を問ふ、曰く陰陽吾を死に近づかしむ、而て我れ聽かずんば我れ則ち悼むなり。夫れ大塊我を載するに形を以てし、我を勞するに生を以てし、我を佚するに老を以てし、我を息はすに死を以てす。故に吾生を善くするものは、乃ち吾死を善くする所以なり。今大冶金を鑄らんに、金踊躍して我且に必ず莫耶と爲らんと曰は、大冶以て不祥の金となさむ。今一に人の形を犯して、而て人のみ人のみと曰は、天の造化なるもの必ず以て不祥の人となさむ。今天地を以て大鑪となし、造化を以て大冶となせば、惡くにか往て不可ならむ。成然として寝ね、遽然として覺むと。然り別の才覺無用なり、吾は只眼を閉ぢ手を收めて、以て佛祖大靈の御計ひに任せ奉らんのみ。吾れ若し一度大靈の大能に信賴し、身を舉げて隨從の誠を捧げんに、憶度妄想の重擔忽ち去り、身心唯清く唯靜かに、適暢穩和永へに安かりなむ。

若夫吉凶も禍福も苦樂も生死も、もと是れ大靈の御計ひに出でたるを知らず、漫に聲を擧げ疾く呼で穢災避難の祈を求めんは、金の莫耶を期するにあらすや。吾生はもと運命の絲にあやつられたる傀儡のみ。こざかしくも稱へて意志の自由と云

集 骨 叟

ふも、知らずや四肢身體悉く絲條に繫がれ、舉手投足皆是れ他が操縦によるものなるを、あるにかひなく云ふに足らざる。小自我小主觀の角を振て、蝸殼の陋居に甘んず、陋ならずとせんや。夫れ自ら智を誇り力を頼むものは必ず敗る。自ら大となるもの定んで大ならず、自ら小を知るもの實は小ならず。自覺とは自らの弱く小さく、惡多く罪深きを覺るにあり。覺つて而て他の強くして大に無漏清淨なるを慕ふにあり。慕ふて而て私淑し、私淑して而して如同す。如同するに及で弱は始て強に、小は遂に大とならん。吾が處世處身の要、唯たゞ任せ奉るの一句にあるのみ。(十一月廿日)

苦句

病苦は又もや劇しく迫り來ぬ。

苦と心と一なる時、苦は苦しきなり、能所と分けて見よ、主客相對の時、苦は滅するものなりと聞けり。さばれ苦智苦境を鍛せんには、方便の止は句などよからん。摩訶止觀は機の所堪にあらざるべければとて、

明月に恨ある身となりけり

皮さりの思ふた程あつからぬにはづみを得て。

死なば今宵あな面白の虫の音や

秋老ぬ夜毎に細る虫の聲

主人病で今年の菊の瘦せにける

病床に母子相對す寒さ哉

此頃の痰よりも軽く出づるを、妹の興がりて、そは散文なりといふ。三文にもなりたるはてがらど、句ならずとは幸よき謎なりと笑ふ。

依智の夕の御恨みは示同凡夫のこと、これは迷の句もつたなし。

明月の知らで顔なる惜さかな

熱さめてみればお月もけるりかん

われ淋しあけまでうてや遠砧

聲刈れば頰骨寒し秋の風

われ死なば此行く秋を母人の

數多き友が様々の心づくし、嬉しきは唯涙なれど、世を永うするは苦を永うするもの、風情なき座に強ての御引留めは、有難迷惑と思ひ僻がめたる。

やがてあふ秋ぞかさといれ菊造 (十一月廿一日)

十一月某の日秋不斷なる吾病室に、時ならぬに春を生じぬ。朝の間は飄逸仙人島君の昨日山を出でたりとて、旅中に得たる様々の品、種々の物語に打ち興じ、はては近頃學びたりてふ寫眞術の試験すとして五蓋頭指面はその時箱の裡の收めらる。午下りては深敬病院の創立者綱脇兄の特に病を訪はるゝあり。世にも憐れなる天刑病者の物語に胸ふさがり、心から君が菩薩行の尊とさに感激し、其夜は例になく心地爽かなるを覺えて感興の湧き來る禁すべくもあらず。筆を落せば紙に聲あり、夜や更けぬらん、後林にけたゝましき蟲の叫落葉の音、今宵を限りに秋は逝くなるか。

如何にしてか苦をば苦と開かむ

人を見たら泥棒と思へ、病に罹つたら死ぬと思へ。人が病を恐れるのは死を恐れるからである。死に對する怖れさへなかつたなら、病は決して心を惱ましむるものでない、自分がかねて死を覺悟して居る。茲に覺悟といふは決意のことである。開悟の意味ではない。自分には生死運命などに向つて、悟を開いて安心するほどの力を有たぬ、只生死を擧げて信ずる本佛にお任せしたばかりである。是で別に心を勞

することは無い。で自分は慣れた故でもあらうが病に對しては餘り怖れを持たぬ。病は自分の苦でない、唯怖るべきは病の苦である。苦の感覺である。當面の苦、一大事實たる苦。

夜が明けると、どうして今日の一日を暮らさうか、日がくると、どうして此一夜を明かさうか、生死の事は自分の興かり知つたことではない。只晝夜間斷なく身を苦しめ悩ます病苦ばかりは、如何にしても堪えられず。前の苦、今の苦、後の苦、時の経過は苦の繼續である。時は何故に移り動くぞ、進み行くぞ、時さへその進行を止めてくれ、ば苦は續くまい。何處かに、時のない國はあるまいか。ある、それは死の國である。時の歩みとは吾の生續を客觀的に言ひ顯したので、吾なる車の疾走するによつて、時なる山河が奔るやうに見えるのである。即ち生の休止によつて時の休止を得、時の休止によつて苦の休止を得と思ふと、佛祖が早く御膝許へ召させたまはぬがつく、怨じられる。

けれども時の経過は、経過を意識する自我があるから、時はあるのである。睡眠若くは悶絶の間に時は無い。否時の觀念はない。苦が必ず時に伴ふとすれば、時を意識に登せなかつたなら苦はあるまい。苦を忘るは、時を忘るにある。時を忘るは、意識を時から外すにある。外す方法としては、意識を他のあるものに專注結著するにある。全體苦樂そのもの、本體から考へてみると、苦樂とはもと相對的に存するもので、苦と樂とに絶對の質といふものはあるべきでない。則ち質の問題でなく度、若くは量の問題である。故に苦とは樂の最小減度に名け、樂とは苦の最小縮時に與へた稱である。であるから自分が苦を苦と感ずるは、苦が時に其度を減するにより、苦の苦たるを知るの、僅に存する苦と苦との中間の時を樂といふのである。此時があるによりて、自分は苦を感せねばならぬことになる。若し初めから苦が一定の度を保つて増減がなかつたならば、よしその苦は随分大なるものであつても、苦とは感せぬ譯である。で自分は寧ろ苦の無間斷を希望する。つまり苦樂は價值である、價値の商量計度の意識そのものが苦なのである。それゆゑ當念の滅却乃至轉換が、忘苦の方法であるといふことが考へられる。

忘我の精神的方法としては、動中靜を發見する禪の打成一片の工夫もよからう。心を藝術美の上のせ遊戯三昧に入るもよからう。又は物質的生理的ならば麻酔

劑を服するにある。麻薬には苦を去らしむる効力はない。只苦を感じる知覺精神を麻痺せしむるにある。これも忘苦離念の理である。

消極的に云へば離苦、積極的に云へば得樂、稱は二でも内容は一である。此欣厭の情を充たす方法として、先づ豫め覺悟を要するは、多くの人が考ふる如く苦樂の外在性―苦樂を客觀に認める誤を去らねばならぬ。多くの人は快樂を偏へに外界からかきよせやうと考へる。同時に苦痛を内から排除しやうと計る。かくあせる者に眞の快樂は得られたためしはない、かゝる人は永久遂に快樂を快樂と感ずることの出来ない人である。それを客觀的に云ふなら、幸福は彼等に來らぬといふ。知らずや快樂の稟受とは、吾稟けたる天分領域の内から、自らの努力によりて、それを發掘するにあるを、即ち内觀内省の法である。内省によりて得らるゝ快樂は無盡である、無量である。源泉滾々として汲めども涸れぬ。内省によるものは、常に快樂を求め得らるべき場所境遇からのみ快樂を受け得らるゝのみならず、快樂の鑛脈すらなき逆境に在つても、よく自ら快樂を採り得る。以上をその裏面から考へれば、とりもなほさず離苦の方法となる。

これは勿論か得天台禪一流の觀念觀法ではない。心頭を滅却して初て火が涼しいのでもなければ、二而不二であるから苦樂同味なのでもなく、強て澁面作つて苦を忍ぶのでもない。一時的麻酔的觀念法は只塗抹である。縫縫である。永久でない、堅實でない、猶ほ作意に墮してゐる、矯めて居る手が離れぬ間のことである。吾等はそんな手數のかゝる面倒な仕事に堪えられる機ではない、もつと簡便な手つ取り早い良法はあるまいかある、たしかにある。

由來三界は皆苦であるといふ。所依の世が苦である上に、能依の吾も亦苦果の身であるといふ。苦は實に空氣の如く何處にも遍滿して居る。人間は暫くも苦から逃れ能はぬ約束の下に生きて居るものである。然るに何故か人には皆苦を厭ふ情がある、争うて苦から脱しやうとあせる、其結果が弱いものは堪えきれずして、苦に屈服し身と世とを捨てる敗者即ち灰斷者流を出す。一方には苦海を乗り切り、苦と奮闘を續けて居る勇者もある。此の苦にへこたれると、押し切るとの二方面が、人間禍福の岐るゝ處で、處世の分水嶺は此處にある。故に世に覺者が人間を導くにも如何かして、かのへこたれ者を出すまいと云ふ考からして、三界は苦であると説くと共

に娑婆は忍土であると教へた。それで猶ほ意得しないものには種々の道具立を示してゐる。執着が苦の基であるからとて、浮世を三分五厘と豫じめあきらめさせて置くやら、未來といふ美しい書割を遠く見せて、現世當分の辛棒をさせるやら、極樂淨土の甘酒を匂はして茲までおいでる中の我慢をさせるやら、あやしてすかして口直しを目當てに、苦い藥をのませるやうな小供扱ひも澤山講じられた。すると一方には又自稱強よがり連があつて、苦の尙此上にもれかし限ある身の力ためさんと、齒ぎしりの瘦我慢もするが、要するに皆兒戯だ滑稽だ。今の自分の苦はそんなことではどうもならぬのである。

説て茲に至て、吾人は吾人の執る所を正直に告白せねばならぬ場合になつた。吾人は方法として前に内省法を擧げた。單に内省といへば自力一方の如く聞へて、禪の工夫鍛鍊と簡ばれぬやうである。併し所謂内省は、自覺の門から入て、逆境の恩寵てふ堂に昇つてからの仕事である。恐懼敬虔の情を緯とし、荷恩感謝の念を経として織りなされた錦繡の茵の上に坐する果報ものゝ能くする所である。この逆境の恩寵なる意義及び其の感得時の怡悦は、章を改めて別に説かう。今に端的に究竟法

を開示する。

生死は人生の一大事である。此生死さへ佛に任せ奉れる自分が、寧ろ部分的な苦痛を荷厄介にして居るとは、其意を得ぬといふものがあらう。然し自分から言はせると生死——特に死といふ事は、左程大きな問題でない。死は何時でも得られる苦でもない。然るに苦痛は自分にとりては最大事實である。死よりも重く強き事實である。經驗に乏しい人からは、死に比しては言ふに足らぬものとせらるゝ苦を、自分は寧ろ後に取扱ふのである。で今度は彌々やりきれなくなるに及んで、佛を呼ぶことになる。此眞要求は苦の度も正比例をする。其極度に達して初めて窮すれば通ずで、佛の悲願力を見得し信順し、吾一身の苦を擧げて、之を佛祖にお任せする。苦を佛に譲て自分は肩抜けとなる。忘苦否離苦の法は眞實此外にない。此上にない。勿論是には前提として深く佛祖の慈悲と、救済の力とを信じ奉り、自分と佛祖との本末父子の關係を體得し、感謝報恩の熱涙潜として進む底の質直柔軟の心を要する。苟も此心地に住し心眼一度開かんか、救の船は眼前に横はつて吾等を待て居る。吾等は一投手の勞を以て身を托し得る。水を渡るは吾力ではない、自分は手足を收めてちつ

として居ればよいのである。一度佛に任せ奉れる上は、吾苦は吾苦でなく佛の苦である。吾は與からぬ、何と安穩ではないか。且此お任せも無理からお頼まうさずとも、佛は願を待たずとも、引受けてくださる御誓である。佛子日蓮大聖人も一切衆生の苦は日蓮一人の苦なりと仰せられて、吾等の苦を一身の雙肩に荷つて立つ御思召である、御辭退申さず御任せするが柔順な衆生といふもの。

忍難の堪不は本化迹化能力の分岐点である。忍難とはたゞそれ堪苦である。今吾が病惱痛苦現前せん時、徐ろに想を六百年の昔に馳せよ。鎌府街頭瓦石の雨、北海孤島烈膚の雪、本化上首再誕の御身を以て、御痛はしや、かうも艱苦を嘗めたまふ、一念思ふて茲に至る時、吾等一身の小苦の如きは、之を口にすることも尙空恐ろしき心地して、苦はいつとはなしに消え失せ、感謝の念、法悦の心、油然として念頭に漲るを覺ゆ。先哲竹山這間の消息を道破して曰く、宗祖九年尙忍苦、吾儕一日豈辭勞と吾儕忌苦の秘訣只是のみ。

病苦は自分をして無邪氣ならしむる、小兒に歸らしむる本然の眞面目に復せしむる、眞卒ならしむる、誠實ならしむる、柔順ならしむる。人世に對する紛々たる計畫

や欲望や執着や我慢や煩惱やを捨てしめる。あゝ是れやがて佛の寵兒たり得る資格を作るものではないか。一切を擲却し去つて、而して更に一切を擧げて之を佛に任せ奉り、一筋に縫り奉る恭順信隨のまごころの泉は、苦痛懊惱の岩石を穿て、始て吾等の胸に送り出づる、苦痛の焰が我執の鑽石を溶かし、煩惱無明の泥沙を去り、佛性の金の堅き塊を水の如く解かして、解脱の型の中に流し込む。古哲の病は善知識なりといひ、高祖の病によりて道心は起ると仰せられたも茲のことである。されば自分の病苦は天罰でない、懲治でない、應報でない、自覺の扉を開く鍵として、佛が吾手に授け渡したまふたところである。天啓である、暗示である、弄引である。故に自分は此賜物を愛護せねばならぬ。珍藏せねばならぬ。病苦は悪魔ではない、賊でも敵でもない、自分に取つて唯一の味方である、保護者である、導師である、知識である。苦を苦と開く法は、かくの如きものではあるまいか。

若夫れ如上の纏説を見て尙合點が參らず、疑を其間に挟むとならば、吾人は更に他山の石を拾ひ來て、惑者が衣裡の珠を磨かむ。

吾等十字架を仰げば、何故とは知らず法涙潸然として下る。而してこの熱涙は吾人の全體魂を震

盪し破砕し和融し清淨化する。如是して十字架は吾等に對して教たり贖罪たるの意義を有し来る。維摩が衆生病めるが故に我病めりてふ貴き語の意義に觸るゝを得たり。彼は一切の病を直ちに白個の病と痛感したるなり。而て一切の病を贖ふ菩薩行に任せざるを得ざりしなり。われはまた此因縁のための故に、一朝始て強く基督の十字架上の意義に思ひ當たることを得たり。衆生の罪は基督にありては客觀の事實にあらずして、直ちに彼は深き靈魂の柱を咬み來る滔天の罪なりけるなり。而して彼はその無上の同情と勇氣とを以て一切の罪を自ら負ふて、その雪より白き小羊の血を十字架上に漉ぎつくしたまへる也。一切の罪を直ちに自己の罪として神の前にさゝげたる懺悔の聲にあらずや。

(網島梁川氏 回光録)

無心の頑石尙法を聽く、知らず當年龍口刑場の敷皮石は今如何。片瀬の靈場に詣でて親り彼の石に對するの宗徒、果して基督教徒が十字架に接する如き感想ありや。敷皮石は吾等の血を湧さしめ、吾等が心琴に靈しき響を傳ふるの力なしといふか。敷皮石は實に末法救世の導師が一切衆生の苦を一人に負ふて、無間地獄の途をふさぎたまひし道標べではないか。觸るれば權者が血の温みは今に冷めず、拭へば大聖の涙の潜りは今にひぬであらう。さるにてもひたすらに功利的信仰に走せゆく今の宗徒の、さもしき心や。

法華經が私共に垂示する教訓は無量無邊でムリますが、私が此經典を病的生活の用に供しますのは、其思想の博大なる處に存します。法華經八卷序品第一より勸發品第廿八に至るまで、之を讀過いたしまして、さて其全體を取纏めて之が印象を再現せんとします。は、私共はどうしても身を大虚空の最高處に措きまして、此靈山の大會を俯瞰するやうな心持になりませればできないのでムリです。いやそれでも中々六ヶしふムリです。則ち此經典の所説が時間空間を超越して、而も具體的であるからでムリです。此博大なる思想に打たれますると、私共が六尺の丈夫として雄健なる意志を有しながら、唯僅に一箇の痛苦の爲に悩まされまして、煩悶するといふことは如何にも勝甲斐なき有様なることを反省致しまして、私共は千恨萬悔、穴あらば道入りたき心地が致します。

(近藤常次郎氏 病臥三年)

止みなん止みなん、また説くべからず。吾等は病居士近藤氏に對して千恨萬悔穴あらば入りたき心地して、もはや筆を進むる勇氣はない。

生天成佛非吾願

かねて承及候即身成佛と申候こと、如何に法力の妙とは申せ、我等の機としては無理な望みかと思はれ候。御教には背き候かなれど、唯何となく望み難き望のやう

思はれ候て覺束なく存じ候。經文を拜し候へば、見佛すら尙不惜身命と説かれて候。近づき奉り仰ぎ奉るだも容易きわざにあらず、まして自ら佛になり候はんなど空怖しき限りに候。惟へば過去遠々の昔より、罪に罪を累ね惡に惡を積み、借錢に首も廻らざらんやうなる我等こそは、朝暮唯未來は一定無間と怖れおのゝき居るべきに候。黒惡深重の身と深く自ら恥ぢらひ候處に、何でふ作佛の授記のと非望謀叛の心おこるべしや。助けたまへ救はせたまへとこそ念願せめ、おほけなくも自らの力もて悟を佛と同じうせんなど思もよらず候。たゞ質直柔軟にして一心に佛を戀ひ憧がれ奉りて此の生涯を終らんこと、我等が分際と存じ候。如來の大悲萬一にも此の穢れたる肉團を捨てたまはずとならば、かてゝ生を替へ死を更へ、三祇百劫の曉を期すべしとならば、それをこそ心の頼みとして快樂安穩の月日を送り候はめ。さるにても何はとまれ佛を見たてまつるに、身命を惜まざる程の大勇猛心大決定心の速かに出よかし起れよかしと、吾と促がしあせり勵み候外、今の我等は他事なかるべきに候。餘念なかるべきに候。その餘の思ひ望み企ては皆仇事と堅く心に誓ふべく候。恐々。 (十二月八日特に此項を吾奇峰道兄に上る)

辻説法

島の君は枕頭に來りて、奇峯の君は書を寄せて、共に上野の辻説法を談ること審なれば足なへの身をも忘れて、徒らに遊意の抑え難きをかこちける程に、兄なる人之を憐れと聞て、わが爲に其寫眞數葉ををこしける、さばれ吾に不動而遊の術あり、強ちに能因の故智を學ぶといはんや。

小春日和の日さしうらくと、暖かさは潜める風も這出べきに、まゝよ後の苦は半日の清遊に購はんと、強て醫に乞て麻藥の量を増し、家人に扶けられて上野公園に行く。

織りなす錦二月の花よりも紅なるは、各派妍を競ふ展覽會、人工美の秋色は今や正に櫻ヶ岡に酣なり。

美術協會、白馬會、無聲會は、そこゝに看過しつ、目指せる文部省のそれに到て、足を停むること頻りなるは、強がちに吾疲れたるにもあらざるべし。

日本畫中傑作の七分佛畫もて占められたるが先づ嬉しく、場中の大作價三千金と稱する「大佛開眼」、人物の表情いしくも描かれたる「悲報」に接したる佛徒の歩み。壯

麗精緻人目を驚かす「釋迦と頼王」威容端嚴仰ぐものをして自ら頭を低れしむる「賢首菩薩」其他「出山」「降魔」「羅睺羅」等入神の筆の綾は、洋畫部が俗悪なる裸體畫に充たされたるに比して、茲には崇高森嚴の靈氣漲り漂へるぞ芽出たき心地すれ。

中にも洋畫の「南風」と共に場中白眉の譽を博せる「辻說法」の前に至りて、吾歩はひたと止まりぬ。

看よ、香染の衣裾短かに、右手に經卷を捧げ左手に念珠を繰り、焚たる眼ざし群衆を射すくめて身動きすら爲さしめず。時こそあれ、朗々口を衝て出づるは四箇の強折か外冠の豫言か、背後に樹てる妙法五字の旗、さしもの小町の辻の朝風に飄がへりて何ぞそれ勇まししの光景や。

是も亦三類のかたうどか、怒れる髪は天をつき、刀を握つて詰めよらんづ武士のものゝしき。憐れ身知すの夏の蟲、古鞋を投げつけて心地よげに嘲へる道心のはしたなき。さては握れる柄の手もゆるみて、半ば聽惚れたらん行者のうつけ顔、あるは渴仰歸依のまごころ面に現はれて合掌の指白き上臍や、肩荷を下して地に蹲り今日のあきない忘れ顔なる物賣りや、群衆個々の面にはかくしもあえぬ怒りと驚

きと憎みと喜びと、人様々の想ひ振舞、凝視之を久しうして人は皆生動せんとす。惨たる怨嫉の風は獅子王の衣手を吹き、誇國惡時の毒氣は一幅畫圖の裡に澎湃たり。吾はいつしか身茲に彩畫の前に佇めるを忘れ、飄として想を六百年の昔に馳すれば、萬感胸に溢れて涙雙頬を沾し、低徊願望逡巡として去る能はざりき。

技の巧と拙とは吾素より之を知らず、作意の何たる亦問ふ所にあらず、吾等は但に時代風俗を示す題材として此圖を看過する能はず。吾等が年久しくも吾と吾が胸臆の統地に、想像の拙き筆もていとおぼろげに描きなされたる渴仰の主の影は、茲に大才の彩管を待て始て輪廓の正きを得、深くして且強き印象しかと現はされたるにあらずや。若夫中心たる說法者に霸氣の強み餘りありて、慈悲忍辱の暖かみを缺きたりとの評は、吾も與みする處なれど、這般の作者に餘り多くを望まんは酷なり。かの岩根に咲ける一本の畫顔の、楚々たる風情床しからずや。特に是ばかり濃き顔料もて點出されたる、作者に何の意ありてや、吾は殊に嬉しと見ぬ。さるにても、吾家の教祖を世に介するもの、其門流より出るなく、却て門外の藝術家に待つが如き、かくても世を澆季と云ふは非なるにや。

兩端の一致

富豪岩崎某曾て嘆じて曰く、天下遂に美味なし、唯口腹に適するもの粥と梅干あるのみと。

旨ある哉言や、夫れ粥と梅干とは其物至て微賤、價の廉にして得るに易き、乞丐の徒と雖も尙よく之を口にす。

豪奢一代を歴し、欲する所求めて得ざるなき彼が富の力を用て、山海の珍味を漁り盡し、而て其飽く所は粥と梅干とに在て、大半の滋味にわらずと云ふ。多謝す、天意の人に公平なる、茲に於ても亦窺ひ得らるべきにわらずや。

今夫、粥と梅干との味は貧賤の人、初より夙に之を解す。彼れ富豪の徒は他の所有珍味を嘗め來つて後漸く其味に達す。貧者は貧の爲の故に直ちに是に至り、富者は富の爲に障へられ迂回して後に入る、二者の彼岸はもと一にして、之に到る前後遅速の差は實に斯の如く甚しきものあり。貧者の福は且く措く、彼の富者なるもの、不幸に至ては、吾は轉た同情の念に堪へざるなり。

豈嘗富の人を害ふのみならんや。美人薄命に泣き、才子多艱に嘆く、皆恃て而て驕ればなり。健者の健を挟み智者の智に依る、亦自ら賊し阻て道に到り難き所以なりとす。

健氣にも求道に志を發こせる疇昔、身の健ならざるを嘆き、資の豊ならざるを悲み、性の敏ならざるを憂へにし吾の、若し此の富豪の述懐に聽くことなかつせば、殆くも亦迂回羊腸の峻道を辿るべかりしなり。噫、貧しき者よ、愚かなる者よ、而して病めるものよ、郷等と吾とは眞に福なる哉。郷等と吾とは幸を天より授けられたる佛神の寵兒にわらずや。慶して可なり、誇りて可なり、何ぞ自ら卑うするを須るんや。

(十二月十日)

來世有無

客あり病叟子を叩き卒爾として問て曰く、來世有りとやせん、はた無しとやせむ。叟子答て曰く、或は有、或は無。

曰く何ぞや。曰く佛有と説く、故に有。佛無しと示す、故に無。

客の曰く吾來世を問ふ。子答ふるに佛を以てす違はずとせんや。且夫れ有無不定、
 卿の魂魄はた何くにか適從せむ。惑て而て安からざるなきを得んや。答て曰く否ら
 ず。吾は佛を信するのみ、信じて而て依り、依りて而て委ぬ。迷悟と色心と苦樂と生死
 と既に擧げて之を佛に委ぬ。即ち現世の苦樂、未來の浮沈、唯佛の命是れ從はんのみ。
 地獄と極樂と豈自ら擅に簡擇するを須るんや。若夫、既に佛に任せたるの後、尙且つ
 自ら厭欣を主張し、去就を計らんとするが如きは、是れ佛を疑ふなり。欺くなり、侮づ
 るなり。罪を佛に得るのみならず、自も亦安住の家を捨るに畢る、愚ならずとせんや。
 海に浮んでは舟師の力を信せよ、山に攀ぢては東道の知を頼め、狐疑徒らに自ら苦
 むも何の益する處あらん。現世は留難にもあれ、未來は惡所にもあれ、佛意難知、吾は
 與からずして可なり。併しながら是れ安固怡樂の最大善巧にあらずや。客笑て去る。

無題

今は亡き數に入りける紅葉山人が晩年も、吾と同じく麻藥の毒に耽溺して、復救
 ふ能はざるに至りしなりとか。山人が知己門生に此世の別を告げたる觀月の席に

苦しくも吐きたる、モルヒネの量増せ月の今宵なり」の一句こそ、覺えある吾には斷
 腸の聲とも聞ゆなれ。吾も亦此夏には、モルヒネのきくまでまでや時鳥とそのひそ
 みにはならひたりしが、山人が名の唐しからで、麗しく榮ある散り際は、名無草の望
 みて得べきことかは、「もみぢせで散る草もわり木下蔭などわれと嘲らんも拙しや。
 往昔は俳聖芭蕉が難波終焉の砌こそ羨しくも麗はしけれ、「吹飯より鶴を招かん
 時雨かな」と、其角のこたへける、「しかられて次の間に出る寒さ哉」と支考のしはれた
 る、去來は「病人のあまりすゝるや冬ごもり」とむつみ、丈草が「うづくまる薬の下の寒
 さ哉」の誠ある、いづれか師を思ふ情の疎かるべき。よしや木曾殿とせな合せの眠
 は寒くとも、枯野の夢は暖くも結びけぬ。さても風さぶみ入合の鐘さびしかるべき
 吾臨終の夕や如何に。

(十二月十三日)

自覺の除夜 復活の元朝

霜にさえゆく除夜の鐘、むすびもあへぬ一歳の夢を驚かし、聞もる風の寒ければ、
 人は枕を欬て同願の首を搔ぐ。大晦日は是自覺の夕ならずや。

今朝たちわたる春氣色、松に照り添ふ初日影、晴れたる空に鳴く鳥の音さへ勇ま
しきに、人は衾を蹴て希望の瞳を耀かす。元朝は是れ復活の朝ならずや。

昨夕慚愧の涙の汗れ悔恨の痛手の痕、今朝若水に名残なく拭はれ清められ、血は
新しく力は充ち、例へば稿れたる草の雨を得て青きが如く、人は暗より出て光明に
甦る。

さあれ我等は何によりて甦るを得ん、煩悶の暗に仰ぐ所は心靈の曙光なり、生命
の渴きに待つ所は信愛の膏雨なり。懷疑の冬は既に我等を去れり、法悦の春は近く
來らんとす。我等は今踊躍して榮光の首途に臨めり。

實の山行くての路は遙なり、腰に結べる求道の糧は何々ぞ、先づ臨終の事を習へ、
こは亦先覺の賜はりたるはなむけの戒刀なり、今より上る一歳の長き旅路、恙なか
れや安かれとて。

元朝死を思ふ

時は永遠なり、之を序るに歲月を以てす。人は不滅なり、之を節するに生死を以て

す。

人の一生は猶歳の一年の如し。春は生にして、夏は住なり、秋は異にして、冬は滅な
り。乃ち大晦日は死の終りにして、元朝は生の始めなり。

脚を現在の頂に立て、前後を見る、登り來しこし方は生の過去なり、下るべき行く
ては死の未來なり。

生の事は、大晦日の夕に於て之を了すべし、死の事は、元日の朝に方て之を計らざ
るべからず。

人ありて若し、卿何を以て一年の計となすやと問はば、吾は乃ち對へて、「先臨終の
事を習ふ」といはんのみ。

壺中乾坤

惨なれや青春の矜りの花は、運命の霜に枯れ、歡樂の旨まし酒、うき世の風に醒め
はて、うたて半生をおきふし、繁き病の床に送るとも、など宿業のあさましく、果報
の拙きをかこつべき。下賤貧窮の境こそは佛がしたまへる恩寵の苗なれ。病患苦痛

これ善知識と知るからに、鬼魔の祟りと怖ぢもせず、輪廻流轉の歎もなし、觀すれば方丈の病室、さながら久遠の本土なり、莊嚴の道場なり。這裡鎮へに無盡の風光を占めて日月遅く、天人常に充滿して、伎樂歌唄の聲を斷たず。請看よ、六尺病床の乾坤、水雲寬く、箇中別に春ありて百花不斷に繽紛たり。人間の風塵未だ此裡に入らず、一鉢しばし空しと雖も心曾て貧ならず。されば松立て、門には迎へずとも、春は自ら來て茅屋を訪ひ、雜糞喰はぬ身には、きかせまいといはぬ鶯の聲もさし、屠蘇祝はぬ家には、てらすまいとせぬ初日の出の光をも浴び、臨終只今と知れば名聲利養を貪るの煩ひなく、足腰立たねばもの見遊山の勞も覺えず。大牢も食に味なければ食指を動かすに足らず。美色も見るに傾ければ胸を躍らすの能を失ふ。よしあし繁き世のさまは、降るとても空のものなる富士の雪、消ゆるもつむも、病人の知つたことかは、花が咲かうが咲くまいが、風が吹かうが吹くまいが、吾身獨りの世でもあるまじ。寒ければ蒲團に重き猫をも逐はず、飢ゑたれば厨に暴る鼠をも惡まず。さてはまた、執著の業因を怖れては、財貯へざりし明をはこり、愛別の苦を思ふては、妻もたざりししあはせを喜び、生れながらの愚癡なれば、學の成らざりし憾ものこらず。榮達す

べき資にもあらねば、不運を啣つ慢もなく、惜しまるゝほどの材とも覺えねば、死花咲かせんの慾も起らず。かくして吾は病勢の日に日につのりゆくを忘れて、死ぬまでは生きて居るべき筈の命を愛して、昨日を送り今日を迎へ、飛鳥川淵瀬さだかならぬさきの事を思はず、悠々たる病生涯、春曉秋夕、雨よ風よ、わが臥床三昧の樂しきかな。(一月十九日)

筈を竹にするとして竹の垣

あゝ愚なりし吾よ、護念距を越えて薬を害ひしこといくそ度ぞ。省みれば我等が日常の計畫思度分別憶念こそは、徒だむだ花の仇なる飾ならざりしか。よりによく幾何の果をか麻ち得しぞ。世智辨聰の犁鋤、心田を耕すこと深きに過ぎ、善苗信根よく害はれざるは稀なり。苦を除かんとしては苦を念ふて却て苦を累ね、病を治せんとしては病を念ふてなかなか病を長ず。乃至佛に近ずかんとしては佛を念じて愈々佛に遠かる。淺ましみの限りならずや。

基督曰く、爾曹誰かよく思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んやと。爾り我等愚癡

の分別、自ら利せんと欲する所以のもの、適以て自ら賊する所以に歸す。憶想の鼠、日夜我生命の柱を噛み、妄見の斧、朝暮我靈性の根幹を削る。妄想邪念の樊籠を出でてこそ、そこに無何有の郷はあり、大涅槃の都はあるなれ。唯今の我を此網中に救はんもの、唯夫れ離と脱とあるのみ。佛豈遠しとせんや。

然れども思へ

然れども思へ、

逃れんとするによしや吉野も世の中の山なり、三界何れの處か火宅ならざる。一身もと是れ病患の器、煩惱の樊籠なり。誰か裏の醜きを以て鏡をこぼたんや。猿を去て肝を求るは癡人の所爲のみ。

おぞや煩惱の熱を觀法の山に避け、解脱の涼を實相の水に探ねて奔命に疲るゝ人よ、我といひ執といひ念といひ着といふ、もとは是外より來て我を惱ますにあらす、皆我一念の所造なり所縁なり。ざるを只念を怖れ念を忌みてひたぶるに念を捨てんとするは、猶ほ影を惡んで月下に走らんが如し。

毒といひ藥といふ、二者別に存するにあらす、唯之を用ふる如何に在り。我巖に念を離るといへり、實は念を轉するなり、捨るにはあらざるなり。念の用は之を慎むべし、體は遂に之を失ふべからざるなり。迷悟同體生佛一如、亦た々斯の如きのみ。

溪聲廣長舌

書窓の障子紙破れて小さき穴の穿たれしは、いつの頃よりなりしか。夏のほどは心もつかずすぎにしを、夕の露は朝の霜とかはり、やがて木枯し荒ぶ今日となりては、隙をもれくる風の寒さは膚を刺し、骨に徹りて堪ゆべくもあらす。ものうしとて等閑りにおかるべきかは、紙は新らしきとかへられぬ。

よし心づきけんも夏のはどは醜しとこそ繕ひもせめ、驚き急ぎて疾くせんなど思ひもよらず。苦を見ずば集を怖ぢざる、滅を慕ふてぞ道を修する。淺ましの人、心雨らざるに牖とづる燕にも愧ぢずやは。

躓かざりせば、いつまでか脚下を見ずに奔りやしけむ。病こそなかりせば、あだし世の常なきも、露の命の儚なきも、さては宿業の罪深きも、教のいみじきも、道の尊き

も、夢にだに知らずでは過ごしけめげに證道の善知識なる病の手は、吾を火宅の外に誘ひて彼岸の寶渚に導くなり。病の手は吾を苦の牢獄に囚へたりと人こそいはれ、あらず、吾は病のそれによりて三惡道の縛を解かれんとす。ありがたきは逆境のたまもの、本佛の恩寵なるかや。

さゝやかなる障子の破れ穴、心せば茲にもまた吾が爲め大教訓を掲げられたる。奇峰兄の令聞が見舞はれて談しの序で、予は此頃なぐさみに先哲の臨終の有様を調べて居るといふたら、夫人は蕉翁の落柿舎に於ける終焉の様を物語られた。なるほど枯野をかけ廻るといへば、おちついた正念は得られなかつたらしい。禪の堂奥に入つたと云はれる翁ですら、さうであるとすれば、藝術で安心が獲られるといふ説も頼み少ない。元祿の其角も英一蝶とともに、二世紀文の期間であつたといへば、人物としては言ふに足らぬものであつたらう。そこで藝術と人格の問題も一寸疑はれる。近代では明治の俳聖と謳はれた子規でも、「子規隨筆」に現はれた晩年の彼は誠に憐れなもので、生死の外に超然どころか、家人に當りちらし、病痛や貧苦に心を亂されて、命に安んずることすらできなんだ。餘り榮ある最後ではなかつたら

うと思はれる。してみると人生問題を藝術と結びつける上に、その根底にはやはり宗教的信仰がなければならぬと思ふと予は談る、夫人はその通りであると同せられた。(二十二日)

先臨終の事を習へ

「先臨終の事を習て他事を學ぶべし」

われの嘗て此聖句を讀み誦し憶ひ説きたること幾歲月ぞや。然れども今より顧みれば、そは皆あだなりし等閑りなりし。躬未だ痛切に人生の意義に觸れず。青春の矜や、うつろはぬ花の色香の驕り、榮華の影に憧がれの醉心地、耽溺の夢は深うして生死の曉を知らず。

されば靜觀の菓より滴り落つる、落莫哀愁の一味をだに味ひ得ざりし。曠昔の吾は、此句に姪める教訓と權威とを見ること甚だ淺かりき、低かりき。攝化引入の常套語を以て輕々に看過し去りしこそうたてけれ。

思ひぞいづる、半夜病床の夢冷かに、殘燈明滅として萬籟死し、うら淋しくも細り

集 骨 叟

ゆく虫の聲、行く秋の別れを奏づる衰殘の調べ、謂ひ知らぬ哀愁に胸せまり、そぞろ肌寒さを覺ゆるまゝ、口號むともなく斯句の吻頭を漏れたる刹那、電光雲を裂き霹靂地に震ひ、煌めきと轟と、倏ち吾胸奥の靜安をかきみだして、吾は只驚と怖との背を張て、茫乎として所作を忘れたり。神契といはんか默示といはんか。此句より進しり來る強大なる威力は、吾をして得堪へぬばかりの壓迫を感せしめぬ。軀て其不可見無對の偉力、吾性地に根ざしては、生命の強き力となり、茲に一縷感應の糸を吐て、吾蟬遊の小生命を久遠無盡の大生命と繋がしめてき。爾しよりの吾は頓に色心の快暢を覺え、風月胸淨く水雲氣海に寛きあり。ひたぶるに朝露風燈の果敢なき現在を忘れて、悠々として生を樂み、欣然として死を迎ふるの淳善地に近づけるものゝ如し。げに聖訓は力なる哉。

目もそらに名利の巻を奔り狂へる諸人に、あゝ一たびは俯して脚下をみよとこそ、古の聖者の叫びは世々に響くなれ。(二月二日)

今の嘆

集 骨 叟

如何にして病を治せんか、如何にして死より免れんか、はたまた如何にして苦痛を去らんか。げに是れ吾病に囚はれける當初の虞なりき。やがては滿ちくる病の潮、吾生命の汀を浸たし、苦惱の荒濤、閑なく自我の岸を嚙で、海底に動るがぬ巖根を吾運命の終りと觀じ、病的生活に稍安住の想を生ずるに至りては、疇昔の虞いつしか其跡を收め、生死と苦樂と亦以て思ひを惱ましむるに足るなしと雖も、證道の善知識たる病患の大因縁に逢着しながら、何等之によりて獲る所なく、徒らに此妙境を逸せしめんは口惜しの限りなれ。噫、吾今此天啓に眼を開き、此默示に耳を傾けずば何れの日か生死の絆を斷て、永劫流轉の悲を脱せん。樞柄を握て一大事の岸頭に立てる光榮の吾なるぞ、吾が醒むべきは實に是れ斯の時ならじか。吾は須らく疾く自覺の窓を啓いて、天降る靈しき光に接せざるべからず浴せざるべからず。之あらんは今の樂ひなり、之無からんは今の歎きなり。寶庫眼前に横り、鑿鑰掌に存す。吾一擧手一投足の勞は、茲に客作雜役の糞衣を脱して、忽ち長者の儲たらしめん。旃めざるべけんや。

噫愚にして頑なる我等、もし病患の縁に促がされずば、争でか此の難遇の時と難

得の機とに會するを得ん。世に病ある人は福なる哉。

臨終の事

「先づ臨終の事を習ふて後に他事を學ぶべし。人は此聖判を解して、かゝる時こそその命の惜しからぬ、かねてなき身と思ひしらすば」の意となし、唯厭世捨身の決定を以て安立を得せしめんとするなりといふ。誤れる哉。

知らずや、現世現身に咲き匂へる充實生活の春の花、三毒無明の風霜に萎もせず、吾世の末の秋に方て安住不動の果實を結ぶ、是を臨終の事といふ。悔なきの死、恨みなきの死は、止だ悔なきの生、恨なきの生によりてこそ得らるゝなれ。厭世捨身の卑屈退嬰は斷じて吾家の傳にあらじ。

靈肉不滅の意義

我等一或未斷の凡夫、微賤厄弱言ふに甲斐なき身なりとも、渴仰戀慕の誠意を披んで、毎自作是念の誓願を驚かし奉らん、などか妙感妙應の交りの糸に繋かれざ

るべき。微けき脈の響きにも本佛靈血の調べを合せ、濁れる性海の水の面にも大慈の月影すまでやは、觀すれば我等の所作宛がらの佛事にして、所行直ちに菩薩道たるべきなり。我等かりそめの行住坐臥、そこに大能の靈動を現し來る。そもまた骨に力と用と作との上のみにはあらで、實に體と性と相とまた一如にして不異の姿なれ。言ふも愚かや我等が有漏在纏の色心こそは、さまも變らず本佛の清淨の妙色心にてありけるなれ。我等と佛とも一ならば、本佛の色心不滅なる如く、我等が色心も亦不滅なるべきなり。波動けば水從て穩かならず、鏡面毀たれて鏡裏全きを得んや。此意に於て吾は我靈魂の不滅を認め、肉團の常住を信せんとす。世に本佛を離れて靈肉の滅不滅を説くものあり、何れか斷常の二見に墮せずして止むべき。人間個性の靈肉、豈爾く言ふに足るものならんや。

自悔

謙讓と稱だへんは皮肉に過ぎたり、卑屈と嘲らんも尙慊らず、宗徒の氣概久しいかな、衰へたることや。

日蓮の徒といはずして佛教徒と稱し、佛教徒といはずして宗教家と號す。意、佛教を大とし日蓮宗を小とし、又佛教を狭とし宗教を廣となす、故に爾り。

殊に知らず、その信よりすれば、法華一經は八萬聖教の骨髓にあらずや、否宇内宗教の歸趣にあらずや。則ち日蓮一宗は宗教の全部面にあらずや、悉皆にあらずや。部分にてはあらずるなり、一局面にてはあらずるなり、大小廣狹の計はた何を以て之をいふや、彼等見地の高からざる概ね斯の如し。宗風の微々として振はざるも亦宜ならずや。

頃者淨土宗大學、其稱を改めて宗教大學と號す。前に西本願寺佛教大學あり、想ふに之に越えて名の更に大なるを撰び得たりとせむ、其自ら持するの卑き、また感笑に堪えたらすや。

寒ければ炬燵に親める母を煩はすも心苦しく、時たまに訪ひくる姪の外は、病人の思はんほどに届く手もなき者から、幾朝を采配の打擲にのがれたる障子の棧は、三寸の塵堆く、掃見の疊の目には、去歲そのまゝの煤を貯ふ、さては蒲團の下に痛きを探ぐれば、密柑の皮のひからびたる、風に搖らぐ

天井の蛛の巢、煮る鍋の蓋を危む。たま〜島村上の二兄朝まだきに來りて、あなむさや、我等掃除して得させんとて、頼かむりしりからげの姿可笑しくも甲斐々々しく、いなめばとてきかばこそ。床と共に南の椽に運ばれ、また〜くまに室は清められたる、みるからになべての調度處を得て、心すがすがしく、暗く冷たく物凄かりし昨日の椽の名残だになく、新らしき光は映えて、縮室の春ぞ暖かなる、いっばかり今宵の夢は圓かなるらむ。

- 煤掃ふ間を南椽に働作かな
- 掃ふべき煤さへ空し貧寺かな
- 腰櫛や掃くべき煤もなかりけり
- 煤掃や戀さめ顔の男たち
- 煤掃や君汲溪流舌拾薪

(二月五日)

暗 影

人は何の爲に生けるや。

思索の能と自由とを賦せられたる人間の本能として、若くは衷心禁むべからざるの要求に促がされて、何人も早晚一度は逢着し接觸せざるべからざる、最も普通に

して、而も最も重大なる問題は是ならずや。深奥なる哲理として不可解の謎として、古往今來幾世の哲人をや悩ましけむ。然ども事實は端的なり簡明なり、曰く、人の生くるは唯生けるが爲に生けるのみ、人生の目的といひ歸趣といふも、生存を措て他に何かある。げに唯一の生存こそは人生の帛を織り成せる經緯の糸にてありけるなれ。されば人生の野を縫へる所有問題の流は、ただ這般の一流より進り出で、若くば此洪海に朝宗せらる。或は又説をなすものあり、人はたゞ快樂に生く、人は快樂の彩糸に操られて其生を繫ぐ。されば快樂のみぞ人生を貫ける坤軸なれと。然り吾敢て此言を拒まじ、何となれば其謂たゞ生存に冠するに、完全の飾を以てしたるに他ならず。換言すれば生存慾の一層潤色せられたるに過ぎざればなり。

惟ふに生存の有する一面の意は時間なり、生存の事實は一度び時と相交るに及で、茲に問題は價值を姪む。則ち生存なる慾望の内容は、旨と生存の永續に在り。然るに人生の一言には、又死てふ力の儼として横はるを見るべし。這箇元來生と其趣を異にすと雖も、生のある所必ず之に伴はざるなし。生と死とは俱に相離るべからざる伴侶にして、而て又遂に並び立つべからざる警敵たらずや、それたゞ死あり、茲を

以て生存は破壊せられ、目的は杜絶せられ、慾望は禁遏せらるゝの不祥事を現出す。人生の矛盾、天人の乖離、是より説くべく、人間悲劇の幕は始めて茲に開かれぬ。げに死なる大輪棒の一たび人間に轉下して、撞に打撃破滅の猛威を揮ひしより、日月冥々として山河洞然、恐慄の雨嵐暫も息む時なく、平和の輝き地に消えて、人生の曠野遂に永く撃壊の歌を絶つ。看よ、山に攀づるもの水に趣くもの、或は拱手して徘徊し、或は瞑目して佇立す。怖れと苦みと疑と悶えとに、網中の囚はれとなれる群衆が、枯槁の姿ぞ憐れなる。歩みては思ひ、止まりては煩ふ。寐るも醒るも不安の黑影眼前にまつはりて、逐へども去らず避くれども及ばず。むら立ちては雲と漲り、疾風迅雷、土を捲て襲ひくる死の影の、仰げば魔鳥が遙天の翼と擴がりて、容捨なくも時を刻みて、歴下し來れるを見ずや、絶望と憂愁とに今は救を呼ばん力も失せて、群衆は深き沈黙に陥れるぞ惨なれや。

人皆は死を思ふ。怖るべく悪むべく、而て遂に避くべからざる死を思ふ。死の慘苦を思ひ、死の偉力を思ひ、やがては死の何物たるやに思ひ及ぼしては、死そのものを知らんことを思ふ。

噫、人は如何にして死を知らむ、はたまた如何にして生を解せむ。
 人は生を知て而後に死を知らんか、はた又死を解して而後生を解せんか。生は豫
 じめ死を解するにあらずんば知るべからざるか、死はかねて生を知るにあらずん
 ば解すべからざるか。抑又生は只生にして生を知り、死は只死にして死を解するを
 得べしとせんか。

前と後とにこそ異は立つれ、之を單とし之を孤にするに非ざれば、二者遂に解す
 べからずとするに於て、説者は撰を一にせり。これ生に永遠の生なく、死に絶對の死
 なく、兩者相望相關して茲に兩者の意義を成すればなり。

曰く、未だ生を知らず安んぞ死を知らむ。曰く、まづ臨終のことを習ふて後に他事
 を學ぶべしと。

生を先とするものは是論理なり、死を後とせざるものは是宗教也。

人はそも如何にして生を知り死を解せんとするか。(二月十三日)

病床日乗

〇〇日

今日の病室は、千客萬來、島村上の二兄は前夜より和風、東水の二兄を口あけとして、友人知己隨で來
 る。應接に疲れて午後より眠る。小妹來る。母と共に予の蓬頭を刈る、虎斑を作ることに上手なり。雜誌を
 亂讀してこんな考がふと胸に浮ぶ。

△純客觀を標榜する寫生文でも、唯美主義といふ型に拮つた所で價值が出るの
 ではないかしら。自然主義の描寫といふたとて、寫真ではあるまい。客觀の中に描者
 の自觀が籠つて居るとすれば、描者の主觀人格も匂つて居る筈である。假令眞は狂
 げないにしろ事象を盛る器、時間と空間を壓搾して、其中に存する事象と事象との
 間隙を少なくして稠密の度を濃くし、容積を能ふだけ狭縮して描けばこそ、色香は
 強く感覺に鋭き刺戟を與ふるのではないか。若しさうでなく、全然脚色や鹽梅や、總
 じて、アートを擲却した寫實といふのが成立つならば、それは餘りに淡白で間が抜
 けて、散漫で煩雜で無味索然たるものではあるまいか。凡そ興味といふものは好奇
 心に根ざす。奇とは單調稀薄平坦を嫌つて、複雑で變化に富むものでなくてはなら
 ぬ。然るに天然及人事の眞實相の中、人間の好奇心を充たすに價すべき出來事は長

き時、廣き所に於て稀に現はれるものである。故に之を描寫して興味をつけるには、勢ひ世態人情をコンデンスする必要がある。いまだ實世間の風にあたらぬ少年少女が、現今の小説に教育され、奔放なる空想を小さな胸に描て、情熱の血を湧かし、例へば蜜の如き戀の甘さを夢想して、己れと心を酔はせ、いつも月夜に米のめしの考も、さて實世間に當つてみると、案外につまらなく、豫想ほどの味のないのに失望し、苦悶するなども此の爲である。で淡色は濃く色揚げし、中ぶらなものに偏した個性を賦し、判然せぬ線に輪廓をつけて、對向者の注意を深からしめ、印象を強からしめる必要からして、誇大な潤色は文藝や美術の作品に當然あるべきことではあるまいか。かの唯真主義を唱へて頭から、技巧を無視してかゝる自然主義の文藝なるものは、完全に成りたつものであらうか、僕にはわからない。それに自然は唯醜のみでもあるまい。人の意識現象は性慾のみが真なるものでもあるまい。囚はれたる感情もあるが、また一方には拘束されてゐる智識もある。僕等は今の文藝家が情に偏した自然主義を唱へるに對して、相承口傳等の制縛や義學の獄から、智識の開放、獨立を叫びたい。因習の苔に埋もれた宗教界には、殊に自然主義的自覺を急とする。

△主筆來訪横山君の新婚式の話。新夫婦が赤房白房の念珠を掛て寶前に立つ、導師が双方の手を執て組ませる、といふ作法がある。詩的で一寸おぢな遣り方である。
△「深敬」來る、日記の主は守屋文學士であらう。鐘をつくところあるをみて、坐る感興が湧く。浮世の塵を黒染の袖に拂ひ、春は三月都門の花を餘所に見て、身延の山の雲深く、澄むらむ月を觀念の床に眺め、湯々たる溪川の流を讀誦の聲に和して、行ひすませる若き求道者のやつれ姿。一杆手を離てば巨鯨のたけび、殷々として山鳴り谷應たへ、雲に響き風を起して、木靈は遠く縹緲の彼方に消えゆけば、晚鴉林に噪いで山更に幽。こは是れ花につくの鐘にはあらず、もとより戀に泣く人にてもなし、有り難や、果を採り水を汲で大法の奴となり、藥を嘗め膿を啜て菩薩の躡をつぐ求道の佛子守屋君が、榮光に包まれたる端嚴の姿は、髣髴として眼に浮ぶ。

〇〇日

梅が一二輪咲いたといふ。花は三度咲て三度散つた。宿病は依然として活きも得ず死にも得ず、いつをはてとも限りなき病床の眠食を續けて居る生甲斐なき身は、花に對しても愧かしい。

形影録

△苦哉多病身甚矣母三老艸山の願は母におくること一日の後にあつたのである。母を後に遣しては彼は瞑することができぬのであつた。念願満足した艸山の果報は羨ましい。自分もどうかそれにあやかりたい。今の願はこればかりである。母はまた自身が亡き後には、病弱の自分を誰が親味に世話しやう。行末が案じられて死ぬにもなか／＼死にきれぬ。逆さまごとを願ふではないが、卿の最後を見届けてから、心おきなく死にたいと、自分の死ぬのを待て居る。親は子の命を咀ひ、子は親の死を希ふ。親の無慈悲か子の不孝か。我のみは永らへやう、人の命は短かかれと、かたみに祈る母子の心。人が聞たら鬼ともいはう。さびしくもふけゆく時雨の夜半、物思ひに眠ならず。枕頭の燈は光寒く、闇に流るゝ鈍き火影は瞬て、母の寝顔の闇に浮ぶを見れば、頭の霜は白くさえ、衰の俵あり／＼と痛ましい。深く刻んだ額の皺、誰れ故辛苦の記念ぞや、奉養心に任せぬ歎きよりも、わが病の爲に憂きことしげき年月を、おのが身の老も忘れて、絶えぬ苦勞にすこしゆく、母の眼に涙はみせねど、眼前のやつれ姿。あゝ世に自分ほど不幸の子はまたとあらうか。

△加藤恩師が來られて、君の爲に豫葬式を執行する計畫があるからそのつもり

で居よと告げられる。自分も近來聊か内部生活に變化を認め、將に大死一番して新生涯に復活せんとする時と機とに近づけるかに思ふて居る所なので、舊生涯の殻を蟬脱して、前半生を葬るべく、その珍舉を心から喜んだ。會の當日のさまは唯感極て泣くといふの他、自分は何事をも記することはできぬ。何等とりえもなき一病生が、かくまで人の同情に浴し得る幸福は、唯佛天に謝するより外のすべを知らぬ。難有と思ふよりは勿體なくて、そら恐しくも感せらる。主筆を始め諸道兄の温情は、現在の自分を満足と喜悅とに生息せしめる。たゞ憾むらくは世上の果報拙なき身の、諸兄の高恩は此まゝに擔ひゆき、遠き未來の後生に萬々一だも酬ひ參らせんと心に期するばかりである。障りありて狂駕の榮を辱ふする能はざりし、清水古愚教授、小笠原毅堂、宮田禿庵、磯村野風、片野晃陽、刈米龍堂、山田燕南、荒木竹坊、柴田其年、風間萬嶺、山田奇峰、佐藤龍子、其他の諸兄姉に對しても同様の謝意を表するのである。賢弟靈巖の喜びも自分に劣らぬは勿論、殊に予の老母の喜びは譬ふるに者なく、爾後日夜此事を繰り返して居る。尙主筆夫人の丹精、當日の勞は會衆と共に特に謝辭を捧ぐるのである。

〇〇日

△姪去る。病室はまたもとの寂寞にかへる。生けていつた紅梅のいやにとりすました態が艶で、雜然たる調度との配合がとれぬ。空はどんよりと曇つて風が寒い。炬燵を抱て奇峰兄から贈られたアウガスタンの懺悔録をよむ。

△午後のモヒ注射の量を過して脈搏が亂れる。驚いてカンフルを注す。プラスマイナス遂には命をゼロにする、あさましさには自分ながら愛憎がつきる。

△鹿兒島開教主淺野常瑞師來訪、初對面なり。まづ師の體格の立派なるを見て精力主義の人たるを知つた。ゆつたりとして迫らざる談話ぶりに、人を牽きつける力がある。薩州は維新前までは本宗と眞宗とを切支丹と同様、國禁の下におかれてあつた。本宗の禁せられたのは熊本との確執から、所謂「肥後の加藤がくるならば」の兵兒歌にも遺つてゐる通り。清正嫌ひが累を及したので、淺野師が今より五年前彼地に行つた當時本宗の信徒は僅に四人しかなかつたといふ。現今は師に歸依して吾宗籍にあるもの三百餘に達した。眞宗が國禁となつたのは何の爲か知らぬが、其禁制は徳川の初期に布かれた。然るに爾來三百年間、其信仰は潜在的に維持され、綿々と

して絶えなんだ。信徒の家にては、或は穴蔵の中、或は床柱の後を穿ちて彌陀の像を安し、夜更て後に起き出て家内一同でひそかに念佛の修行する、殆ど吾不受不施の内信と同じである。信徒は三十里も離れて居る國境外に寺を建て、漁郎農夫に姿をやつして忍びの參詣をする。京の本山でも又薩摩下りと稱して御ふみを燐寸箱大に縮刷し、常に彼地の信徒に送つた。形の小なるは隱匿の便を計つたのであるといふ。維新當時は水戸と共に最も猛烈に排佛を勵行し、寺院を破棄したが、其後國禁が廢され西南戦争の前年には、西派の大洲鐵然が十八名の志士を得て、此地に教陣を布いたが、魔人の爲にその志士は悉く殺され、己れは獄に囚はれた。越て明治十一年島地默雷師は決死隊を募て又此地に入った。本願寺は師に五十萬圓の軍資を給した。師はまづ十萬金を投じて病院を造り、以て興業館を起して産業を奨め、最後に布教會堂を建設して、遂に魔島六萬の人口中五萬は西本願寺信徒の名を冠せしむるの盛事を見るに至つたといふはなし。魔人は古から頑固で自尊排他の心強く、教化には中々骨が折れるけれど、一旦信じたからには容易く移る愛はない。其上團結力に富み、物事に熱中するもねばり強く、耐久性がある。布教には有望な地であるさうな

海外布教もさることながら、内地にもかゝる未開地のあるを忘れてはならぬ。骨を馬革に裏む覺悟を以て單騎深く敵地に入り、奮闘を續けて居る淺野師のあとを追て二陣をつぐの勇士はないか。宗門は宜しく師に何等かの後援を與ふべきである。

〇〇日

四百四病の外で貧はどつらいものはないといふ、何たらさもしい憐れな愚癡だらう。物以上を見ることのできぬ人の苦とはこんなものである。苦といふたとて高が知れてゐる。猗頓の富があつたとて、内部生活が空洞で、靈性が飢渴を訴へてゐたなら、心は常に貧窮に苦しむ。黄金萬能丸もこの前には藥の効がない。深く心の貧を知れば、口腹飢餓は苦でない。耻でない。古の聖者は假令王侯の位と富と賢とに在ても、尙貧道旃陀羅無知牛羊の身を歎く。併し一旦心に求むるものを得た曉には、陋巷の乞食僧、夷狄屠家の兒を以て、日本第一の富者當帝の父母、國家の眼目となり得る。吾等も亦道の前には敬虔遜讓の態度を執て、世の貧人の感ずる貧苦よりも、一層深き貧苦に陥るのである。而て信仰見證の上には、天下何物にも代へ難き權威と尊貴と巨富とを獲て、世上の富豪が味ふ快樂よりも、一層深き快樂を味ひ得るのである。

吾等の屈伸は物の爲に拘束されず、物以上の域に出入の自由を有する故、世の人よりも大である。従て享受の量も多い。今の自分は未だ物の貧、身の病から離れて、それ以上の深い苦に觸れるほどの修養すら積では居らぬ。向上どころか、尙向下の途中にあるのである。併し歩一歩足を運んでは居る。達すると否とは別として、かゝる享受の資格と地位とを有する自分は、何等多幸の生ぞや。自分はたしかに寵兒である。感謝せずには居られない。

只憾むらくは、此快心事は自分獨りの心に會するばかりで、世人の多くは此心を了解してくれない。但し此意義が解るやうな女が若しあつたら、持參金がなくとも自分は妻とするを許可するかもしれぬ。

△旃陀羅論も久しいものであるが、今月の某誌に族性説があつて、旃陀羅とは漁者のことだと扱つてある。これも耳古りた説であるが、私は最負のひき倒しと思ふ。旃陀羅は屠者の一階級で、吾國でいへば穢多族であるのは否なまれぬ事實だ。漁者の如き尋常の職業でないことは、現に「本尊抄」にもひんせきの意味で、この語が使はれて居るので證明される。大聖人は無論穢多の意義で用ゐられたので、それを救解

するは聖意が解らぬのだ。

△拙稿「形影錄」は圖らずも一部の道友間に同情を以て迎へられたものゝ如く、書を寄せらるゝ未知の心友十數名の多きに達した。惠書は珍襲して家寶とする考である。特に萍蹤、濤峰二君の御差支なくば御名が承りたい。今夜〆切るとして東水兄が居催促急なれば、御對へは次に譲る。今冠鑑親師の事跡調査の爲、千葉に行かれた茂林寺老兄から珍什が來た、これも間に合はぬ。

無題

筆持たば苦しからむといふ、さなり、誠は苦しきなり、然らば止したら如何といふに、やはり苦しきなり、どちらにしても道ればつべき苦ならずば、寧ろと思ひ立ちつ此稿を續く。一字に一喘、一枚かいては一注射、いぢらしと人こそ云へ、六尺の病床別に無盡の風光在り樂地あり、由て以て聊かはたで見程の事なきを得、但憾めしきは、精根頑然想を據へ文を行るに懈く、情姿管腹のみ張る、さばれ飾らず粧はず、耻し乍ら裸々條々、宛然の我を紙上に落さん。雲とは湧けど霧と消え去る思ひの影や觀念のあと、ノートに秘め置て期する他日のありやなしや、宛束なきは筆のみかは、裕に寒き風の朝を女郎花危き椽先に出てみれば、わくら葉に雜る蟬の亡骸、噫、きのふまでは大きな聲で鳴いて、たに。

世間の人は滑稽と猥褻との區別を無視し、坊さんは悟りと信心とを一つにみる。信仰とは至て單純なもの、手輕に得らるべきものと思ふ。説く人餘りに勿體をつけ過ぎたり。

學問や道德に因縁をもつ信仰は雜亂行なり。

自分は信仰を得た爲に、智識が進歩するとは思はざりし。併し善人にはなるだらうと、今迄は考へて居たり。

宗祖でさへ本地は菩薩ならずや、吾等凡夫に成佛の義あることなし。成佛とは爾前迹門の所談、壽量以後本門の教主顯はれ畢つては、佛は久遠の本佛唯一體となる。それだに唯一凡夫が佛になるわけあらんや。

壽量の偈に曰く、一心欲見佛、不自惜身命と、見佛にすら命がけなり。成佛の力は凡夫にない。吾は成佛の語弊を斥ふ。成佛の定義に種々あるべし。

吾等は救はれ助けられて、安心に住すれば足るなり。足らずとも、それ以上を望むべき分にあらず。救ひ助ける側の人たらんは、吾等に分なきのみならず、また要もなきことなり。成佛など大それた非望をたくむものは、僭上慢のしれものなり。若しか

の五性各別三乘家の脚を茲に立つるとなら、吾は一乘宗の圓頓轉ばしより去つて彼にゆかむ。

入信の後には凡夫離れがして、意馬心猿もおとなしくなり、心總て矩を越えず、諸の煩惱あとかたもなく、勿論不善事など爲す筈なき、エラキ人となると誰も思ふなれど、安心の決定が行爲に影響する點より、幾分さる事はあるべけんも、凡夫は依然として凡夫、五欲七情が信仰の爲に無くなる譯はなし。

安心そのものは非善非惡なり。

入信後は是より前行爲に對する無上命令權を有ちし良心が、第二位に墮つるこゝとあるべし。

安心の前に價値の觀念無用なり。そんなものはさらり打ち切るべし。

見性と見佛、開覺と受持、觀心と信仰。

得信によりて俄かに善人となるとなら、信は善を修するによりて得らるべきものとなる。即同質の因果關係たるべし、併しそれでは、惡人には改轉の成佛となる心配なきや。此儘で救はれぬなら、吾等に求道の望なし。人は有智無智を許し乍ら、尙善

惡に拘泥するは何故ぞ。盤特の外に達多あるにあらずや。五戒十善で成佛した例めし何處にありや。

信仰と道徳とに血族的關係あるなし。

宗祖曰く、信仰とは男女相愛の情、その如きものと。信仰は決して小面倒臭きものにあらず。

然らば信仰は何人にも容易く獲らるべきか。否々得信には命がけの努力を要す。その努力は智識や徳にあらずして、却つて智や徳やの囚はれより脱する努力と、救の光を宿すべき自覺の鏡を磨く勵みとなり。磨くには大苦痛大恐怖の砂を要す。是を命懸けの仕事といふ。

曾て人々と共に、河合僧正の所謂苦樂昇沈の佛を嘲笑ひし吾は、今にして僧正が其説を靈夢に得たりて、ふ事實に敬意をおくに至れり。

古今の宗學者は悉く義學の亡者なり。煩悩なる天台の教相に囚はれたる彼等は、滔々として觀心念佛の亞流となれり。秦火揚がらすんば、本化の妙道をいかにせむ。信仰は方便にあらず階梯にあらず。信仰即安心なり、安心即成佛なり。受持一行信

心爲本。上行別付の大法、唯如此耳矣。かの信を能入の門となし、信位を行門の初級となすが如きは、前世紀に在りしといふ。智解佛教學術宗門の名残りのみ。宗教家動もすれば解決をいふ。人生問題の心靈問題のと、小賢かしくも短舌を弄す。愚なる哉、憊なる哉。既に一切を擧げて任せ奉りたらんに、一切は佛のものなり、然るに尙解決の喙を之に容れんとするは、適々佛を疑ふに當る。小智無益解決無用。吾等は只黙して、南無妙法蓮華經と唱へんのみ。

吾は吾が智を咀ふ。あるかなきかの智なれども、今の吾には月下の提灯なり、身中の蟲なり。

信仰に功利の念を挟むは、濃茶でモルヒネを服むに等し。十一プラスマイナスなり、剋殺なり。

消極に病惱を抜きたまへ、貧苦より脱せしめたまへの殊勝氣なると。積極に商賣繁昌子孫長久の我利強慾なるとを問はず、皆非なり、僻ごとなり。あくたを難へたる飯なるべし。

信仰を鼓吹して社會人文の進歩に資し、國運發展の潜力となさんとするも、亦非なり。なし得べしと考ふるは誤りなり。信仰はもと、それらの凡ての没交渉のものな

ればなり。

苦樂と得喪と生死と與亡とに向つて、吾は一切不關焉なり。無責任なり。吾は是れ佛に依るの人なり。(九月一日)

甚深難解無盡の大智と、不可思議の神通力とを具したまへる世父本佛の御前に於ける、吾等凡夫の智力は小きかな。日光の螢火尙比ひにあらず。而して此大智大能の本佛は、我等が爲には主たり親たり師たらむと誓ひ、手もて我等が頂を摩して擁護愛感のまなじりをたれたまふ。誰が家の狂子ぞ、安穩なるべき弘誓の大船より脱して、漫に波風荒き洪海には投せんとする。小自小力の木片果して汝が身命を全ふして彼岸に之かしむべしとするか。蠢々たる愚俗、役々として何をか營む。能仁氏をして涅槃の獅牀、暫くも温ならしめざるも亦久しいかな。

吾子それ本佛照鑑のみ前に於て、また世智辨聰を説くこと勿れ。小賢かしくも烏譚の業なればなり。吾始め人生のゆくてを照す夜光の壁として、斯の智の璞を知るや、衣裡に搜り得て朝碌夕磨幾春秋。千襲珍藏崇て以て寶となし、嚮ふ所掲げて行路

の便りとなしき。然も風雨一夕、人生の秋に驚き、仇し世の曠野に彷徨ひ漂泊ひし越し方の旅の徒なるを悔い、短筇新たに寶落をさして、其縛の茨に埋もれし解脱の道を踏み分け辿るに方りてや、よべまでもたのみたりし吾理智の珠の光、奇しくも頓に衰へて、十乗の暗破るべくもあらず。宜かや一輪の皎月、仰げば高く胸天に懸りて、無邊の清光山河に盈つるあり。心静かにもふけ渡る。吾心靈界の夜半の秋風に輝いて露に聲ある面白のそらあるき。あるにかひなき灯の、ともすれば水を路と誤たれて、今は要なきばかりかは、なくてこそ安かれと、吾は智を捨つるなりき。

大聖のたまはく、一には有解有信、乃至四には無解有信、四句の中には無解有信を正とすと。昔は一往觀心觀境のたはれ技、理智のすさびをも許したれ、佐後の顯發法皇の宣旨隠くす所なく、すりかたぎたる聖境の奠るや、能對解行の規も亦嚴そかに、風格肅然、また曩日容與寬恕の蹤を拂ふ。昔は信解割據して天に二日をかけたたりしが、如今智の僭主亡びて信王寶位をふみ、普天一統四民適從の處を知る。吾心裡の一小國、また智賊を掃ひつくして、信の天下に歸するを見んば、はた何れの日ぞや。

*

*

*

車には心棒がある。車の心棒は重さを支へる處であり、且つ運轉を起す本である。人間には心棒がある、それは主義である。主義は人の立脚地であり、依止處であり、且つは行爲の羅針である。

此心棒が中央を貫いて居るので、末梢からは求心的に本幹に朝宗して、そこに雑多なる思想行爲に統一が保たれ、本幹よりは遠心的に末梢に赴いて支配をする。そこでもつて、人間は直立して直行する、傾かない倒れない。

心棒に二様ある、主我と非我である。心棒の在り處に二つある、内部と外側である。主我は自律であり、主觀であり、理的で眞的で智的で、従つて自由意志的で嚴肅であるから冷めたい。之に反して非我は他律であり、客觀であり、信的で美的で情的で、従つて必然的境遇的で寛容でもつて温かい。

自我一點張りで世の中を押し通してゆく横紙破りは掛くない。われ賢こしと獨立の肩を聳かして自尊の風を切る。寄せくる狂爛怒濤を物ともせず、此腕ふしを見よとばかり、エイエエ聲して乗り切りたてる健げさ勇ましさ、男性的奮闘主義は見たり所頗る威勢は好い。

併し乍ら吾等菟蕪黨には、さして以て申とすべく自我主義は聊か強はきにすぎ
る感がある。吾が持ち合せなる自我の、素より質粗らく鍛へも生まで、如何に軽い
自分の身にも、心棒とするには餘りに脆弱で、頼むに甚だ危険である。初めの内こそ
人真似の、型ばかり小さいものではあつたが、理智張りの一本を横たへて、仆れても
人の力は假らぬ、自分の事は自分の手で始末をつける、遣り徹してみせると鼻息荒
く、りさんでもみたのであつた。さて非力瘦腕の悲しさには、見るみるうちに倦んで
疲れて、總身へとくになつてしまつては、熟々人間の弱く甲斐なく、頼むに足らぬ
愚かさ、眼が醒めて、これこそ命の親ぞと今迄は、しつかりと抱き絶がつて居たそ
の棒を、思ひ切つてからりと自分は投げ棄てた。棄てたは可いが、さてその當座の手
持無沙汰、心棒なくてはたちやうもなく、心焦せつて前のに代るべきよりよきを探
ね求めて悶えもした。

内在の自力を見限つた以上、探ねる言ふまでもない、天上天下唯だ一あるば
かりである。心棒は見出された。確實に据え得られたか否かは、自分乍ら斷言はまだ
なし得ぬけれども、渴仰の主として、臆氣ならずあてはつた。

で索ぐつてみると豈圖らんや、それは前に捨てた自分のものであつた。驚いてよ
くみると、形は擬ふやうなき前のものであるが、實は全く違つて居る。自分の抱て
居たのは地上に轉るがつて居る、龍鐵の一片、今のは大宇宙の軸となつて居る、金剛
の一部と化して居たのである。

人は言ふであらう、それは初めから金剛であつたので、前後の異同は見る目が狂
つて居たのだと。或はさうかも知らぬ。併し自分は、飽くまでも捨てた間に異つたこ
とを信じて居たい。捨てるだけの思ひ切りと、渴に迫るほどの求むる情とが、若しか
こちらに備つて居らなんだら、持てゐる棒はいつまでたつても生まの鐵で、遂に金
剛となるときは來ないのである。

苦の土に生れて苦の身を稟け、苦の生涯を送るべく、夙くに因果づけられて居る
吾々が、憂きに降る涙の雨の晴れまなき、悽慘なる運命の雲立こめて、行くてに望む
光もなく、荒涼たる人生の曠野、茫々として涯てなき行路の留難に、艱み、絶望、嗟嘆の
聲を放たんとし、彼の自らの力を恃む心、猛き人々は、舜何人を佛も昔は凡夫なりと
豪語して、己れと運命の蓀を薙ぎ夷けて、邁進敢往と奮ひ起つ。此時吾等はひそかに

「宗祖九年尙忍苦、吾儕一日豈辭勞と口ずさみて、自から湧き出る感謝法喜の眞清水を掬ひ、濁ける喉を潤して、龜の歩みの心等閑に、絶大至強の天心棒に五體を委せ、示された方向さして、行ける所まで行くのである。

世を出でよ、疾く世を離れよ。

涙に曇る世父大聖の御聲は、心狂へる群衆に向て、かくぞ放たれける。熾然として業焔は燃えさかり、濁煩惱の洪流滔々と漲り溢る其裡に、嬉々として戯れ遊ぶいたいけの子等をみて、世父はかくも呼はりつ、疾く殊の庭にぞ馳せたりしが、無知の童は却て其聲に怖ぢをのゝきて、いや深く煙の奥にぞ逃れたる。笑止や、火はその髪にやきつきけむ、水は其脚をや浸してむ、世父は進みて急に子等を追ひぬ。されどおはれ心を失へる彼等は救の網より身を逸らして、更に渦まく燄の中に其影を隠しぬ。

人皆は、無始曠劫よりこのかた、無明の酖酒に酔ひしれて、心皆やぶられたり。火宅に圓觀の想をなし、耽溺して出るを冀はざる、猶瘡患の熱湯を喜ぶが如し。色食の慾

を縦にしては、我身の斧を己れと頭に加へんとす。徒だ現し世の仇たる榮華に憧れ、儻なき歡樂の翳を追ふて、吾世不斷の春に酔ひ、咀はれたる運命の鰐の頭は前に開き、業報の虎狼後へに窺ふを知らず、鞭影に奔る馬にだも如かざる人の子の淺ましき。かくて永劫を流るゝ慧命の泉は、日と共に涸れかれて性靈の潤ひ乾き、天稟の寶珠空しく衣裡に埋もれ、一期碌々壽を草木に同じうす。斯の如くにして、生何の意義ぞ、人何の價值ぞ。

既にして髮焦げ膚爛るに及んで、遽然として妄見の夢を破られたる彼等が眼には端なくも倒懸のあさましき吾姿を映して、如何ばかりか驚愕の背を決せしぞ。醒めたりし彼が前には、昨日に變る世のさまの、絢爛の彩り耀きし榮華の影は消えうせて、荒涼たる曠野落日寒く風悲し。思ひわびて花に對すれば、おく露を涙と疑ひ、小川のせゝらぎに哀愁の調を聴く。

「散るはちるは酔のさめたる夕櫻。悚然として重擔の生におのゝき、住みはてぬ空蟬の世を思ふ。思ひなやみ思ひ餘りては、不安の悪夢に寢覺の床も冷え勝ちなり。越し方や行く末や、悔恨と憂苦と疑惑と恐怖とは、交々心を責め苛みて、憔悴たる容は

秋も暮なる蝨嘶の鳴音漸く細るばかり。大海原の暗に彷徨ふ破小舟、波のまにまに漂ひしが、纏て夜はあけ風風きて、ゆくてに一抹黒く陸の現はれし如、著世の濱に纜を絶ちしより、煩悶の高浪に弄ばれ、航路屢強かりしも、遂に彼岸近く人生の意義を望み見て、人は踴躍して精進の糧を執りぬ。

世父の賜てし色香美き良薬に唇を閉ぢたりし昨日を悔い、當面堪え難き苦惱に觸れたる醒後の彼等、只管苦の囚れより脱せんとして、先づ執著の絆を断たんとす。願れば身世の淨穢歴々眼にあり、去就既に心に決して、欣厭黙止すべくもあらず。乃ち解脱出離を思ふの一念凝つては、岩に立つ矢の一節に、他を顧るの暇なく、一切を擲却し一切を悲観し、洞然たる劫餘の慘光景を胸に描いて、身土一炬の快事を想ふ。偶々現實に醒めたる人々の、渴逼して求むる所のものは、唯、遮離の一偏のみ。嫌焉たる草庵を後にして、藁地に遂の栖家を探ねて、只管に行くてを急ぐ。途、勝山名水を過ぐるも、節を停むるを思はず、是をしも没風流として咎めんは酷也。

翻つて思ふ。如今吾等は醒めたりや、否也、未だし。吾等時に眉を擧めて、名利風塵の巷に奔る白頭の徒を看しと雖も、吾等が操守も亦岌々として殆い哉。願ふに吾等の

地は物欲の外何物もなき慣々者流を去る僅に一步に過ぎず、吾等は是れ醒めたる人にあらずして、須らく醒むべく、醒めざるべからざるを知るもののみ。然り只知るもののみ、理即を出たる名字の徒なる也。

大聖の御名によりての得脱の欣求は、常に吾が前途一點の光と輝て、望なき命を一縷の望に維がしむ。希は吾衷心大聖の御聲に醒めて、此穢土惡世を後にせむ。吾が意樂既に之に傾き、念ひ切に情熱するや、復かの中庸不偏圓滿無礙の道を念とせず。中庸の道の穩健、依るべきは吾之を聞く、而も始より之を簡び之に就かむは、餘りに無造作に過ぎて、道の尊威を冒さむを懼るればなり。吾は火を披り身を灰にしたる古小乗の求道者に、深き思慕と崇敬とを捧げんとするなり。

説者あり、佛教に於ける一般の傾向としての厭世の訓を憚り、藏中稀に有る樂天的隻語を拮据し、誇耀修飾巧言是れ日も足らず。知らず、厭世何故に不可なるぞ。彼阿世の儻口を開けば、風教をいひ國家をいふ。世道畢竟何物ぞ。況や其説適々愚俗を駭つて、益々著世貪生の淵に急がしむ。兒の病を憐みて、炙せざるは無慈の親なり。俗流の意を迎へて、苟且歡を買ふ笑ぞ、救済の教かあらむ。吾は彼の匿教伶俐の人を惡む。

吾は大聖の權威比なき警告の大梵音に醒めて、心切に世を厭ひ此脚一度此土を離れむを思ふ。(九月二十三日)

病榻日乘

△△日

△朝はいつもの薬餌厨から腕伸して引よする薬瓶の、指に冷たき今朝の觸れ心地、秋である。秋は早や(而して又もや)吾病床に音づれきたのである。

かりそめの病とばかり、鶯の聲も寂びた。春は名残りの懶げな雨の朝を、そも慣れ初めの枕にも、いつか薬の香の滲みこんで、わびしい病床の起き伏しは、越し方の夢をその儘未來の迷路に撥ふとて、花は根に還りしも三度び。缺けては盈つる月の數さへ重なつて、寐覺は淋しい想出の泣く蟲の音に憐れをさそはれる今日となつた。

△若も佛の吾胸に宿りまさず、母そば遠く、世の憂き風を堰く友垣のなかつたなら、昔の吾こそあつたなれ、吾の今は夙くに跡なく消えても居たらう。秋に泣き病に

佗び得る今の吾は、心から吾の今を持ち得た福を祝はねばならぬ。今の吾あらしめた力に感謝を捧げつゝ、興へられ護られたる吾の今を、能ふだけ享樂し受用し尊重して、當面刹那一念の怡安に住し、且つは住しつゝ、順次の刹那を不斷ならしめんを思ふ。

△わが内部生活上の波瀾は、靈肉消長の一事にある。根本から二者の一致融合を見る迄の経路には、兩者の間に幾多の葛藤活歴が演ぜられ、興亡隆替が繰り返される。此靈肉盛衰記は、別の名を神獸兩性の戦史といふ。而して肉亡び靈榮ふるを以て、先づ芽出度き大團圓を告げ、次で更に合致不二の根帯に進み入る。小乗に於ける戒法威儀の生活に亘る制規には、往々此助靈殺肉の方便が見える。刺戟性に富む葷肉を禁じて、性慾の衝動を未萌に防ぐなど、擧ぐれば例はいくらもある。多くの場合靈肉の消長は反比例を示し、神獸二性は病者健者に各遍在して居るのである。病氣は自からにして靈興肉衰の安靜状態に越かしめる。戒制の目的と修禪の所期とは病によりて任運に現はれる。龜心散慮の調御は、無雜作に行はれる。病三昧の境は是れ正心行處である。去丈就尺揀境立觀の牀座である。自分は病人相應の天職として、若

さし経験から購ひ得た一家の「病止觀」を組織し、病之福音を同好(?)者間に傳へてみたいと思ふ。

△△日

○ 空林臥病鶴分餐。驚看襯衣瘦更寬。恨與夜長腸寸斷。孤灯影裡雁聲寒。

○ 鎮日蒲團病裏過。新秋吟苦一蟲和。灯前憐箇頭陀影。比似寒花瘦更多。

前のは清水古梅教授の、後は晃陽兄より寄せられた玉什である。村度も茲迄突込まれると、所謂悲哀の快感に勘なからぬ慰藉を與へられる。

△天は同時に二の福を與へざるが如く、亦二以上の苦厄を併て降さぬ。之を主觀的に云へば、大は小を呑み、弱は強に壓され、淡きが濃きに消さるゝためしで、人ごとに訴ふる暑の苦も、自分の知覺は幸にして、病苦の劇しいのに紛らはされて居るので、素より覺えもせねば、忘れる要もない。眞の暑さ知らずの境界は自分の謂である。誰れ彼もすなる、見榮軀面に餘義なくされての避暑遊散といふこと、懷寒き身の冷

えはちつと堪らへて、人前には額の汗を拭ふても見せねばならぬ笑止さ、言はゞそれもある意味での避暑法であらう。暑はものかはの苦は知りながらも、構へて知らぬげの香氣顔、一枚下は地獄現相恐ろしの、世様々人いろゝのその中に、これはまた瓶裡管ならぬ熱褥の上に横つて、涼風自らにして腋下に通ふ、輕便之に上越す避暑の術が又とあらうや。若夫、日盛や小町の辻の投草鞋の活光景を肚裡に描き來るの時、キラ／＼と眼を射る橋陽の光も、凜乎たる秋水の閃き、肌に粟を生ずるの思ひがある。かの涼を山村水廓に探ねて以て炎帝の暴威より避け得たりとするの輩、身は清流に臥するの心頭一點の熱火は奈何ともなし難く、輾轉反側思は燃て胸を焦がす、それを憐と白眼に睨んで、吾在中樂の藥籠より、無盡の涼風を拈出し來て、呻吟三昧に入出悠々亦快心事ではないか。

△△日

守屋學士と奇峯兄と訪はる。「病觀」をはなせといふ。はなす、はなして居るうちに感興の脂が次第にのつてくる。思想が獨りで言語の車に乗つて拍子よくはづむ。舌の輪は滑らかに止め度なく坦々たる路を轉がつてゆく。時を忘れ病を忘れ我を忘

れて、はては聽てる人の迷惑までも忘れる。守屋君はこれから尺八を買て、歸つたら患者の爲に秋の長夜の伽をしてやるのだといふ。花ちる春の晩には白衣姿の鐘つきとなり、茂山わけては雲の峯に薬を探る仙を學び、あるは茨を誅し土を培て花守の翁となり、今亦月下の秘曲に鬼神を泣かしめんとす。此身讀的詩人の手は久く教鞭と書冊とに疎に、癩病患者の臭き血膿に染み慣らされて居る。稀有なる看護夫を有する身延深敬病院は實に贅澤の極みなる哉。

△△日

富者の使ふ一圓の金は、貧者の使ふ一圓の金に等しとは、價に於ていふ。貧者のもてる一錢は富者の有てる一圓に異らずとは、貨に就ていふ。前者は量、後者は質の上の意なり。唱へたまふ題目と、唱へ奉る題目と同一功徳とは前者にして、一返と十返修行に異なしとは後者なるべし。されどかくては全喻とならず、質量を同一物に示さざれば尙偏計の懼あるべし。

△聖傳劇脚本中淨瑠璃ものは論外として、囃外の中幕物と櫻癡の通し幕のとあり。共に稍見るに足るもの、後者は今回演劇研究會の手にて明治座に開演されんと

す、斯道の獨參湯といはるゝ此劇のことなれば、從來評家も餘り脚色には喙を容れぬやうなれど、吾々から若し出せば注文は澤山あるなり。併し龍口をかげにせず、幕に入れるやうな作者には、與にお話しはできぬなり。

△ふところ手したるキリストは、叩けよ爾らは啓かれむといひ、袒裼したる釋尊は、而強毒之といふ。キリストは、汝生れざりしならばと、ふづくみていひ、吾祖は平左衛門こそ善知識よとは、ゑみていはれたり。これをしも只東西人情の差とのみいふべきか。併しまた數々すればはづかしめると云ふことも、酌みおくべきには似たれど、そは人間同志の交に止るべし。茲に見る釋迦基督の差は、涙の分量に於てなり。溢るればこそ流れたるは釋尊なり。されどまた基督が三十年の短生涯にては、全く人臭を脱却し得ざりしも、無理からぬことなり。山上の垂訓など、吾等にはさほどの幕とは受けられぬなり。

△△日

今日は諸兄の大舉慰問があつた。涅槃圖みたいに牀を繞つて香氣に物語る。鹽出、神代、宮田、山田、柴田、玉谷、小高等の各兄と、それから主筆と松岡の令聞も見える。一座

は興正に湧いて、電話混線の體たらく。其年君は病後始めての上京故、自然と録が集まる。甲府から一里さは是非寄りたまへ、あるよ此頃はモウへイ刺身も自由だ、赤目の鯛ぢやないか、馬鹿アいへ立派な而もなまの刺身だ。満坐腹を抱へる。自分の病苦も何處かへ飛んでしまつた。

△自分が軽車に乗て大道を疾驅する時、トボ／＼と歩いて居る人を見ると、何となく見すばらしく意氣地なしに見えるが、又自分がテク／＼徒歩いて居る時、車上悠々と後塵を浴びせてゆく奴をみると、小面憎く癩に障つてたまらぬと、今日誰やらが談して居た。味のある話と思ふ。我伸れば他屈し、此膨らめば彼萎む。個人と社會の關係はかうもあらうか。

△今朝の讀賣に、女優紀久八の談話筆記が出て居る。男の女形は腰から下に苦心して居る。所が我々女優は、玆の注意がおろそかなので、却て女にならない缺點がある。云々紺屋の白袴、僧の無信仰……。

△先月身延山へ第二回の寫眞を撮りに行つた本社、佐藤昌永氏は、豫定の如く三脚を海拔七千尺の摩尼珠嶺頭に立てた。呼べば應へんづ近間にそゝりたつ夏の

お富士さんが氷肌玉骨。見るからに神往き魂飛んとする。曾て人間に漏れざりし神祕、大自然が苦心の遺作は、擅に暗箱の中に生け取られたる。それを繪端書に仕立例の久遠書伯の疑つた意匠、商品には出来ぬ贅のありたけをつくして、乃公の道如件と送り來さる。展來れば神秀の靈氣楮表に迸しり、白雲枕頭に起つて、病軀忽羽化の思あり。漂渺たる天空を翔てしばらくは褥裡の吾を忘る、御蔭で大分と涼くなつた。

△△日

△現今の流行、天然痘に自然主義、併しまた合成金、人造肥料の需用も衰へず。義太夫より謠曲、謠曲より禪がより高尚とあつて、紳商とかいふものゝ隠し藝にもてはやさる。

△病氣の功能に種々ある。動中靜を觀するの便、靈が肉を征服し得る便、其他。

△解脱は絶對でなければならぬ。絶對とは價値の觀念を泯したものでなければならぬ。第一義諦の佛性を善だの惡だのといふは土臺間違つてる。善まで超越しなくては解脱とさへぬ。

△倫理家の善悪は標準域が明かでない。概念が捉へ難く、強ていへば人が人と相對した場合の行爲の、その結果から割り出して歸納した價値の觀念で、客觀標準のものであらう。佛教などでいふ善悪とは、主觀で情智、客觀で染淨の意義である。だから倫理の善悪と宗教のそれとは同名同意で、而も異質である。よし同じ場合でも範圍は宗教の方が廣い。

△儒教の性善説は第二義に墮して居る。天台の性惡論は一元論といへるだらうか。法性無明の二は俱に眞であるべきを、吾等の頭は第二義的善惡の意で、二者を判つやうに習慣づけられてゐる。

△性善といふ語の意は本體論でなく、現象をいふたものとすれば、兎に角首肯はれる。「しかあるべし」でなく、「しかあり」なのだ。人間は先天的(といふも能力ではない)若しくは後天的に良心といふものが具はつて居て、凡ての批判の根本となつて居る。で人は不知不識物事を見る標準を道徳に据て居る。之が癖になつて、眞に對しても善で律し、美に向つても善で捌く。そこで宗教や藝術を倫理の奴隸としやうとするものも出てくる。

△美人の評判だとしてさうだ。一に容心俱美、二に容美心醜、三に容醜心美、四に容心俱醜。一四は論なし、道學者は三を取り、二を捨てる。審美論者は三を捨て、二を取る。これはどちらも理はあるが、どちらも誤て居る。

△△日

△昨夜庭前に始めて藝の聲を聞く。

自然は生物の聲を假りて、季節の替り目を報ずる。

春のたよりの第一聲は藝の鳴く音である。陽氣は地中から動き初めるのであらう。春は名ばかりの雪まだ消えぬ叢の中から、幾組の夫婦づれが薄氷を破て水田に浮ぶ。産卵が畢ると復たもとの栖に籠て、暖氣になるのを待つのである。援軍の急先鋒は早や見えた。久しくも寒威を逞うして病人を惱めた冬軍の重圍は、將に近きに解かれるであらう。

△假温室の西洋葎が咲く。春さく花は人工で促成することができる。即ち單に温度さへ高めればよいのである。然るに秋の季の花は人工で速めることはできぬ。温度を低くしただけでは効がない。自然もまだ仲々人に征服されぬ。

△今月の「ホトトギス」に、子規が晩年の病中、其叔父に宛てた五圓の金の無心狀があるのを見て、明治の俳聖と謳はれた斯人さへの感深く、異境の旅に道づれを得た心持といふたら、慢であらう。例へにはならぬが、較べたら自分の幸福がそら恐しくも省られる。理齋隨筆であつたかと思ふ、某儒家の塾生が麥飯に苦情を鳴らした折、先生は一同を呼で、昔日蓮上人は身延山の雪中に凍つた粟飯を常食として法を説いた、然るに……といつて諸生を叱つたといふはなしをみた。吾等は物事に不足をいへた義理か、吾等に何の不足があらう。自分は此頃感謝生活といふ一小主義を心の柱としてゐる。いづれ同志の高教を仰ぐであらう。

△標準を比較の上に立つれば、「都會」の災厄は寧ろ用してやりたい。自分には讀み畢つてたゞ不快嫌惡の感じが遺るだけで、實感よりも同情の念がきざす。描寫には過ぎたと思はれる節もあるが、想の上では他の甘たるい挑發的な、所謂自然派のものよりは這間の魅力は寧ろ弱いと思ふ。何はとまれ自覺せる文藝の見本といふものが、かう鼻もちならぬものばかりでは、需用者たる吾等は今の作家たちが、も些し理智に冷えてくるまで、文藝と隔離して疎濶を幸棒せねばなるまい。

△島君と須原屋の主人が来る。病苦を忘れて話がはづむ。先日島君が妙技を揮つた寫眞が、佐藤氏から仕上つて来る。母と予は熟視すれば稍、本人に肖て居る所がないともいへぬ。村上と妹とは其親に見せても恐くは判かるまい。如何に正物が悪いからとて、これは餘りに慘酷だと、二人は厄鬼となつて島君の責任を問ふ。寫眞ではなく寫偽だとて大笑ひとなる。

△大崎の稲田君が来て、「遺文對照記」を贈らる。何れ誌上で紹介しやうと思ふ。尙「論書解題」の原稿を示さる。材料蒐集の苦心は一見してわかる。君の如き篤學の士でなくではできぬ業である。上梓の上は學者の指南車となるべきは言ふまでもない。君は後半生を専心研究にゆだねる決心で、大崎の教職を辭されるとのはなし。

△風間萬嶺君が「充洽園全集」の編纂に就て、材料をあつめる役を引うけ、目録ができたとして示さる。百餘種の内七十餘は既に同君の手に纏まつて居る。そんなに死にたがることがあるかと散々小言を云つて歸る。

△水村君が高田芙蓉君を伴ふて来る。君は大崎の秀才、温かみのある談話ぶり、初對面の心地がしない。

△あゝ人は皆働して居る、佛祖への御奉公を勵んで居る、生き甲斐のない自分は、徒らに佛物を糜して、惜くもあらぬ命を維いで居る、肋骨撫でじとすれど寒さ哉、いとど未來が案じられる。

△△日

△萍縦君に申上候。御尋のこと、小倉山とせしは小生の思違にて、場所は津の御堂前花や仁左衛門宅との事に候。終焉記、枯尾花、笈日記、管菰抄、等異説は無之候。序でながら本誌に翁の晩年は、法華の信に據りたるものと申されたる人あり。單に書寫修行したゞけにて、しか斷するは早計と存じ候。かく云はゞ菅公も頼朝も法華の行者といはるべく候。由來俳の寂味滋味とは禪の骨法を體して、飄逸風狂を旨として自然と人事に所謂情姿を見、一種の詩美を發揮するものなるべく、それも必しも禪が入用なるにはあらず。されば翁の人生觀なども、どちらかといへば悲觀に傾き、厭世にねじけ、所謂空無常の哀調を帯びたる、しめやかなる風情が本領なるべく、打見たる所では積極的樂天的なる法華の剛健趣味は、彼が咲かせし言葉の花に匂ひ居らずと思はれ候。尤も諸法實相論、現象即實在論的の調子はほのみえ候も、かやうの談理

は元來が趣味のものなる俳偕には縁遠きものなるべく、俳に於ける禪と申せばとて、その教理が體現されたではなく、只風趣習氣が入つて居ると申すに過ぎざるべく候。彼の三國相承分統譜の佛頂桃青と列らねたるなどのものゝしきはおくとしても、現に文曉が記に翁と文章との問答を側に正秀が聽て居て、後で丈草に質問したるに、吾問ふ所は言語の俳偕にあらず禪の俳偕なり……芭蕉は實に達摩なるは、など有之、此問答はその幻住庵でやりしに候。蕉翁の風騷趣味は禪だけのことにて、法華まで届て居らざりしといふことは、これのみにても知れ候。かゝることに造詣深くあらせらると御見承候まゝ、乍他事申上候。

尙々

若し芭蕉が法華三昧に入り靈山思想に薰化され、若くは更に本化的に點晴された法華に觸れ、信仰の熱を有つた宗教詩人でありしならば、其詩想はあんなものになかつた筈にて候。

△小諸の秀然君、千葉の同情生君、淺草の延女君、惠箋拜誦肝銘仕り候。

〇〇日

降りみふらすみ爵陶として霽れやらぬ昨日今日、今宵もたそがれのころより、空いと低くなりまさり、雨もつ風は雲のいぶきか、冷かに人の面を拂ふて、蕭殺たる秋の氣のうら淋しくも、襟かきあはさるゝ夜なりけり。

此夜なりけり、白金なる本間僧正の病革まりて、五更の鐘もきゝあへず、曉まであへなくぞなりたまひしは、思へば董上の御他界に、宗門の柱石碎け畢んぬるを哭しけるわれ人の涙の未だ乾かぬに、今また重ねて棟梁地に倒るゝの悲みに逢ふ、時の不祥ぞうたてける。

帷下三歳の思出、音容眼に浮でさながらなり。昨日と耳に新たなる嚴誠慈訓も、今よりは御片身とこそなりつるか。在ませるには明日をたのみて等閑にこそ過ごせしが、靈山の雲深く迹を此土に收めたまへる今日となりては、われらに「醒悟」の曉はありとても、争でか、來歸の時あらん。永劫を毒にやぶられてぞ悶え病む、われら狂子は、世にも憐れのものならずや。

去歲は師走の日はいつなりしか、ゆくりなくも逢ひまゐらせたる某れの席には、池上の猥下も在しける。例ならず歳の寒さに病める身如何に堪え難からむ、心して

湯藥な怠りぞ、とくとく病魔を驅り追ひて、再び昔の卿を見せよやと、懇ろにさとしたまへる猥下に言添へて、交々慰め痛はりたまふ、御情の身にしみて世に難有く覺えしが、あわれかひなき驅鳥の身をかほどまで思召したまはる、御慈みは蒼海も淺かるべく、面目身に餘り嬉しきはたゞ涙なり。宿惡深重にして沈痾は一定不治とさわまり候。さなきだに驚鈍の資、佛祖の御奉公何に果たし候はるべき。惜しからぬ身を永らへて、不知恩の咎を此上に重ね候はんこと空恐しく候へば、今は唯臨終の日の來るに運きをかこち居り候のみと、聞こえあげけるに、僧正わざと聲高らかに笑ひたまひて、心弱きことを聞くものかな、われこそ、はや定命は過しつれ、されど意氣は尙は壯年の昔に變はらず、やはか五年十年にして枯はつべきとて、はては様様の御物語に打興じたまひける。あゝ其條よ其聲よ、今茲の花は見るべくもあらじとこそ、心に期したる身は死にも得ず、却りて吾を勵ましたまひてし僧正は、春も待たでみまかりたまふ。果敢なきは世の慣といへ、あはれなるならば吾身代りまゐらせて、暫しなりとも落日の輝を、此土の教界にとゞめんと恨み長し。

〇〇日

春雨しめやかに降る。森閑たる病室には枕時計の音のみ高し。検温器肌冷めたからず、水薬も齒にしみずなりぬ。春はいつ、いつこよりか吾病床にも來れるなり。

小枕に薬のしみや春寒し

今朝の春千羽の鶴を放たんか

誰がおき忘れたのか、枕頭に、わすれかたみと題した小冊子が目に入る。大崎中學の四年生で、去年死んだ貫名英俊といふ少年の遺牘を蒐めた忍ぶ草である。讀むともなしに讀んで居るうち、いつかつりこまれて巻を終るのに氣がつかなんだ。謂知らぬ情味が胸に遺る。口繪の肖像をザッと見入つてると、堪らず悲しさがこみ上げてきて、熱い涙が頬に傳はる。

元より此少年に一面の識もない、冊子の文だとして何もとりたて、稱するほどのものでない。が飾らぬ書きぶりに何か一脉の匂はやかな温味情趣が通ふて居る。寄宿舎から故郷の師の房へ送つた手紙の中に、常々菓子か蓄へてあつた茶の間の火鉢の引出しを、人に擬して故里戀しの思を語り、又は菊代といふ妹に好物の饅頭を内しよで送つてくれと頼みやるなどの可愛さ。天眞の情は率直の筆と相待て、一個

快活無邪氣の少年が紙上に躍る。天衣無縫の文とはこれらをいふのであらう。今の自然主義を標榜する賣文の徒に見せてやりたい。母へ送つた中に、來年は母上五十三、驚き入つた事共に候。小生が成功の期に近づく丈、母上は反比例に現世を遠ざかり、かくして生が成人の後母上已に老ひたまふといつて居る。誰しも懐く嘆きであるが、成人に至らずして母に先立つた彼の言と思へば斷腸の思がする。臨終の絶筆としては、菊代今まで仲々御世話になつた。それに叱つて計り居て濟まなかつた。どうぞ勘忍して呉れ。今後は英俊に未來で逢ふと思つて、信心を決して忘るな。私が死んだなら、其後御母さんの悲み給ふて、若しもの事がありはしまいかと、夫れのみが心にかゝりますから、其へんの所はよろしく御願ひ申しますと、一字一喘辛くもかき終つて息は斷えたと云ふ。悲壯哀絶、あゝ誰か之を讀んでなかにぬものはあらうや。而て又、假令一代の文豪が錦心を傾け盡すとも、以てよく一字を之に加ふることができやうやと、かいておくと、此夜古愚教授から手紙に添へて、此わすれかたみを贈られる。でまた讀む。思は更に深い。次號に此少年を解剖して、現代宗門の徒弟氣質、宗教教育を受けた青年の一般的东西、此少年の個性信仰觀察學才等を、少し書て

みやうと思ふ。

〇〇日

蛙がなき初めたので、ふと歌といふものをよんでみやうと思ひつく。やつてみる。す々に薬の袋にかきつける。

さすらひやいづくも假の草の庵遂の栖をいざやたづねん

わけ登る嶺の八重雲はれやらすいつかすむらむ月をしぞみん

鷲の山良にして尋ねみよと永久の誓のたのもしきかな

うつし世の夢はうかりし寒かりしされど佛の國はあれ母

〇〇日

關守の唄所望する日永哉

菜の花や利根のふなうた霞みけり

蒼空や地に菜の花を緋桃さく

菜の花や是より左大師道

牛鳴て日は午に迫る桃の村

例の如く牛乳を温ためながら新聞をよむ。萬朝の狂句欄に、「砂糖税齒醫者の書生一人減り」とあるをみて、此句主の性格を想像し、遂に「近所の同情をうける細君の良人」の結論を得た。

理智は冷めたい。冷たいから凍る。凍ればかたまる。かたまれば動かなくなる。感情は暖かい。暖かいから柔らぐ。柔々から融ける。融ければ流れてしまふ。動かなくては用をしない。流れたら役はたゝぬ。硬たなくては噛みきれず、軟らか過ぎては味が無い。凝まつたら暖かみで溶かす。緩るすぎたら冷まして堅める。

そこで禮樂の調合がはじまる。禮の用は節で、相は猛、收劍の力である。過ぐれば頑固となる。樂の用は和で、相は寛、伸張を力とする。越ゆれば放逸となる。故に禮が節に失したなら、樂を以て之を和する。樂が和に流れると禮を以て之を節する。かうした二の絲で雙方から引て力の中心を得させ、雙方から壓して重さの平均を保たせる。そこで以て傾かない、倒れない。

理智一邊の窮屈から脱して、殺された感情を甦らせ、囚はれた自我を放ちて、自然の姿に復し、さながらの道に歸へらうとあせる。現代の思潮に無理はない。併し全然

無拘束無調節な情慾の曝露、野性さらけ出しも、亦甚だ險呑なものではないかと思ふ。

氣壓急變天候頗る險惡なり。いち早くも此氣象を観測して、思想界を警戒するのは、世に宗教家たるもの、是も亦務の一ではあるまいか。

〇〇日

△快樂の範圍は苦しむだけ廣しといふと、未來に待つ春の希望が輝く。疾病は歡樂の租税といふと、過去の陰影が現在を暗にする。只今の冬籠りの炬燵の上から、前後どちらかをふりむいて、自分の座して居る現在の一時を心安くしやうとして、解決を探ね求める。未來の爲めといへば、現在を忍ぶ。過去の爲めだとすれば、當相を諦らめる。諦らめの消極と忍ぶの積極と、兩方面の解決があつて「病の意義」は釋けるとする。さらばその何れに據り何れを選ぶかといふ段になると、それは人自らの性格による外はない。これらは管に病人ばかりに入用なものでない。病は人として最も深刻に痛切に、人生の最深秘處に觸れしめる。病觀は即ち人生觀のエッセンスである。

△地理學者にして政治家たる志賀重昂氏は中央公論誌上に、世に問ふと題して、

當世教育家宗教家など常に道徳を口にする輩に不品行者少からず、之に反して科學者の側に操行正しき者多きは、何故ぞとの問題を提出した。それを今月の文藝俱樂部時評に大町桂月氏が解して、宗教家教育家は平常人を對象とす。故に自然愛憎好惡の情にからまれ、天真なる能はず、物に拘れて己を枉ぐ。科學者は自然を對手とする。故情を撓めたり手段を弄する必要なものから、自づと自然の趣味と融和するやうになりて、品性が高潔になるのだといふてゐる。

△吾輩は思ふ。これは先づ題意からして一往調べなければならぬ。問は凡て教育宗教の職にたづさはるものは、實踐道徳を輕んずる觀があり、科學者の一般傾向として操行があるといふのか、それとも現時代にかういふ現象のあるのは何故であらうかといふのか、後者ならば偶然な出來事として唯事實の探索に止るが、前者ならば何かそこに必然的因縁が潜んで居ると云はれる。問意はどちらか判らぬが、後者は唯時弊であるから深く論ずるにも及ばない。殊に與へて考へてみて、白いから汚點が目だつので、常人ならばさまでにも人も咎めぬ過も、人の師表たるべきものがと社會は目をそばだてるので、教育家宗教家の墮落をうたひはやす。拾つた金を

届け出るは當り前の事であるが、それが車夫であるので正直の名を新聞紙上に馳する格で以て、科學者の品行方正が稱へられるのではないかしらと、疑へば疑へぬこともないのであるのを、拒むわけにもゆくまい。それから又前者だとしても、先づ數の上から統計的に調査して、何れの時代にも必ずかゝる一般傾向があるとの結論を得てからでなくては、問題としての價値が足りない。今假りに歴史上いつでも、どこにもかゝる現象があるものとして考へてみる。

道德家とかいふものゝ方は知らぬとして、こちらだけを考へると、宗教心はどちらかといへば、理智よりも情意に根ざして居る。科學者の研究は智が主であつて、性情は死灰的である。従て宗教家は科學者ほど頭が冷やかでない情熱的である。性格の根本からして兩家にかゝる相違がある。その人生觀も差つて居る。殊に出世間的超現實的主義の宗教家が偏理想を憧憬し、人間罪惡人世無常の思想から、人間社會の制裁などは頭から輕侮し、かゝる故、道德や法律に對して世間の人ほど嚴肅でない。寧ろ抛擲し去るべき、解脱すべき現實であるから、初めより重きをおかぬ。時と處とに欣厭の情が劃然と別れてあつて、自個が支配さるべき制法も渴仰の主も此

現世にはないのであるから、世の道德の權威には服して居ない。故に自然と放縱に傾くのであらう。單に現實に慊焉たる詩人などにもかゝる傾向は見える。況して宇宙には唯神と吾との外に、權威ある存在の何ものをも認めぬものに於てをや。他生には互ひに親となり子となつた六道輪廻の身であるから、束の間の現世に出で居る女の凡ては、自分の娘であらうし、又自分の娘だとして他人といへぬことはない。自他はもと平等無差別であるといふので、自分の娘を妻にした僧があつたとは、康頼の寶物集でみた談しである。親鸞上人も同上輪廻の理由からして、父母孝養の爲めとして、特別に念佛すると云ふのは偏頗であるとして、一生親の爲めに念佛は仕なかつたとある。これらでも大概見當はつくであらう。世間の人は道德が缺けてさへ居らなかつたら、それで全人といはれるが、宗教家はそれ以上の任務がある目的がある。よしや德行は圓滿でも任務が遂げられなくては、全きものとされぬと同時に、徳は缺けて居ても目的さへ達して居れば、その方がよいのだとされてゐる。勿論揚棄戒黃金戒兩全に過ぎたるはないのであるが、若し兩者並立しない(斷じてそんなこととはない)場合には、寧ろ前者を斬て後者を生かすといふのである。勿論以上は現

實を解したただけで、ねばならぬの上からいへばこれは偏頗に墮したものの、不完全なものだといふことは認めてゐる。然らば其弊を矯めるには如何と云ふに、そは自らの問題になる。即ち兩者の性格と主義の異りから来る問題である、早く云へば信仰と道德、世法と白法、真諦と俗諦、及情智との關係及び調和、それが圓滑に解されなくては眞の宗教とはいへぬ。その解決には法華經といふ快刀の在るのを世人は未だ知らずに居る、事的に開顯されたる實相論の逸物、室裡には鳴て居るではないか。

〇〇日

あけにけりくれにけり病床の春三月

鶯よ心してなけ花の主病ゆり

誤植など數へてもみつ日永哉

さめてみても夢の中なる浮世哉

春雨に子守集ふや寺の門

椽側のまり唄止で春の雨

散る花を睨むで立てる二王哉

花の山人みてくらす巡查哉

花吹雪二王の顔に入日哉

木蓮や僧院の晝閑なり

春雨の一夜をねたり奈良の宿

灯に風ありて海棠の雨白し

右春の一ダース、なるとならざるとは自らも知る。拳固を開閉すること三度。更に二指を數へて漸く合點するほどなるが身上とぞ。

〇〇日

春もや、景色と、なふ昨日今日、鶯の喉もきまりて、小川の流れ水温るむ頃となりては、青陽の興趣、露の臺とともに立ち、紅紫絢爛の濃艶は、や鼻にもつくめり。氣はい定かならぬ下筋の時、淺き名にこそ春の趣きは深けれ、將にと未だの追分路、渾沌として未だ別かず、凝然として尙動かざる、本迹未分機法一如、阿字本不生の一念にぞ、春てふもの、意はあるなれ。

病床の春の日永く静けさは大古さながらなり。書に倦んじては、日暮の硯筆持つ指の瘦せたるかな。

△與太郎はある時かういふ疑問が胸に浮んだ。

お日様とお月様とは人間にとつて一體孰ちらが有り難いのだらう。

そこでいろ／＼に考へたわけのはて、それあ、

お月様の方が有り難いのだ。

といふことに決める。何故だと人に聞かれたら、

お日様は晝間の明るいうちに出るのだから有り難くない、お月様は夜出て、暗を明るくしてくれる、だから人間には大切だ。

と説明する積りで、與太郎は此問題がすつかり解けたるに、満足の笑を漏らした。自分は今日まで、飢えざるに滋味を取つて居た、飢を感じて漁り求めたのでない故、食のうまさも味はへなんだのみならず、有り餘れば鼻にもついて、より美食に飽かんことを欲した。勿體なくも冥利の盡きた自分である。廣大無盡の佛恩に浴しつゝある現在を飽き足らずとし、暖かき御懷から我れと逃れ出て、此上勝手な慾望を

逞ふしやうとする。不知恩よりも背恩の罪人である。罪におのゝき、苦に惱み、赦を呼んで縋りついた昔のことは何時か忘れ、狎れては目珍しからず。近ければ瞳をも見ず、御意の有り難き御計らひなるも知らず、妄りに運命境遇の非なるをかこち、却て佛も神も在まさぬやと恨みもしつ、省みれば報讐の空恐しい身ではないか。あゝ、自分は再び飢國を過ぎつて來ねばならぬ、否らざればとても大王膳の珍味を味ふことはできぬ身である。

自分は今夜、如來壽量品を誦して、失本心の狂子たる自分のはかなさに泣いた。

〇〇日

朝まだきより雨しと／＼と降る。音たてぬに春雨の床しき趣はあるなれ。今朝ばかり鶯の聲も聞かず、何となく人戀しの思に堪へず。

△「うきことの尙此上に積れかし、限ある身の方ためさん」心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らむ。自分は此れらの歌をみるたびに人間の「身の程知らず」が癢でたまらなくなる。歌よみなぞいふものは大概感情を偽るか、又は誇張するかの陋習がある。此二首の歌にも尊大自負倨傲のさもしいこゝろが臆ろげならず

表はれて居る。敬虔遜讓の優しい情が匂つて居ない。これは未だ人生の眞の苦に觸れないもの、自惚強きもの、言ひ草で、こんなものをもてはやす人々の氣が知れぬ。蟻螂にも劣る、人の力などをたのむ愚癡、牛羊の智で、誠の道にかなつたか否か、判かると思てる我慢、今の世の學者などにも、此んな考をもつてゐるものは少なくない、倫理的宗教などといふことを、得意げに唱へて居る人などそれである。

身のうき雲は鷲の山風で吹き拂はれるのだ。人間のわるわがきが何んになる。

物の香や浮世小路の春の宵。

春雨や湯屋のかと出る蛇の目傘。

△宗教的生活とは、昔時の所謂如法活命、禁欲主義の戒律嚴守をいふのみでもないが、併し今の新智識を標榜する青年僧の理想とする自恣生活の謂でもあらぬ。彼等が唯一の盾とする大乘佛教だとして、現今の寺院生活の如き放恣的自由を許すのではない。大乘は超戒律でこそあれ無戒律ではない。宗教的生活は何といつても克己制欲主義で、世上の華奢逸樂の生活に反した、非物質的な、質素な陰氣な淡泊なものでなくてはならぬ。強ち富貴に在ては宗教生活が實行できぬといふ譯ではない。

が、孰れかといふと貧乏がふさはしい。不自由と窮屈の中に如法生活がある。所謂脛を枕としての樂、名教の中自ら樂地在矣なるものが望ましい。貧寺は俳句の材になる、和尚様の金鎖りは難有味が薄いといふ。

元政は遠く遊ぶに母をつれ。病人のねだこに母の坐りだこ。

〇〇日

△詩が三百由旬なら、宗教は五百由旬、病に悩み悶える者の安息所隠れ家である。詩は病苦を美化し、宗教は眞化する、眞土潤ふ感情の園生に、此は藝術的悲哀の高調、他は法喜禪悅の共に妙なる馨を湛へた麗しい花が咲き匂ふ。病詩人のうめきには哀樂の節とり、に天地の曲を奏でる。病僧の叫苦は海潮梵音の響、諸天伎樂の調べをと、なふ、併しながら詩人は病の靜觀を得るのみで、僧は併せて更に動觀に入る。彼は自受用病のみ、此は他受用病、彼は病に安んじ病で樂しむのみ、此は病に住し病で働く。詩之人は快樂あるのみ、信仰之人には使命がある。

△臨終の一念ほど神聖なものはあるまい。沈痛哀切感極まつては如何なるものも眞面目にならざるを得まい、其言やよしとは當然である。然るに先人の辭世など

をみると、どうも虚飾の痕が歴々としてゐるやうに見られる。一言で云ふと、氣取るげの厭や味で、多くは熱なき情趣なき冷々淡々たる悟り顔を粧ふてゐる。美装は人の好む處とはいへ、死ぬるにまで虚偽は情けない。多く見た内では、巢林子が、

臨終の際に言ふべく思ふべき眞の一大事は、一字半言もなき當惑心に心の耻を被ひて、七十餘りの光陰、思へば覺束なき我世經畢りぬ、

といふたのと、十返舎一九が、

今までは人のことだと思つたに

おれが死ぬとはこいつたまらぬ

との唯二つだけが眞の臨終の言らしく思はれる。殊に此二人が當時尤も不眞面な職業として、士君子に齒されなかつた戯作者であるのも、亦注意を拂ふべきことで、氣障な辭世が禪僧に殊に多い事實と思ひ較らべたら、人間の研究に少なからぬ興味を見出すであらう。絶世の才筆を有つた巢林子の辭世に、重言だらけなのも、無飾天真却つて尊くも思へるのである。

〇〇日

△日薩上人が、加賀老和尚の遺著上梓を發願された當時のことである。大教院の名義で版權を得ておくことの利を説て、頻りにお勧めしたものがあつたが、上人は可きたまはぬ……もし先師の遺風を慕ふて、翻刻出版を企てるものがあつたなら、それは此方の望む所で、學風普及の爲め、寧ろ獎勵したい位に思ふ。もとより射利の爲めではないのである故、版權などを取る必要もない。のみならず他の福田の防げをするなどは、甚だ愧づべき所爲である。此後とてもかゝる言を進めて、先師の餘光を掩ひ、累を乃公に及ぼす勿れと、痛くも御氣色を損せられたと傳へ聞く。

世の人ならばいざ知らず、上人御平常としては、尋常茶飯事に過ぎぬ。かばかりのことを以て、宏量大度を稱たへ奉らんは、却つて盛徳を瀆すことになる。併し乍ら降りゆく後の世に、或は方外の身にありながら、表には名利の巷に遠く、塵の浮世を餘所に見て、曲木の座、敗荷の裳、如法清淨に行ひ澄まし、さては讚佛乘の文字禪、開祖の衣鉢を傳へて、齒徳共に高き聖者と仰がれつゝも、躬から牙籌を執つて銖利を買家と競うやうな例へんに、祖先が咳唾の餘瀝を舐りて、渴逼の喉を濡はすやうな、かくて開祖の宗門的大徳を、一箇寺の小徳としてしまふ壘斷的、我利に地下の開祖を泣

かしめるやうな、不淨活命の輩が出ぬとも限らぬ。其時それらに喰はすべき喝棒として、はた頂針として此逸話は可成廣く喧傳しおきたく思ふのである。

△曾て活ける法華經を著はして名を馳せたる日櫻師が元政論は、一昨年中京の村上書肆から發布さるべく夙に豫告の聲を大にしたるにも關はらず、憊なくも立消えのあはれを止めたは何故であらう……囚はれたる艸山を見て、吾人は不祀の鬼たらむも、寧ろ後なきの心安きを希ふの決意を得た。

△何々の記といへば、天氣晴朗にして一瓢を携へ、歸つて之を燈下に記すの格式にて、何々の會には、必ず滿堂立錫の餘地なく法雨に霑ふもの。従つて黒梓廣告は決定して「藥石無効、若くは養生不叶」此等は藥石に定命まで延ばし得る力ありと妄信した愚と、併せて自分の不養生は棚へ上げて、罪を藥石に嫁す了簡達とを自白する者にて、如何にも執念深く、思ひ切りわるく、名残り惜しさうにて、卑怯未練の心根が、憐れにもさもしく見えすいてゐる。茂林寺老兄曰く、君は莫比中毒で死ぬのだから、「毒藥奏効」と廣告してやらうと。

△本誌前號深草瑞光寺よりの通信によれば、艸山考に廣本ある由、よもや盜され

たは幸にして替へ玉なりしと、流言を放つて敵に油斷させるなどの猾手段でないは萬人の堅く信ずる處であるが、それにして初耳なり。併し所謂略本でさへ、政事文法典據の配列煩さきを覺ゆるに、それ以上は假りに在つたとしてからが吾等には甚だ要なきものである。高が俗間外典より抄録した遊戯的文字、宗學上沒交渉の書に一大秘書などは、少しく仰山ならずやと思はれる。

△其年兄の大患、どうやら危期を過ぎたとの報。旭泉兄遂に長崎新聞の主裁となり、自今獨力經營の腕を揮ふと申來る。

△沈黙！それには死の影に添ふ暗さと冷たさとが伴つて、絶えずまに病室の空氣を濕めらせ、五月雨といふ季の感じ印象をより深く刻みつける。生の荒涼、衷心の寂寞、孤獨の感などが、痛切なる悲哀と結晶し、一羣塊となつて、病人の胸を壓迫する。只さへ人の氣を腐らす阜月頃、三年越枕に親しんで居る病人の神經は、益異常の興奮を呈する。加之此頃になつては、夜間平臥の樂すら奪はれてしまつた。眠は自分にとつて苦痛颯風から逃れる無二の港であつたのである。凡ての人が「生活の一日」と醒める朝々は、自分には呵責の白洲に引き出される時である。凡ての人が休息の時

たる夜も亦自分には一層苦む時である。自分は無休息無間斷常精進に苦を續けてゐる。自分には病苦以上の苦がある。貧以上の惱みがある。大藥師良醫でなくては治らぬ重病がある。曾て食から味を奪はれたを歎いた自分は冥加知らずであつた。今になると其時の我儘がそら恐しく思はれる。舍利弗尊者が領解の回顧には、當分の時には灰身も同佛であつたといふ。よも此に上越す苦はあるまいと吾からきめた過去の笑止さよ。今は消極の樂たる睡眠の憩すら妨げられてしまつた。致し方がない更に隱家の場所の開拓するのだ。自分は新しい覺悟に入らう、自分はこれから空を觀念から除却して、只鷲地に流れ來り流れ去る時の一點、過去と未來との峽たる現在の刹那に脚を立て、悠久なるべき當來の大苦難に望みて、現在を尙樂(善少地なりと觀じて、安んずるより術はないといふたら、人は復尙快樂に生きやうとする、さもししい心を嘲けるだらう。けれども自分は、かくなつても仲々に、義務に生きるなどの、沒趣味に墮負したくはないのである。

△此の一兩日の病室は、例になく珍客に賑いだ。曾山兄は岐阜より、はる／＼と上てきて二夜の伽をしてくれる。延山の守屋君、久々にて山を出て、奇峰兄とつれだち

て、樂しき清談に初夏の日の長きを忘る。大崎の弔星君は若き血の匂ひを嗅がしてくれる。あとでは苦しけれど友の遠方より來るの樂は、病人にとりて藥餌に勝る効がある。

△消磨し難き一片歌々の心、それでも尙様も變らず半ば冷えたる骸の中に藏されてある。執着と云は、いへ、這般修養の一念向上の志に、もし昇降の識域を付けやうなら、健康者は水平線にある。力を用ゆるは其線以上の域である。病人は病がさせる、邪念妄想の貝殻が重みをつけて、水平以下に沈んでゐる。で先それらから除き去つて、一先水平線まで浮び出さなくてはならぬ。向上の修養はそれからの仕事である。茲が健康者の夢想にも上らぬ、病人の苦心である。餘分の努力である。力と時とに於て、健者の位置は病者に比して二倍の得がある。況して其力の量は病人より多くを有してゐるのである。富者が減税されたやうなものである。鬼に金棒である。病人から見ると、健康者が健康の快樂を味はふとせず、そんなことは勘定の内に入れぬやうな顔をして、その上にたえず何ものをか求めて、得ざれば不平を鳴らすのが勿體なく思はれる。彼の人たちは病人から比べると、勞少くして効多き地にありながら、

内部生活の經營には毫も頓着なく、只外慕に心を役し、無意義に其日を消して居る。それが病人の眼には非常に贅澤にも、氣の毒にもまた感ぜられるのである。

△執着がさせる、死の恐怖が、病を忌み嫌はしめ、煩悶せしめ、焦心せしめ、泣かしめ、わめかしめる。自身も曾て一度はそんな時期を通つてきた。再びそんな單純な心持に返へることができたら、さぞ樂だらうと思つてみる。病は自分にとりては人生問題の一公案である。

△公の誌面を私するの憚はあれど、溢るゝ喜びは獨り胸に秘めおくべくもあらぬ。もとより宿業深く、果報拙なき身、非才無知多病放逸、佛祖宗門に何御奉公の勤をぬきんでたることもなく、徒らに佛物を糜す不忠の吾身である。さるを主筆を始め社中の同人や朋友は勿論、見も知らぬ讀者より絶えず寄せらるゝ濃やかなる同情に、うき世の風をせき止めて寒さをも知らず、三歳永き病床の起きふしを、老たる母と安らかにすこしてゐる自分の果報は、只誤つて賜りたる佛祖の御恵みと感涙に枕を濡すのである。就中京都の杉山藤吉氏が知人の病氣快癒祝として、懇なる慰問の狀に添へて贈られた厚志、其他一週二三通は必ず來る未知の方々の芳書に接す

る毎に、腦は踊る血は湧く、何れおろそかなるはなく、皆掲げて人情紙の如しといふ世に、本誌の讀者諸君の如きあるを廣く彰したのであるが、私事憚り多いから、茲にはその一だけをのせて貰ふことにする。こは南無生と名のる人、消印は甲斐とばかり。

御苦惱如何にも御氣の毒と奉存候——或時は病を忘れんとし、或は樂しまんとすることの、實にお痛はしい事と存候、本日着の誌上の其月其日に、「自己の總てを捧げて、偉大なるあるものゝ前に、絶對の服従をなすのが眞正の智慧である云々」失禮ではありますが、前生謗法の因今生の重病と追ひ來つたとの御覺悟、肝要の事と貴文拜讀の度に存じ居候云々、自分は之をみて泣いた。氷と結ばれ且冷えた胸は忽ち熱湯を注がれた思ひがした。温情は冷たき自分の胸に通ふ。かくの如くにして自分には多くの友の同情につゝまれて、詫しく寝る病床の夢はいつも暖かである。快樂と歡喜とは駭蕩の光を和げて、枯れたる病骨の春も回る。

讃岐の土筆子から隔日毎に寄せられる繪ハガキの墨汁の滲着きしを見て、五月雨は今彼地にも降つてあると思ひながら、あかず善通寺の塔に見入る………まだ

みぬ地遠き友がそゝる懐かしくなる。

備中のマウシウ會席上合作を送り來る、鹽出幹部員が出張して居るとみえる。

御親の恩寵

天の吾に降せる運命を吾が繼しの親と看、吾を運命の繼兒と思ひて、幸薄き身の因果をかこち、昊天の無情をなげきし昨日の夢はさめぬ、運命を繼しき親と頂かすば、争でかみ佛の寵兒たるを得ん。獨り病者に於て愛偏に重しとの御誓こそ頼もしけれ。むくつけきあさみの花、醜き鳥の雛にも、おぼろげならぬ趣味を感じ、慰籍に接するを得る吾が幸を思はずや、越路の糸にあらずば耳を娛ましむる能はず、八百膳の板ならでは口に飽かざるの徒に較べて、吾天地の曠さ幾何ぞ。旅に出て知る親の惠、飢國を過らずば何ぞ王膳の味を嘗めん。有り難きかな逆境の恩寵、皆是み佛の所作み佛の賜ものなり。吾をして富者貴者の家に生れ、性智にして身健ならしめざる運命は、吾にありての達多なり守屋なり。吾らは至心に感謝の意を表せざるべからず。

脚清 若丸

御遠文縮刷一四三四參照

鶴ヶ岡社頭の場

大橋太郎一子清若丸 (假名)

二位禪尼

侍女

下郎

本舞臺正面に大華表を見せ、石段の書割、左右木立道具萬端鶴ヶ岡八幡宮社前の景、此模様里神樂にて幕あく、

甲「やれやれ能うも散りくさるわい、掃くそばからかう散つては、掃くも掃かねえも同じこんだ、貯めてから掃くことにして可内一と休みせうぢやあねえか。」

乙「さうぢや頓作、えいとこに氣がついた、箒もへらず己等も樂といふもの、どれ一服しべえか。」

甲「時に可内お主は昨日の賑ひを知て居るか、」

清若丸

乙「何に昨日の賑ひとな、御縁日ではなし、大名方御参籠のうはさも聞かず、して其賑ひとは、

甲「知らざあ言て聞かせやう、と一見えある處だが、しんみりとした合方どころか、北風ピウ／＼ではをさまらねえ、手ツ取り早く談せばかうだ。丁度昨日の午時下り、人も出盛る御社殿前、容姿なら風采なら、いづれ由緒ある稚兒姿、永い旅でもかけたのか、痛はしいやつれやう、階殿下へかしまり、一心不亂の御法樂、其又聲の美くしさ、大町の白拍子が今様どころの沙汰ぢやねえ、腸へ浸み込むやうな魂が溶けるやうな、聽て居る者は皆棒立、何がさて犬の交尾だにも人山がでける都のこんだ、稚兒が圍は人垣築て、通り路は塞がつてしまつたわい。

乙「そりや初耳だ、して其稚兒とは一體何者ぢや。

甲「さあ何者だか俺も知らねえが、人のうわさでは男にしては美しすぎる、ことによつたら、

乙「何に女だといふのか、そいつあ見すにはおかれねえ、やがてもう午時刻、どれ早く裏庭でも掃てこやうかい。

捨臺詞あり、二人下手へ入る。

唄焼野のさゝす夜の鶴、そは子を思ふ親心、生き死に知らぬ父親の跡を尋ねて清若丸、幼な心を筑紫瀉、故郷の空をあとにして、海山遠く旅枕、そも父上は十年前、鎌倉殿の御不興うけ、罪なき罪に罪せられ、東の國にありととき、その鎌倉へきてみれば、尋ぬるすべも白露の、恵みを神に頼みあぐ、稚兒が心ぞいぢらしき、

と揚幕より清若丸、稚兒姿槍笠を手に持ち、結び付草履、やつれたる姿にて、悄然として出で來り、階前にぬかづき、社殿を仰いで禮拜す。

清若丸、喃喃々八幡大菩薩は日本十六代の帝應神天皇の御魂を祀り奉り、またその御本地は往昔靈山に於て法華經を説かせたまひし教主釋尊と承はる、一切衆生の願を満てさせ給はん爲、神と現はれ給ふとかや、さらば丸が願も納受あれ、戀しき父はいづくにか、今にも生きて候や、知らせてたまへ遇はしてたべ。

唄家居定めぬ養蟲の、ちゝと鳴く音の憐れさよ、父上戀しなつかしや、慕ふ心の一筋に、心をこめて御經讀誦、妙音牙えて朗々と、銀盤瑠璃をまろばして、聴くもの心耳を澄しける。

清若法華經をよむ。此中參詣の男女よりつとひ皆々恍然として聞惚るこなしあり。

唄折から京の二位禪尼、今日しも忍びの神詣で、其御歸館の途すがら、

と禪尼好みのこしらへ、侍女に擁せられ階前に來り、立止りて耳を傾ける。

尼さてさて殊勝なる御經よな、見れば年齒もゆかぬ童の、旅の姿もいたいけな、何の

願か知らねども、深き仔細もあらうかの。

侍女二位様の仰せの通り、都のものとも見えませねど、付き人もない様子。

侍女、光る源氏の若達か、業平朝臣の幼な顔か、ても美しい。

尼何んと、

侍女、イエ、御聲でござりまするなわ。

尼、讀誦の御經は、御館御歸依の法華經と承はる、あまりの尊とさ、此由御館へ申しあ

げ、御持佛堂の御法味を、供へさせなば何かの仔細も、

と禪尼不惑の思入れ、下郎を呼びて、

尼、そちはこれより御館へ伺ひ、有りやう悉しく申し上げや。

下郎、ハ、ア、と揚幕へ入る。

禪尼顧みがちにて揚幕へさしかゝる侍女共去りかぬるこなしにて 幕

頼朝館の場

頼朝公

清若丸

梶原景時

大名

高二重廣椽金襖を立て廻し、頼朝公を正面に大名居並ぶ。少し下手に清若兩手を

つかへ控へ居る。淋しき鳴物にて幕あく。

頼朝げにも聞きしに勝る稚兒が御經、迦陵頻伽も物の數かは、予も聽聞の間、いつか心

の垢も拭はるゝ心地、はてようも習ひ覺えたものぢやなわ。

梶原、何かは知らず涙がこぼれ申したわ、親の死んだに鼻唄歌ふた此梶原を、泣かしく

さつた小童は、何かの變怪で御座らうか。

此時門外俄かに人騒ぎの氣はい、清若驚きたるこなしにて側侍に向ひ。

「あの物音は。」

「いや和子よ驚くまいぞ、今日は由比ヶ濱で首きらるる囚人がある筈ぢや、大方それを通るのであらうがな。」

唄聞て波たつ胸の中、よも今日までは長らへて、おはさぬことゝは思へども、我身のなげきに引きくらべ、不覺の涙にくれにける。

と清若愁然としてうつぶく。

頼朝はて面妖な、囚人の話しを聞き、涙ぐむとは仔細ぞあらん、予が力にかなふことならば、今日の布施に代へて得させん、つゝまず談れ清若丸。

唄問はれて清若涙を拭ひ、

此にて下座の沈んだ相方となる。

清若申上るも恐れあれども、もと丸は筑紫の生れ、幼きより母の手一つに育だてられ候ひしが、物心つき候頃、父なし兒よと友どちにうちはやされ、泣き歸りては母にせがみ、友どちは皆父よぶ人の候を、丸ばかりには、など父のおはさぬや、母人何くにか隠し候ぞ、とくゝ教えたまへとせめ候ひしかば、母人泣く泣く事わけを物語

り候、父大橋太郎が鎌倉殿の御勘氣を蒙り、召し下されて土の半へこめられ候ひしは、丸が母の胎内に宿り候頃とかよ。

唄東の空に死出の旅、果つる吾身は厭はねど、片見の和兒に唯一目、遇ふて死にたや別れたや、是ればッかりが口惜しと、悶えなげきし父上の遺せし御言聽きしとき。

清若天にいませば空をも翔り、地にましまさば草をもわけ、遇ひまらて、唯一言父よと呼ばん、和子と呼ばれん願にて、母に聞こへし甲斐もなく、今日はや彼の世におはさん、父上が、菩提の糧をまゐらせよ、父上戀しと思ひなば、御經よみて孝養をつくすべしとて、山寺へこそ送られ候ひしが、

唄門田のわせのひつちぼを見るにつけても親こひしくははその杜の下露に濡れにし袖をふり拂ひ、東路さして憂き旅寝、かさねかさねてやうやうに、鎌倉にこそつきにしが、父はいづこか白波の行方、のほどもわきかねて。

丸八幡宮へ歎き聞えて候なり。

唄おくせずおめぬ物語、大將はじめ並居る面々、袖に時雨をふらしける。

頼朝はて世にも憐れなる物語、大橋太郎は許し難き尤人、たとへ勅宣たりとも、やはか

助くべき奴ならねど、稚兒が心のいぢらしさ、今日の布施に太郎をそちに取らす
であらう。

梶原笑止や、その太郎こそ、今日由比ヶ濱へ引き出したる囚人、今頃は大方胴と首とが
離れたであらうがや。

清若、さらばわの父上が、

と清若思はず立上り、其儘どうと仆れて悶絶す、皆々立騒ぐ。

頼朝ゆきとなに先刻の囚人が太郎とな、梶原急ぎ具して參れ、それ早う。

梶原ハハッ

梶原急で花道を駆け入る、頼朝心配のこなし、椽へ立出で上手を望む、皆々清若を介
抱する。

此見えよろしく 幕。

(完)

本文は梶原が太郎を危期一髪の間、助け、繩付のまゝ頼朝の面前へ引き具し、親子の對面を見せて
段落をつけ、頼朝の口をかりて法華經の靈驗を説くが主眼なれど、梶原が歸つて來る迄の時間を持
てあまし、尾切り蜻蛉となつてしまつたり。茲は是非野風君が不新兄に助け船を出してもらはねば
ならぬ所なり。

深敬保育園の歌

八重山吹の色褪せて、

夢にまさぐる垂乳根や、

世にみなしごの名も悲し、

這ひ寄る父の膝の上の、

はかなき身とも白露の、

その暖けきをも身にしらす、

恵みにもれしひこばへの、

根をばたゝれし浮草の、

袂つらねてむつまじく、

寄邊なきさに漂へば、

いたいけ姿いぢらしき、

かよはき腕のいかにして、

空翔りゆく鳥だにも、

世のうき浪をわけつべき、

ねぐらいそぐか親と子が、

運命は暗き現し世の、

おくれささだちゆくものを、

咀の犠牲の命かも、

夜さむを泣くやみのむしの、

夫婦が愛の手力に、

ちよ戀しと聞くにつけ、

培いあつき園生には、

見ぬ世の親の偲ばるゝ、

生したてゝし撫子の、

深敬保育園の歌

莖をつらねてをさまさる、

惠の露にそは濡れて、

うれしき色に咲き匂ふ、

おちてはなれし櫛の實の、

ひとりの兒らもゆくりなく、

秩父の山のふところに、

は、その杜の下蔭に、

春は再びかへりきて、

二葉のみどり榮まさる、

さちは宿世の縁しかや、

鐘の音凍る霜夜にも、

ひまもる風を妹と背の、

三二八

隔てぬ中の袖垣に、

せきてぞ子等が夢守る、

思ひはくだく親心、

情になつくいとし子が、

笑顔し見れば月花の、

世の歡樂も何ならず、

望は穢よしかすがに、

子等安かれといそしめる、

めをと菩薩は御佛の、

あはれ奴婢よとことばに、

さちよ光よへにあらむ、

修學旅行の歌

一

曉かけて晴れわたる、

天いと高く氣はすみて、

そよ吹く風も心地よく、

道芝の露ふみわけつ、

健兒三百肅々と、

「谷山」の丘をうち立てば、

夢の末とふ「安房」の山、

行く手に遠くかすむなり、

二

浪路たゆたに行く船の、

鏡が浦の朝なぎや、

修學旅行の歌

白帆輝やく北條の、

港を照らす日蓮寺、

「松田」「大原」早やすぎて、

「三原」の里を越行けば、

風に色ある百千草、

露も香るや「小松原」

三

紅そむる鷺もみぢ、

昔の秋の紀念とや、

永久にも褪せぬ上人の、

聖き血汐ぞ匂ふなる、

偲べば床しけさ掛の、

三二九

修學旅行の歌

松は常盤の深みどり、
梢にたえぬ法の風、

妙の「花房」色榮ゆる、

四

「濱萩」わたる夕風、

「聖人塚」に日はくれて、

音なふものはあら浪の、

音にこそ今は忍ぶなれ、

手向の袖にある露は、

碎けて玉の名残かも、

時得て香ほる昔の花、

御法の犠牲の名も高し、

五

源遠き「清澄」の、

峰ふみわけて谿ふかく、

掬ふ流れの末かけて、

ありし昔の跡とへば、

名にこそ負へれ「千光」の、

くもらぬ胸の「旭森」、

濁世の暗にはのざりし、

日影は代々に照りまさる。

六

赤き心を神かけて、

小笹に止めし虚空堂、

はゝその杜の下かげに、

しぐるゝ袂「涙石」

歩みも重き想出は、

「天津」はるかに馳するなり、

月にかたしく草枕、

夢をあつむる「小湊」や、

七

花橘の末かほる、

とやまの跡は今いづこ、

かはらぬものを海苔の、

見し世やあらぬかた恨、

故里こひし父母の、

をくつき處露しげし、

七浦かすむ鐘の音は、

行く手に近き誕生寺、

八

おきつ白浪末遠く、

六百年の春秋や、

修學旅行の歌

法運世々に啓け行き、

あぐる凱歌の勝浦に、

大原越えて中山の、

大堂高し大銀杏樹、

聖者の蹟をいざとはん、

教の道を一筋に、

編者云、この篇著者が大崎大學の職に應じ
房總聖蹟巡拜の行軍歌として作れるなり

病中吟

今年竹人は三歳の病哉
 草市や君が浴衣の肩細き
 はせを打て雨に淋しき病哉
 鶯のはかつきやらむ草の雨
 去にかての春や病の三年越
 行く春と枕にかこつ一人哉
 行く春や病む身に重き小搔卷
 シグナルの赤さが下りて青嵐
 春雨に濡して見たき櫻貝
 若草をふんでも見たき願かな
 三門の五彩は古りて夕日哉
 病魔詩魔紛然として春の行く

妹の幼きがはし白堊
 橘や昔ながらの硯水
 夕月や夏がき果てたるたかむしろ
 寂莫と晝を夏書の机哉
 結集の論議たけなはや蟬時雨
 わびなれし夏居の日數や閑居鳥
 すさましや夏斷聖者の冷奴
 時鳥夜伽の人の夜とぎ哉
 血になくときけばなつかし時鳥
 旅に病んでひとりぬる夜を時鳥
 五月雨や鶏うづくまる白の上
 くちなしの花はの白し五月暗

雨に倦んじ食滞の腹撫てけり
 紫陽花の雨に亂るゝ小運かな
 星落ちて野に毒だみの花白き
 紫陽花や東女の洗髪
 嵯峨の奥紫陽花のやど探ねけり
 宵の露晨のつゆや月見草
 夕立や施餓鬼はてたる寺の門
 日盛や小町の辻の投わらじ
 雁に身をかりてや訪はん君が宿
 人遠し夢にも通へこの思
 月や蟲や何の良夜ぞ友なくて
 御社とみへて灯のあり野分の夜
 溢れをる神泉苑や野分跡
 ぼろ／＼と草の穂白し野分跡

秋茄子や茶漬の夢も四年越
 菊一輪病乾坤の寒さ哉
 小夜時雨はゝるむ母の夢に泣く
 芭蕉裂く風雨に重る病かな
 百合いけて香に堪えて居る病者哉
 はだかりて脩羅とせめぐや雲の峰
 長命も懶巧も金でかへる世ぞ
 吾魂をさそひに來たか秋の蝶
 殊菊や幾夜の霜を堪ぬべき
 厨空し鼠も荒れぬ夜寒哉
 盡十方久遠の風や初日影
 我死なむその日はいつぞ初曆
 門松やわれ病で尙死にも得ず
 われ病んで母のわかぎれ笑ふ春

四 言

友から来る手紙の長いのは友が失意の境遇にある時で、短いのは得意の境遇に居る時だ。心寂しい時に情は濃になるもの、僕の且元日號に曰く「借金の暮の苦みなかりせば、などかく今朝の樂しがるべき」之を逆境の恩寵といひ、如來大慈の御計らひといふ。

意志が弱いのだと責めるより境遇が悪いのだと思つてやれ、品行の正しいのを譽めるより血の氣の少ないのを憐んでやれ。

○ 「散る花を追ひかけてゆく嵐かな」社會は常に如此慘虐なり。如此社會は又常に高き所に土臺を置かんとするなり。「行くな雁何處も次の浮世ぞや」の悲觀は無理や。荒涼たる社會吾等は何處にか「我と來て遊べや親の無い雀」の福音に接すべき。曰く戀愛？曰く宗教。

○ 自ら疚ましと思ふことを師や親の前に行ふを憚かりしは昔のことなり。今は己よりも年少の者に氣を置く吾となれり。自律の目安を義務の觀念に取ると責任の自覺に据うると孰れか勝れる、親漸く老いて與みし易きに至るとき、人は子を産んで自らを縛するなり。

四 言

單純なる頭腦が苦を感じる度と量とは、複雑なる頭腦が感ずるそれよりも微弱なり。感ずるが苦のみなりせば、吾は文字無き人を羨まむも、吾等が喜ぶる快は彼の人々の、企て及ぶ能はざるものなるを思へば、吾は老莊が導の手を拂ふなり。

○ 「枝垂柳に櫻を咲かせ梅の香りを持せたい」是希望なり理想なり、何人も有するところなり。而も不如意の三字は常に意地悪く人に附き纏ふ。此希望のあるものにせざるゝによりて、人生に波瀾あり色彩あり。茲に於てか「瀧田川無理に渡れば紅葉が散るし渡らにや聞かれぬ鹿の聲」の嘆あり。情と義理との衝突なり、愛と信との矛盾なり。煩悶々々人生の味茲に至て嚼みしめらる「思なき雲の上まで行くものは月見る夜半の心なりけり」に至ては絶望の叫なり手負のうめきなり、慘ならずや。

○ 煙草の吹殻にも並ばれた火が、岐阜提灯にもとされると、涼しいとてはやされ、花が咲いた頃には邪魔にされた風が、月の曇つた時にはなくてはならぬものとなる。時なる哉、處なる哉。

○ 逆撥一人にてもあらん内とは、折伏家の意氣込なり。順縁一人にてもあらばとは、攝受家の言分なり。敢て問ふあけの明星は夜のものなりや晝のものなりや。環の端は一點也。一年の月を曇らす今宵かなの句を仲秋無月と解するものあり。十五夜の晴れたる月を詠めるものといふものあり。實は兩様に通するなり。訓詁學者の白髮の種。如斯凡て對者をして被害を知覺せしめずして、偷盜邪婦を犯し得る法に催眠術あり。

凸

○ どの位怠けてもよきかを示すものは時計なり。即ち悪事はどれ程までなし得るかを説く者は法律也。離苦得樂とは俗人を釣る餌なり。苦樂はもと絶待的に存在すべからざるもの、苦ありてこそ樂あれ、苦なければ樂もなし。苦をば苦と知り樂をば樂と悟りて茲に眞の樂はある也。局外者の言議は多く眞理なり、客觀的なれば公平に幾し。家庭を論ずるものに聽くべき價值あるものは、未だ家庭を形作る者の言なり。家庭を作れるものゝ家庭談は憶氣談也。

語

○ 蛙 蟬 會
あま蛙曰 地獄の繪を見ると閻魔大王の服裝は唐時代のもので、亡者の頭のゆひかたは元祿頃の風俗をしてゐる、吾々

凸 語

○ は見慣れてゐるから何んとも思はぬけれど、今時新風にこんなものを出したら入ヶ間しいことだらう。

○ フロックス曰 日本の佛像を印度や支那のと比べて見たらその道理がわかる、行基などは仲々抜目のない坊さんだ、此時分から和装の佛様は日本人の相好となつてゐる。

○ 黒星曰 夏の蟬は其色青く、秋になると黄色となる、佛様にも保護色の必要があるのだ、いや是はもつたない。

○ 蝦茶曰 僕が甘黨と辛黨とを比較研究した結果を報告しようなら、品格維持の上から言へば勿論右黨の勝である。併し趣味を感ずるといふ點では、右黨は價值なきものである。菓子には精神を刺戟し興奮する力がない、従て興を助ける働がない。菓子は倫理的で酒は詩的のものである。下戸が酒を解せざる點は、酔醒の水の味以上にあるものを信得する、とができぬところにある。

○ サイノロジ曰 「女房と酒うちのもんで」の辭に僕は非常の趣味を持つてゐる「夕顔棚の下涼み」などの句は到底側へもつけない、雌雄の裸虫がぬたとて詩にはならない、女房と酒圓満な平和な愉快な家庭が目に見へるやう、一句の中に、吾祖の面影がありありと浮んでゐる。これがもし「女房と菓子ち喰つて」とあつたら、さッぱりだ。

宗祖非萬能論に就て

御文中に見え候所謂宗祖非萬能論に就ては、實は小生等の關係に有之候。非萬能論とは彼徒の勝手に附せし戒名にて、強て逆へて小生の意を誣ひたるものに候。小生は勿論吾祖を他と比較し、より勝れたるものあるを認めたることを曾て無し。且又その部分的にしても、例へば宗祖の科學的智識が現代の人に及ばざりしとて、それを捉えて宗祖の不明欠點といふが如き幼稚な考も無之、此等は畢竟宗祖の價値に何等累することなしと存するものに候へば、宗祖が當時に於て芭蕉は雷によつて生長するなどの説は非理なりとか、琥珀の吸塵は電氣磁力によるものなりとか説かれたりとして、それで宗祖を豪らい人と思ひ、宗祖に對する崇敬の念を増加するなど、小供らしいことはまさか思はず言はず候。彼等が故意に生等の言を宗祖を悔つるものと吹聴するは例の手段にて、古の宗論などいふも、多くは論理を辿らず勢で押し通し、氣で負かすのに候。彼等の筆法いつもそれにて候。尤も小生等の言議、固より突飛不遜淺學の身のほど知らず血氣にまかせて輕率にふるまい候と、實に今日では穴へも入りなき思に候へど、當時に在りては一面舊慣的信仰の無理強い壓制注入、頭から批判を担みて吾等の理性の存在を無視する極度に達し、(小智を捨てるは自覺からでなくてはならぬもの、勿論

今日にては人間の理性など自分から無視して居り候)強て科學に叛けよとまで言はるゝ様なるに憤り、一面舊教權が自個生命の力となる威を失ひ、同時に之に代るべき信仰は見出す不能、内部空虚の苦しき飢に迫りて擧げたる叫喚に他ならず候。宗學の破壊だの信仰の擾亂だの、謀叛人のと大騒ぎするだけのれうちあるものでなく、只過渡時代に漂はされたる神經質の若者が、懷疑的煩悶を告白したまでのものなるに候。つまりこれを捉えて彼等が新式に蓋を呼はつたまでに候。故に小生とても宗祖の妙判を議して是非したのではなく、對手は先師人師にあるに候。それを彼等は任意に宗祖をかつぎ出して、小生と對せしめたるに候。

例へば攝折論の時も、小生は二論何れに於て結着し居るものなれば——宗祖の言柄として明かに何れも云ふ用なし。而るに滅後先師の間に議を起したるは未定なる故なり。己に未定なれば言を拵むの餘地あり。(彼等は宗祖は唯折、本化宗學の全内容は只折伏と定まつて居る。五字も一念三千もこれだ。後人の容喙を許さぬ聖格だと叫んだ)且つ先師もやつたのなれば、吾等も試みる權利なきにあらざるべしとの態度を大體とし、且つ直接宗祖に向つて二説の是非を言はず、御妙判とても、凡て先師の

叟 骨 集 終

宗祖非萬能論に就て

引用したるものに據て議を立てたり。故に非折伏と云ふたとて、直ちに宗祖の行化を否定したのでなく折伏論者行者を否定せる意なりしなり。而るに彼等は一も二もなく妙判を楯にとり、吾等の失をもてに曝らし、これに敵するものは宗賊だと呼びはる。何とかの袖にかくるゝ卑怯のふるまい、腹立しけれど、小生等の割のわるき地にあると夥しく、他からは謀叛人視せらるゝも無理ならぬことに候。生は決して宗祖に一失だも向け奉りたる覺えなく、先師と彼徒を對手としたるに止まるに、彼等は宗祖を奉じて吾等の失面に安くなり。又前陳部分上にも宗祖を議したるにはあらず候。

陳しておき度、心にもなき汚名を付けられ、干すよしもなき濡衣も口惜しく候へ共、面倒にてその儘と相成居候處、尊兄の五稿中、それに関し御同情らしき救の意味の文ありしを見て、茲に尊兄に訴へおくこと、最も其人を得たるものなるを知り、病中實に一字一喘の筆を呵し、辛うじて僅かに要領だけをのべたる積り、尙詳しきことは息ある内、今一度戦つてみるつもりに候へば、その節に致すべく候。

かき了りてみて、發病以來、こんな長いてがみをかいたのは、これがはじめてなるに打驚き候。また熱が出ればよいがとあんじ乍ら擱筆。

大正二年三月六日印刷
大正二年三月十六日發行

叟骨集奥付

發行兼
編輯者

東京市下谷區北稻荷町卅四番地
山田一英

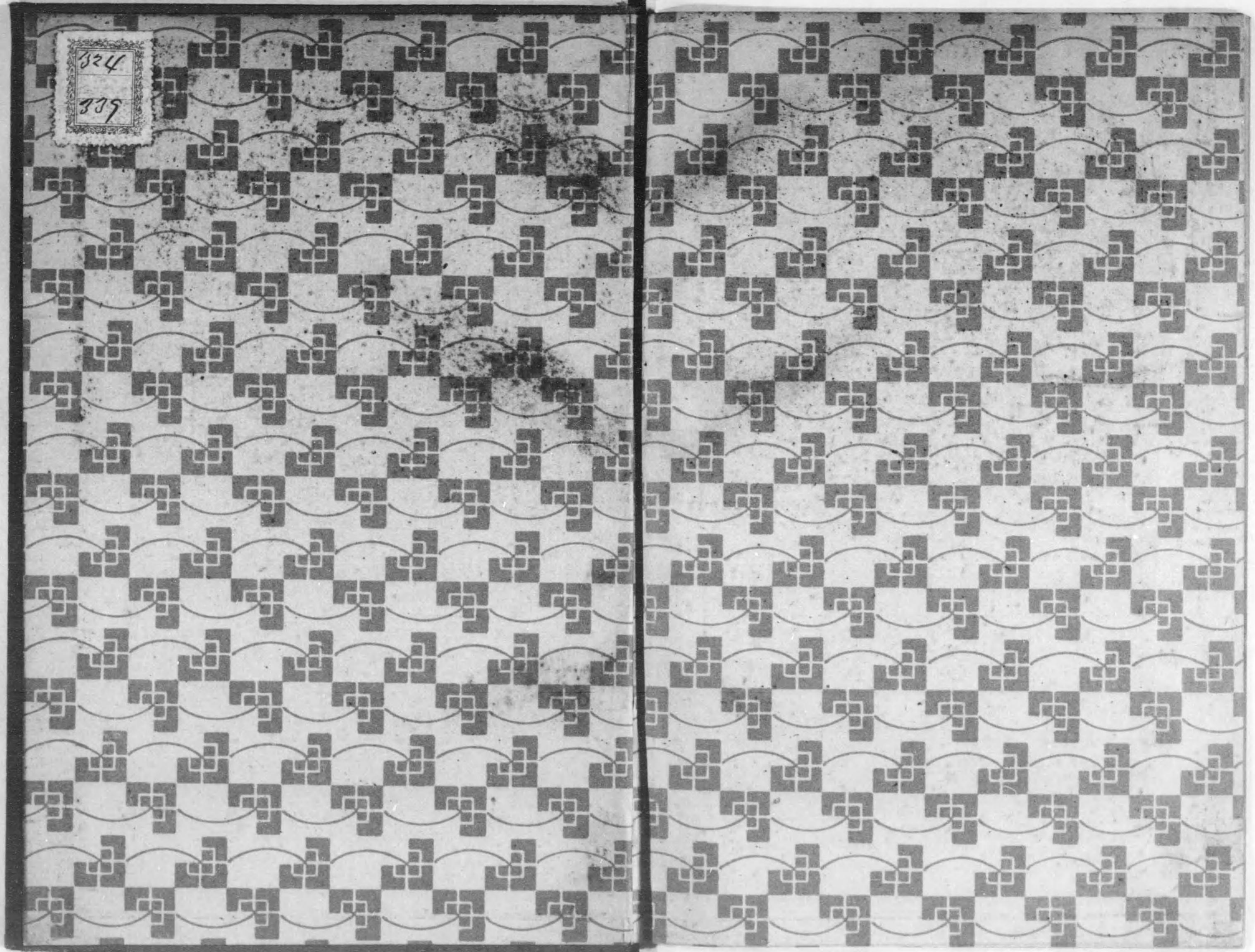
印刷者

東京市京橋區弓町二十四番地
金子久太郎

印刷所

東京市京橋區弓町二十四番地
三協印刷株式會社

324
339



終

